



第一章

1

「これから貴方の人生の時間が遡って行きます……そして貴方の心は、今までに貴方が一番楽しかった時にまで戻って行きます……良いですね、リラックスして下さい……」

セラピストの女性の声は抑揚が無く、少しエコーがかっている様に心地良く響いた。

それは無機質で、まるで天から降って来る様な音色だった。

その声を聞きながら目を閉じてベッドに横になっていると、今にも眠りに落ちてしまいそうになる。

「それでは高本進さん。私の言う言葉を良く聞いて、心のままに素直に感じて下さい。そして貴方の目に見えた物をありのままに教えて下さい……」

「はい」

2時間で6000円と言うカウンセリング料を払っている以上、心底から浸って元を取らなければ……と言う貧乏根性で進は心を素直にしようと勤めた。

「貴方の目の前には下に向って降りている白い螺旋階段が見えて来ます……見えましたか？」

「……はい」

「その階段をゆっくりと降りてみましょう。真っ白な螺旋階段です。一步一步降りて行きます……ゆっくりとカーブしている階段を回って、貴方はどんどん下の方へと降りて行きます……下の方からだんだん何かが見えてきました。何が見えますか？」

「トンネルがあります。暗い、細いトンネルです……」

「それを見ているとどんな気がしますか？」

「怖い……」

「怖いですか？ もうその先へは行きたくありませんか？」

「いえ、何だか、行ってみたい」

「それは時間のトンネルです。そのトンネルを抜ければ、貴方が今までで一番楽しかったところへと行くことが出来るんですよ」

「はい……」

「さあ、行ってみましょう。心配いりませんよ、勇気を出して」

「はい……」

「トンネルは暗いですか？」

「暗い……でも行きたい……」

「行ってみましょう。トンネルを入れて行くとず〜っと先の方に光が見えて来ます。最初は小さな星みたいに輝いていた小さな光が、だんだん近付いて行くと大きくなってきます」

目を瞑ってベッドに寝たままの進は、そのまま眩しそうに顔を歪めた。

「今貴方の全身を眩い光が包み込んで行きます。あまりの眩しさに貴方はもう目を開けているこ

とも出来ません」

「ううっ……」

「そしてだんだん光が貴方の身体から引いて行きます。光の強さが弱まって、徐々に周りが見えて来ました。その場の空気も、温度も、臭いも分かって来ます……どうですか、何か見えませんか？」

「……ここは……原っぱです。下の方には海が見える……高いところにあるみたいだ……山の上の……風が吹いて、空が青くて、白い雲が、凄い勢いで流れてる」

「そこには誰かいますか？」

「はい、人が……」

「どんな人ですか？ 知っている人ですか？」

「あれっ、あれは……クーだ、あっニンジン、シュウ、マキロンもいる……」

「それは誰ですか？」

「…友達です、小学校の頃の……あっ、シュウ！ なんだよ、ずるいぞっ！」

進の声が急に小学生の様に子供じみて発せられた。進はベッドに寝たままなのに、まるで辺りに何か見えている様に顔をキョロキョロし始める。

まるでそこらじゅうを走り回っているかの様にベッドの中で身体を揺する。

「そしたら今度は僕が鬼やけん、みんな良いか、いくぞっ！ いーち、にーい、さーん、しーい、ごーお、ろーく、しーち、はーち、きゅーう、じゅうっ！ あっ！ ニンジンみーっけっ！ へへーんだ」

進は友達と缶ケリに興じている様だった。屈託なく笑う進の顔はまるで小学生そのものである。缶を蹴られない様に気を付けながら、進は夢中になって辺りを駆けずり回っているのだ。

「絶対皆つかまえちゃうけんのう！」

目を瞑ったままトリップした世界で遊んでいる進の様子を、ベッド脇の椅子に座ったセラピストは満足気に見守っている。

進が横になっているベッドの脇に置かれたタイマーを見て、セラピストはそっと進に声をかける。

「はい、それでは高本さん。私がみつつ数えたら、貴方は目を覚まして今の自分に戻って行きますよ。良いですね、いち、にい、さんっ！」

進は目を開ける。気がつくところには海を見下ろす高原ではなく、催眠セラピーを受ける為の小さな個室のベッドの上である。

急激に現実世界に引き戻されてしまった進は、自分が今まで見ていたことが夢だったことに気が付き、ガッカリしてしまう。

「どうですか？ 大丈夫ですか？」

「はい……」

「どんなお気持ちですか？」

「楽しかった……」

「疲れを感じているでしょう。お疲れ様でした」

思いがけず涙がこぼれて来る。

進が鼻をすすって涙を拭いているのを見て、セラピストはテーブルにあったティッシュを差し出す。

「どうぞ、暫らくゆっくりなさって下さい、落ち着くまでお休みになって頂いて結構ですから」
「ありがとうございます」

胸元までかけられていた薄い毛布を取って上半身を起こす。

進はネクタイを取ったワイシャツに下はスーツのズボンを履いている。

進は以前から仕事の外回りで前を通る度にこの店のことが気になっていた。

『催眠療法・ストレス解消して極上の癒しが得られます』という看板の宣伝文句に心惹かれるものを感じていたのだ。

高本進は35歳。仕事のストレスが溜まって、近頃何をしても疲れが抜けない様な日々が続いている。

それまであまり心療セラピーや催眠療法と言ったことに興味は無かったのだが、6千円で本当に心の癒しが得られるのならと、物は試しと言う気持ちで門を叩いてみたのだ。

セラピストによる催眠効果で進は記憶の中に残る一番楽しかった時へと旅立っていた。

それは進がまだ九州の大分市に住んでいた頃、小学5年生の時の遠足で海岸を望む高原へ行った時の思い出だった。

その中で進は大勢の友達と思い切り走り、思い切り笑った。出来ればそのままずっとその世界に行っていたかった。

セラピストの声に呼びかけられて目を覚ました時、何故いつまでもあの世界にいさせてくれなかったのかと、セラピストに腹を立ててしまったくらいだった。

そして悲しくなった。あの楽しい子供時代に比べて、今の現実は何て白けてストレスに満ち、詰まらないのだろうと。あまりのギャップに悲しくなる。

帰りの受付で次回の予約をお入れしますかと問われたが、進はまた連絡しますとだけ言って店を出る。

4月の夜の東京はまだ新入社員等の歓迎会も多いのか、あちこちで酔っ払ったサラリーマンたちのグループが騒々しく漂っている。

退行催眠と言うものがここまで凄いとは思ってもみなかった。

進は先ほどまでいたあの少年時代に切ない程の郷愁を覚える。ああ……出来ることならずっと目を覚まさずにあの世界の中で遊んでいたかったなあ。

本当は次の予約も入れたかったのだが、安月給のサラリーマンで小遣いも少ない進には6千円と言っても大金である。それ程の余裕も無いのだ。

仕方ないな……小遣いを切り詰めて、来月にでもまた来よう。と思いつつ繁華街の雑踏を歩き、電車に乗り、帰途につく。

「鬱病」という言葉を最近よく耳にする様になった。特に営業成績やノルマを課せられるサラリーマンに多いと聞く。

恐らく自分もご多分に漏れずその口なのであろう。と思う。鬱だなんて、最近まで自分には縁の無いものと思っていた。でもある日ふと、一日中笑うこともなくむっつりと過ごす日があるこ

とに気が付いた。

それでも以前は一日そんな日があっても翌日にはケロッとしていたのだ。だがやがてそれが翌日も鬱の状態を引きずる様になり、やがて3日続き、4日目に直り……と言う様に鬱状態になっている日の比率がだんだん多くなって来た。そして今では一週間の内で気持ちの晴れる日が1日か2日あれば良いくらいにまでなってしまうていた。

家にいても押し黙り、子供といっても、テレビでお笑い番組を見ても空笑いしか出て来ない。ああ、最後に腹の底から笑ったのはいつだったろう……。

新宿駅から京王線の快速に乗り換えて、最寄の国領駅までは途中のつつじヶ丘駅で各駅停車に乗り換えて25分程であった。

帰宅を急ぐ人の群れに押し流される様にして駅を出て、駐輪場から自転車を引っ張り出してマンションへと向う。

3年前にマンションを買ってから、もうすっかり通り慣れた道を自転車を走らせて行く。

顔に当たる夜風が心地良い。まだ先ほどリアルに甦った小学生時代の甘味な思い出が全身に痺れをもたらしている様だ。

マンションに着くと入り口の脇にあるピロティに自転車を止め、エレベーターで4階へ上がる。

「ただいまぁ」

「おかえりなさい」

ドアを開けると奥の部屋から妻の好江の声が聞こえて来た。きっと娘の美由を寝かし付けていたところなのだろう。

そっと靴を脱いで玄関を上がり、廊下を歩いてそうっと奥の寝室まで行き、中を覗いてみる。

「パパ……帰って来たの？」

小さな子供用ベッドに横になった美由が進に呼びかけた。

「ただいま、美由ちゃん。ごめんね遅くなって、また明日お話しようね、お休み」

「お休みなさい」

ベッドの脇にいた好江が美由に毛布を掛け直してやり、進に振り返って微笑んだ。

進は居間に入って鞆を置き、スーツを脱いでソファに掛ける。

「お帰りなさい、遅かったね」

美由を寝かし付けた好江が入って来る。

「うん」

「何か食べるでしょ」

「ああ、先に風呂入るけど」

「うん。沸いてるから、入ってる間に用意するね」

進はその場に洋服を脱ぎ散らかして裸になり、そのまま浴室へと向う。

好江は黙って進の脱いで行った服をたたんで仕舞い、キッチンに立って食事の用意を始める。

進が帰宅する時間は日によってまちまちだったが、いつも帰って来るとすぐに入れる様に風呂が温められている。

風呂から上がるとタイミングを見計らって好江がテーブルに冷えたビールとコップを用意して

来る。

「今日ね、美由ったら吉川さんちのヒロユキちゃんから愛を告白されたのよ」

進にビールを注ぎながら用意していた今日的话题を好江が振ってくる。

「へえ～何て言ったの？」

「それがね、笑っちゃうんだけど、大人になったら僕が一番に美由ちゃんの彼氏になるから、今から予約しときたいんだって」

「へえ～予約ってか」

と好江の調子に合わせて面白そうに反応してやると「そうですね」と好江は嬉しそうな顔をして笑う。

妻とのいつものたわいもない会話だけれど、近頃はそんな会話にも、何処か予定調和で進行されている様で白けた感じを引きずっている。

近頃進が感じている自分の鬱状態を好江は全く気付いていないのだろうか、進としては好江や美由のいる前では心配をかけてはならないと思い、努めて明るく振舞っているつもりだったが、時としてどうしても浮かぬ表情を浮かべて黙ってしまう時もある。

そんな進の様子に妻の好江はまるで気に止める様子も無い。それは本当に気付かないでいるのか、それとも鬱などと言うネガティブな側面にはわざと無関心を装っているのか分からなかったが、進としては好江は多分本当に気付かないのだろう、と解釈していた。その方がわざと無関心でいられるよりは良いと思っていたのだ。

2

ピッ……ピッ……ピッ……ピッ……小さく鳴り始めたアラームで進は眠りから呼び戻されて行く。最初は小さく優しい音で、それが徐々に大きな音に変わって行く目覚まし時計だ。

薄っすらと目を開けて枕元の目覚ましに手を伸ばし、アラームのスイッチを切る。

もう朝か、ついさっき布団に入ったばかりの様な気がする……。

もうちょっとだけ目を瞑っていたいな。と思う間もなくガラリと寝室の戸を開けてバタバタと好江が入って来た。

「おはよー、今日は天気が良いから布団干すからねっ、さぁ進さん起きて〜」

情け容赦なく掛け布団が引き剥がされる。進はエビの様に蹲った。4月の初旬はまだまだ寒い

やるせない表情で洗面所へ向い、もう少しベッドでまどろんでいたのに……とクヨクヨ思いながらゴシゴシと歯を磨く。

バシャバシャと顔を洗うといつの間に掛けられたのか新しいタオルが洗面台の横にかけられている。

顔を拭いて寝室に戻るとそこには洗いたてのワイシャツから靴下、ネクタイに至るまで今日着る物が取り揃えられている。

着替えてダイニングに入っていくと既に保育園の制服に着替えた美由がムシャムシャとトーストを頬張っている。

「パパお早う〜」

「お早う美由ちゃん」

テーブルの美由のいる向かい側に進の朝食も用意されており、スープが湯気を立てている。

進も座ってトーストにパクついた。

「私今日は遅くなるかもしれないから〜、夜は用意しとくからチンして先に食べといてね〜」

ベランダで洗濯物を干しながら好江は進に呼びかけた。好江は美由を保育園に送り届けた後、近所のファミリーレストランにパートに出ているのだ。

「ああ、分かったよー」

半ば上の空で返事しながらトーストを頬張っていると、いつからこう言う風になったのだろう……と言う思いが過ぎる。

朝目が覚めてから、何もかもが好江に仕切られて、嫌それが不満と言う訳でもない、朝起きて顔洗って着替えて食事して、誰もがやっている当たり前のことだ。

でも何か「やらされている」という気持ちになることがある。確かに進がせっせと稼いで来た金で女房と娘を養っている。そりゃ大した稼ぎでもないからマンションのローンを払うだけでアップアップだし、その為に好江も毎日パートに出て家計を助けてくれている。そんな女房に感謝こそすれ不満に思うこと等ないはずだ。

目の前で口の周りをジャムだらけにしながらトーストを頬張る娘の美由。なんて可愛いだろう。いつの間に僕にはこんな娘が出来たんだろう……と不思議になるくらいだ。

けれどこれも好江の計画通りだったのかなぁ、等と取りとめもなく思ってみたり。

好江は進より2歳年下で、進の勤める会社に短大卒で入社して来たのだった。

その年は丁度長年努めていた総務と経理の女子社員2名が立て続けに退職したこともあり、進のいる営業所には好江を含む二名の女子社員が新卒で配属されて来た。

その年好江と同期で配属された男子社員は塩中透と言う4大卒が一名だけだったのだが、慶応大学卒のこの男は、進より3年後輩であったが、進は大学に入る時に一年浪人しており、その大学を2年で中退していた為に塩中は同い年で、学生時代はバスケットをやっていたと言うだけあってスラリとして容姿が良く、たちまち女子社員たちの間で人気者になった。

当初は好江も同期で入社したこの塩中にぞっこんなのが傍から見てもアリアリと分かった。

だが、やがて塩中に長年付き合っている恋人がいて、行く行くはその彼女と結婚するつもりであると言う噂が広まると、途端に好江は目先を変えて他の男性社員にアプローチをし始めた。

それでもまだ好江には進のことなど眼中に無かった。しばらく他の独身の男性社員を飲みに誘ったり、他の会社に勤める女友達と連絡を取り合って合コンに勤しんだりしている様子だったが、そのどれもに良い相手と巡り会うことが出来なかったらしく、とうとうしょうがなくなって、ふと気が付いたらそこにいたと言う感じの進に、目を向けて来たのだった。

進は真面目に勤めるだけが取り柄だったが、かと言ってそれ程の営業成績を上げている訳でもなく、黙っていると全く存在感の無い男なのであった。

ある時好江から「帰りに軽く飲みませんか？」と誘われ、断る理由を思いつかなかったと言うだけで付き合い始めた日から、好江はそんな進の反応を良しと見て積極的に誘いを掛けて来る様になったのだった。

進はそれまでそんなに女性から積極的にアプローチされたことが無かったので、満更な気持ちでも無かった。

決して美人と言う訳では無い、お節介な程世話好きで、年下でも姉御肌なところもあるが、好江はことあるごとに自分の旦那様として進を立ててくれる女であった。

好江のそんな性格と、どちらかと言うと引っ込み思案で大人しい進の性質とは、結婚生活において中々相性が良いのではないかと進は思っている。

上手く行っている。そう、自分と好江との夫婦生活は上手く行っているのだ。

でも、こうも思うのだった。全ては好江の目算通りではないかと。

そもそも好江は入社したのも結婚相手を見つけるのが目的で入って来た様なものだったのだ。

最初に目に付いた慶大卒で男前の塩中に振られたと見るや他の男性社員たちに目を向けたが、こちらからアプローチしても誰からも相手にされず、最後に仕方なく残っていた進に声を掛けてみたら、コレが思いがけず好意的な反応を示したので妥協した……。

でも……それでも良いじゃないか……と進は思う。こんな可愛い娘も出来て、家に帰ればいつも風呂を沸かし、食事の用意をして待っていてくれる女房がいる……良いじゃないか。

このマンションを買おうと言い出したのも、この物件を探して来たのも好江だった。

当たり前なことだが好江はこれからの進の生涯収入を見越して、その金額で買うには一戸建て

の家は無理だと思い、マンションを買うことにして不動産情報を駆使して探し、売りに出ているこの物件を契約したのだ。

それに美由の他にもう子供を作ろうと言う気が無いらしいことも、きっと進の稼ぎでは子供はひとり育てるのが精一杯と高をくくっているのでは無いだろうか、それは考えすぎと言われるかもしれないけれど、進はそれに間違い無いと思っている。

付き合い始めた当初から好江はとにかく早く結婚したいと言う願望だけが見え見えで嫌な気がしたのだが、女性から積極的に迫られた経験の無い進は半ば嬉しい気持ちもあって、そのままズルズルと引きずられるまま結婚したのであった。

僕のこれからの人生は全て好江の思い通りになって、好江の為にあるのではないか……進はそんな卑屈な見方をしてしまう自分は嫌なので無視することになっている。

こんな風に親密になって何年もひとりの女性と付き合い合った経験が進には無かった。そんな進にこんなに親身になって世話を焼いてくれる女性が現れたのだから、文句を言ってもしょうがない。どう思おうと今はこれで幸せなのだ。

等ととりとめも無く思いながらふと見ると、テレビ画面の隅に表示されている時刻が家を出るまでにあと2分しか無いことを告げている。そんなことつらつらと思ってる暇はないじゃないか。

朝食を切り上げてバタバタと上着を着て鞆を持ち、玄関へと急ぎ足に行く。

洗濯物を干し終えた好江が入って来て慌てて新しいハンカチを進に持たせる。

「行ってらっしゃい、今日も頑張ってるね」

好江は毎朝こうやって進を元気付ける様に勢い良く仕事へ送り出す。まるで「私たちの為にいっぱい稼いでいらっしゃいよ～」とでもけしかけられている様な気がする。

マンションの4階にある家を出た進はエレベーターで一階におり、脇に作られているピロティから自転車を引っ張り出して、駅まで走る。

調布市の郊外にある進のマンションから最寄駅である京王線の国領駅まではゆっくり走っても10分くらいだ。

朝の街が気持ち良く通り過ぎて行く。爽やかな風に乗って自転車を走らせていると、このまま駅などへは行かず、ずっと遠くまで走って行きたい気持ちに襲われてしまう。

僕だって自分の人生を自分なりに考えて生きて来たつもりだ。でも、いつの間にかお節介な女房に押し切られる様にして結婚し、子供も出来て、すっかり尻に敷かれたままいつの間にかマンションを買っていた。

思えば僕の人生は全てが「いつの間にか」だったんじゃないか。

でもそれも良いじゃないか。ローンを払い終わるまでにあと25年、これから僕の人生はあのマンションを買う為にあるんだ。あの部屋が僕の人生なんだ。都心まで25分の2LDK。僕の人生、こんなにちっぽけだけれど……。

駐輪場に自転車を止めて、いつもの様に改札を入ると地下通路を潜って新宿方面行きのホームに出る。

停車する電車の扉の位置にそれぞれ目印が付けられており、その場所その場所に乗車する通勤客たちが列を作って待っている。

進もいつも乗る位置に出来ている列の最後尾に並ぶ。

ひとつも言葉を交わしたことは無いけれど、毎朝顔を合わせる常連たちに紛れてしばしの間電車を待つ。

「まもなく、1番線に……」

と言うアナウンスの後、各駅停車の新宿行き電車がホームに滑り込んで来た。

その窓窓はギッシリ詰まった通勤客ですでに満員の様相なのに、そこへさらにこのホームで待っている山ほどの人間が突入して行くのだ。

開いたドア一杯に乗っている人ごみの中へ、ホームから連なった人々が入って行く。その流れの中で進も車内に足を踏み入れる。

後から更にドカドカと人がなだれ込み、ギュウギュウに押されて進は思ってもみなかった程奥の方へ押され流されて行く……いつものことだ。

余りにも身動きが取れず、回りを囲む人間に不快感を感じる。でも仕方がない、その人たちから見れば、逆に自分が不快に思われているのだから……。

どうして人は職場の隣に住むことが出来ないんだろう……。

顔を歪めて揺れるにまかせていると、人間として扱われていない気がしてくる。

どうして毎日わざわざ遠くからこんな思いをしてまで会社に通わなければならないのか。等と無駄なことを思ってしまう。

コレが僕の人生なのだ。家があり女房がいて可愛い娘がいて仕事もある……僕の技量でこれ以上何が望めると言うのだ。

京王線で新線新宿駅から先はそのまま都営新宿線に乗り入れて、市ヶ谷駅でJR中央線に乗り換える。それから三駅先の御茶ノ水駅で降りる。進の勤める会社はそこにある。

進の勤めている会社はシャノンメディカル株式会社と言う。海外から輸入した医療器具や自社で開発した新製品を病院や研究施設等に販売するメーカーである。

本来新卒者しか採用しないのだが、地方の医大を中退していた進は教授に紹介して貰い、特別に採用して貰ったのだった。進が入社してから既に十四年が経っている。

御茶ノ水駅から歩いて5分程のところにある豪華なオフィスビルの6階にその営業所はある。

進はこの会社で万年平社員な人生を歩むことになるのだ。何年経っても相変わらずの営業とメンテナンスに回る毎日。いつか自分が現場から離れ管理職の地位に着く日が来るとは到底思えない。

6階でエレベーターを降り、広々とした受付のカウンターの脇に設置されている電子式のタイムレコーダーにタイムカードを差し入れてオフィスへ入る。

同僚達に「お早う御座います」と挨拶しながら営業部にある自分のデスクに着いた。

外部から届いたファクスと留守番電話のメッセージをチェックし、今日回る予定の病院や紹介する機器の資料等をチェックする。

そして入り口脇のパーティションに掛けられた行く先予定表のホワイトボードの自分の欄にマーカーで「営業」と書き入れて進は部屋を出ようとする。

「おう、高本君、ちょっと」

その時入社して来た課長の島に呼び止められる。

進は内心「しまった」と思いながら笑顔で「お早う御座います」と答え、島課長のデスクへと赴く。

「何でしょうか」

島は進に透明のA4版のホルダーに入った資料を手渡して言う。

「本社から今年ドイツで発売される新製品のレーザーメスの資料が届いてるから、良く目を通しておいて、月曜日のミーティングで皆に説明出来る様にしておいてくれ」

「えっ、でも……」

「俺はまだ新入社員の研修で手が一杯だからな、頼んだよ」

反論する余地も無く、島はそれっきり進を見ようともせずにデスクに置かれた受話器を取って連絡を始めてしまう。

渡された資料を手に進は茫然とするしかない。

他にも社員は沢山いるのに、何故僕に頼むんだろう？ その訳は分かっている。僕が一番頼みやすいからだ。

進は社会で生きて行く上で必要なことは何よりも周りと上手くやって行くことだと思っている。

その為に一番重要なことはまず身近な人間との関係を円滑にすることだ。だから例え嫌な相手がいっても、腹を立てる様なことがあったとしても、いつも笑顔を決やさずに、人に良い印象を持たれる様に心掛けよう。それが進のサラリーマンとしての信条だ。

だが、いつもそんな風に振舞っているのも、いつの間にか進は頼まれれば何でも引き受けてしまうお人好しだと言うキャラクターが定着してしまい、その為に時としてこんな貧乏くじを引いてしまうことも珍しくない。

そもそも新製品の概要を把握して社員に伝えると言うのは課長の仕事じゃないか、と言いたかったが、進にはそんなことを言える訳も無い。

ちくしょう、また余計な仕事を押し付けやがって……トボトボと社外へ出ようとした時「高本さん」と後輩の塩中透に声を掛けられた。

「来週の新入社員歓迎会は15日に駅前の居酒屋『錦の茶屋』でやることに決まりましたから、宜しくお願いします」

「ああ、分かったよ、15日だね」

好江がまだこの男を夢中で追いかけていた頃、塩中には長年付き合っている彼女がいて、その女性と結婚すると言う噂が立って好江も諦めたのだが、その後その女性とはどうなったのか、結局塩中は進と同じ35歳になった今も独身のままで、時おり他の女性と一緒にいるところを目撃されることがあったりで、結局は独身貴族を決め込んでいろんな女性との情事を楽しんでいる様子であった。

それでも進はこの男に悪い印象は持っていない。高学歴も、女にモテることも全く鼻に掛けたところがなく、誰に対しても爽やかで、お人好しで他の社員にバカにされがちな進のことも先輩としてしっかり立ててくれ、気を遣ってくれていることが分かる。

コレが彼の処世術なのかとも思うが、ろくな営業成績も上げていないのに上司たちからの受けも良いのだ。

塩中と入り口のカウンターの脇で話していた総務の倉橋俊子が声を掛けてくる。

「でも高本君は好江ちゃんが恐いから、あんまり遅くまではゆっくりしてられないわよねえ」

倉橋俊子はお局様と影で呼ばれている。確か40歳くらいにはなっているはずだが、まだ独身であり、男性社員も含めてこの営業所では一二を争う古株であった。

なので進より3年遅れて入社した好江のこともよく知っており、好江が塩中のことを諦めて、他の男にも散々振られた拳句に妥協して進に向かい。進はそんな好江に押し切られて結婚したと言う経緯も承知しているのだ。

「いえ、そんな、新入社員の歓迎会の時くらい、ちゃんとお付き合いしますよ」

進はカチンと来た心とは裏腹に俊子に笑顔でそう答える。

「あら、そうなの、珍しいわね、でも会費は5000円ですからね、大丈夫？ 好江ちゃん少ししかお小遣いあげて無いみたいだから可哀そうだけど」

「大丈夫ですので、ご心配なく、あ、そうだ今月の領収書と交通費の清算書が溜まっていますので、こちらの処理をお願いしますよ」

と言って進は鞆のポケットから接待費や移動に使った交通費の清算書の束を出して俊子に差し出した。

「そう、じゃ一応預かってくけど、ひとつずつ審査しますからねえ、全部出るとは思わないですよ」

俊子是用紙の束を迷惑そうに進の手からもぎ取ると、ツカツカと歩いて行った。

朝から何とも不愉快な気分させられながら、進は「それじゃ、行って来ます」と言ってそそくさと会社を後にした。

我慢しなきゃ、あんなに頭に来るお局様だけど、きっと根は悪い人じゃないんだ。きっとあんな歳までひとりできて、寂しい思いをしているに違いないんだ。

そうさ、何事もこっちが折れて、上手くやって行かなくちゃ。僕が我慢すれば良い事なんだから……。

進はそんな風に自分に言い聞かせた。社会で生きて行く為には、自分の中の葛藤は自分が良い子になって事態を收拾して行くしかないんだと思っていた。それを生活信条としてやって来たのだ。

3

御茶ノ水駅へ来た進は新宿方面行きの電車に乗った。

進の仕事は都内の総合病院や大学病院、その他開業医等を回って新式の医療機器の売り込みをしたり、既に納品された各種機器のメンテナンスやアフターサービスに奔走するという。総合的な営業である。

進の会社で扱っている製品は外科手術向けの電子メスや内視鏡、整形外科向けの人口関節、耳鼻科用の特種な手術器具、また麻酔科や脳神経外科で使う電子機器に至るまで広範囲に渡っている。

これ等は物によってはかなり高額なもので、家庭の電化製品の様においそれと買い換えられる代物ではない。物によっては何百万、いや何千万もする製品がザラにある。

営業先の病院で今使っている器具が壊れたり、旧式になったので買い換えるというタイミングを待つ為に、長年に渡っていつ実るとも分からない営業努力を続けなければならないという、根気のいる仕事なのだ。

気長に細々とながらも顧客との関係を保ち続けていくことが大切なのだ。

進が入社して以来始めて担当した顧客で、文京区にある大手の総合病院、昭和台病院で医局長をしている村麦実と言う46歳の男がいた。

進とは10年前村麦がまだ一介の勤務医だった頃からの付き合いであり、以降その病院で器具の買い替えや新しいシステムの導入に当たっては全て進を窓口としたシャノンメディカルからの購入を約束されている。

進が始めて営業の実績と言える成績を残せたのはこの男のお蔭であった。

ことあるごとに進は村麦の元へご機嫌伺いに顔を出し、例え私的な用事であっても呼ばればいつでもはせ参じて来た。

夜のお付き合いは勿論のこと、時には浮気の為に奥さんへのアリバイ工作までした。

「こんにちは、お早うございまーす」

いつもの様に4階の医局長室へ顔を出すと、村麦は机やテーブルの上に沢山の資料を山積みにして、てんてこ舞いしていた。

「おう、良いところに来た」

と嬉しそうに進を手招きする。山積みになった資料はこの病院の内科で扱ったクランケのカルテであり、この中から今までに村麦が担当したクランケをピックアップしてリストにし、パソコンにデータとして入力しなければならないのだが、捗らなくて困っていたと言う。

進は心の中で「ああ、今日はこれで一日終りだな……」と思いつつ「手伝いましょう」と笑顔で応えながら鞆を置いて腕まくりを始める。

要領を教わった進は暫らく黙々と村麦と共に作業に没頭する。そして正午近くになると「おう、

そろそろメシにするか」と村麦は進を誘って外へ向う。これもいつものパターンだった。向うのは近くにある高級ホテルのレストランである。

「お前がこれまで営業としてやってこられたのは俺のお蔭なんだからな」

村麦は上機嫌でデザートとコーヒーを飲み終わると、当然の様に支払いは進に任せてサッサと席を立って行く。

進もまた当然の様に支払いを済ませ、村麦と共に病院に戻ると再び資料の整理作業に取りかかる。

村麦の方から「今日はもう帰って良いよ」と言うまで絶対に席を外したりはしない。

夕方近くなっても作業は一向に終わる気配が無い。

アイウエオ順に並ぶ膨大な数のカルテの中から担当医の欄に村麦の名前がある物をピックアップし、その日付け及び概要をコピーして行くのだが、まだやっと「な行」までが終わったところで、分量としてはまだ3分の1くらいが残されている。

作業にも退屈したのか、村麦は革張りのプレジデントチェアに踏ん反り返りながら、誰かと電話でお喋りを始めた。話す相手は銀座辺りの高級クラブの女らしい。

「それでさー明日までにどうしても資料そろえておくようにって院長に言われちゃってるのよ、うん、今俺の子分に手伝わせてんだけどね、う〜ん、もうあと2時間くらいはかかっちゃうかなあ……」

結局6時になった時点で残りの作業は進が請け負うことになり、村麦はいそいそと病院を後にして出かけて行ってしまふ。

どうせ今日は好江も遅くなるって言ってたし、連絡しなくても大丈夫だろう……。

嫌気が差して放り出したくなる衝動を抑えながら、進は一人黙々と作業を続ける。進が座っている応接セットのソファの側らに大きな鷹の剥製があり、何処かキョトンとした目で進をじっと見つめている。

企業の社長室を思わせる豪華な室内には、剥製の他にも村麦が優勝したゴルフコンペのトロフィーや、スポーツ選手や芸能人と一緒に写っている村麦の写真が額縁に入れて飾られている。

7時近くになってようやく作業が終り、階下に降りて病院の人に挨拶をした後、進はやっと外へ出た。

夜風が冷たい、会社には直帰すると連絡を入れてある。

ふと見るとまだ病院に残っている医師たちもいるのか、駐車場にはフェラーリやメルセデス等の高級車がズラリと並んでいる。それらを眺めて歩いていると、やっぱり医者ってのは金持ちなんだな、と思う。進などはマンションだけで精一杯で、とてもマイカーまでは手が回らないと言うのに。

病院を出た進はJRの水道橋駅まで歩いて行き、そこから新宿方面行きの電車に乗った。過ぎて行く窓外をぼーっと眺めていると、ガラスに映った自分の疲れた顔があった。

これが僕の仕事なんだ。相手がどんな奴だろうが、傍から見れば屈辱を与えられていようが構わない。それで僕はサラリーを貰って、そのお金でマンションを買ったり、家族を養ったりすることが出来ているんだ。

万年平社員で営業職。決して表には出さないけれど、自分で持て余すくらいストレスとイライラが募る毎日。

でも生きて行くには温和に周りと上手くやって行くしかないじゃないか。僕だけじゃない、世の中で働いている人たちは皆こうやって辛抱しているんだ。

家に帰ると好江は美由がまだ風呂に入っていないと言うので、進が入れてやることになった。

進はくすぐったいと言ってキャッキヤと騒ぐ美由の衣服を脱がせてやり、美由がお気に入りのアヒルの玩具を持って裸になって一緒に浴室に入る。

美由の小さな手、小さな足、脇を洗うとくすぐったがってキャッキヤと笑う。

「パパー見て、アヒルさんだよーアヒルさんが泳ぐの上手でしょ？ ねえ見て見てえ」

ついボーっとしてしまいがちな進の顎を突っ突いて美由が言う。

今年5歳になった美由は、もう顔立ちも表情もしっかりして来ている。

すましている顔の形は好江に似ているが、笑ったり泣いたりして、表情を崩すととたんに進そっくりの顔つきになる。

可愛い……今更確認するまでもないけれど、間違いなく僕と好江の子供なんだ。

でも、以前ならお風呂ではしゃぐ美由の小さな手や顔を見ていると、昼間の仕事での嫌なことや腹立たしい事等はどうでも良くなってしまったものなのに、近頃はそんな美由の癒し効果も作用しないくらい、肩にストレスが厚く積もっている様だった。

風呂から上がり、いつもの様に好江が用意してくれるビールを飲んでツマミを食べ、今日の昼間あったことについて好江の取りとめもないお喋りを聞く。

そんなことだけでもいつもならウサ晴らしになり、明日への活力を養える物なのに、近頃は好江のお喋りの内容さえも、同級生の息子が私立の有名小学校へ入ったとか、近所の誰さんが高級住宅街に家を建てて引っ越して行ったのだとか、まるで進のスケールの小ささを揶揄しているかの様に進には受け止められてしまい、ともすれば卑屈な気持ちになってしまう。

そんな時進は自分に向かってこう言い聞かせる。僕にこれ以上の何が望めると言うのだ。

小市民と呼ぶなら呼べばいい、これが僕の幸せなんだ。ちっぽけで何が悪い。平凡こそが人の幸せじゃないか、人生に大きいも小さいもあるもんか。自分が良ければそれで良いんだ。

4

翌日いつもの様に出社した進は、また昭和台病院の医局長、村麦に呼び出される。

聞けば今日は引越しをするから人手がいるので大至急来て欲しいと言う。

行く先の住所を聞くと村麦の自宅がある世田谷ではなく、新宿区だと言う。その住所にあるアパートから荷物を運び出し、近くのマンションまで運び込んで欲しいと言うのだ。

タクシーで向ってみると、そこは賃貸の古びたアパートであり、行くと既にそこに住んでいた女の子と運送会社の男がアルミバンのトラックに荷物を運び込んでいる。

進が挨拶して自己紹介すると若い女は村麦から聞いていたらしく「村麦さんの子分の方ですね」と言ってニコッと笑う。

子分……その言葉に少し引っ掛かったが、それよりも気になったのはその女の子のおかしな日本語の発音だ。どうも日本人ではないようだが、深く追求してはならないと思い、進は鞆を置くと腕まくりをする。

作業服の男に手を貸してせっせとベッドやテーブルをトラックに運び入れて行く。

背広を汚して汗だくになりながら、ようやく全ての荷物をトラックに運び入れる。

そして女の子と一緒にトラックに乗せて貰い、村麦の指示した転居先のマンションへと向う。

住所の場所にトラックが着くと、そのマンションは大通りに面したオシャレで都会風でピカピカな印象である。荷物を運び出して来たさっきの旧式のアパートとは凄い違いだ。

通り沿いにトラックを止めて降りて行くと、マンションの入り口にジャガーを横付けした村麦が待っている。

村麦は「おう」と手を上げて近付いて来ると進に一本の鍵を渡す。

マンションの入り口はガラス張りのエントランスになっており、オートロック式なのでその鍵が無いと外からは開けることが出来ないのだ。

村麦は「じゃ、後頼むよ」と言って女の肩に手を回すとジャガーの方へ歩いて行く。

助手席に女の子を乗せ、エンジンを響かせて走り去る。

残された運転手は人材派遣会社から来ているらしかったが、この仕事を始めて間もないらしく、何かにつけて荷物運びの手際も要領を得ず、ともすると素人である進と同じレベルで苦戦している。

ガイーン！

そのうちに進は運んでいたテーブルの角をエレベーターホールのガラスの縁にぶつけてしまい、大きな傷をつけてしまう。

その音を聞き付けて管理人の初老の男が慌ててやって来る。

「あーあ、コレ弁償して貰いますよ」

「えっ」

「大体こういう物を運び込む時はね、みなさんぶつけても良い様にプラスチックの板とかベニヤ

を貼り付けてやるんですよ、そのまんまやるならよっぽど気を付けて貰わなきゃ困るじゃないですか」

凄い剣幕で捲くし立てられて進は啞然としてしまうが、こうなったからには仕方がない、運転手が派遣されて来た会社にはこう言う場合の保険等の用意はないのかと訊ねてみたが、運転手は傷をつけたのは進なので自分には関係ないの一点張りだ。

彼としても自分のミスとして会社に処理を頼むのが嫌なことは察しがつく。どうにもならない。

こんなことを村麦に言う訳にも行かないし。進の会社に言ったところで引越しの手伝い等は業務のうちに入っていないのだから、どうなるものでもない。

そもそもあの総務のお局様に物を頼む気になんかなれないし。村麦先生は進にとって背に腹は変えられない大事な顧客なのだ。

仕方がない、自腹を切って弁償するしかないと思う。

進は管理人に自分の会社と連絡先を教え、工務店からの見積もりと請求書を回して貰う様に話を付ける。

そうしてその日は午後までかかって全ての荷物を運び入れた後、その場を引き取った。

.....あのガラスの縁を弁償するのに幾らくらいかかるんだろうか。満員の通勤電車の窓に映る自分の疲れた顔を見つめながら、進は思っている。まるで検討もつかないけれど、きっと何万円かはするんだろうな.....。

電車で揺られながらそんなことを考えていると、いつになく重く憂鬱な気持ちが押し掛かって来る。

好江に相談してみようか、好江は優しい世話女房で、甲斐甲斐しく何でもしてくれるけど、進が無駄な金の使い方をしたり、高い買い物をした後にもっと安く買う方法があることが分かったりすると、物凄く怒る。

きっとこのことを相談しようものなら一気に機嫌が悪くなって、2~3日はあのヒステリーの応酬に甘んじなければならなくなる。

それは嫌だ。だから何とか僕の乏しいヘソクリだけで賄える金額であることを願うばかりだ。

今頃村麦先生はあの可愛い何処かの国から来た女の子と楽しく過ごしているんだろうな.....。

いつもの様に国領駅を降りた進は、脇に作られている駐輪場から自転車を出してマンションへ走る。

その夜は風呂に入ってもビールを飲んでいても、あの新ピカマンションのガラスの弁償代のが頭の隅から離れない。

なんであんな愛人の引越しなんかを僕が手伝わなければならないんだろう。

しょうがないのは分かってる、分かっている、けれど.....。

只でさえ無償奉仕でやらされているのに、それで失敗したのは自分で責任を取らされて、どうしてそんなことまで.....いや、考えたってしょうがない、分かってる、分かっているけど.....。

自分は立場が弱いんだからしょうがない.....と言うのが進の出した結論だった。いつもと同じことだ。

「ねぇ見て、この人凄いなだよ、死んだ人の靈魂が普通に見えるんだって.....」

進の気も知らず話しかけて来る好江にふとテレビを見ると、近頃活躍中で話題になっている霊能者の姿が映っている。

それは霞里周安と名乗る和服姿の中年の男で、相談者の守護霊や前世の姿等を手に取る様に見ることが出来るのだと言う。

そして相談に来た人が抱えている悩みや問題について、的確な指導をしてくれると言うことで評判になっているらしかった。

霞里周安は昔の高貴なお坊さんを思わせる様な和服を着ており、恵比寿様の様な笑顔を浮かべ、優しく相談者の話に聞き入っている。

だが右頬の上に引きつれた様な大きな傷跡があり、それだけが柔和な顔の中に違和感を際立たせている。

そんな番組を見ても今の進には上の空だったが、膝の上に美由を抱きながら見ている好江はその番組に夢中になっている。

テレビ番組の中では最近不慮の事故で夫を失ったと言う若い妻と残された娘が相談者として出演している。

亡くなった夫に宛てて娘と一緒に書いたと言う手紙を、周安を通じてあの世の夫の元へ届けて欲しいと願っているのだ。

周安はその手紙を視聴者に向けて紹介し、それを天国にいる御主人の霊にお伝えしたところ、この様な返事が返って来ましたと言って懐から和紙に包まれた文を恭しく取り出して見せた。

「それじゃ、良いですか、御主人から奥さんと娘さんに送られて来たメッセージを、私が代わって受け取らせて頂きましたから。今からそれをお読みしたいと思いますので、聞いて下さいね」

「はい、お願いします……」

既にハンカチを目に当てながら、若い妻は娘の肩を抱いて周安の言葉に耳を傾けている。

周安は文を両手で広げながら、静かにその文章を読み始める。

「愛する妻と娘へ……」

好江は夢中になってテレビに見入っている。

「……こんなに早く、あなた達の元から去らなければならないことになろうとは、パパ自身、全く思っていなかったのが驚いています。今はただただ、ママと瞳ちゃんがこれから先、生きて行くことを守ってやれなくなってしまったことが悔しくてなりません……」

周安の言葉に聞いていた妻は滂沱の涙を流し、テレビに見入っている好江もつられて涙を浮かべている。

きっと好江にしてみれば、テレビで周安に相談を持ち掛けている妻と娘の姿に自分と美由のことを重ねて見ているに違いなかった。

ふん……僕は死んだってこんな殊勝な手紙なんか天国から書いて寄越したりしないぞ。

テレビの中のことと、それに心を奪われて涙を流している好江の姿とが、進の目にはまるで滑稽でバカげたことにしか映らない。

何だよこんなもの……僕の頭はあのガラスの弁償代金のことで一杯だって言うのに。

そんな進の心情を他所に、テレビの中では周安の言葉が続いている。

「……これから先、どんな時もパパは貴方たちの側にいます。どうかこれからも幸せにママと暮らして行って下さい。瞳がすくすくと成長して行く姿を、パパはいつも見守っていますからね……」

霞里周安は実しやかに天国にいる夫からの手紙だと言う文を読み上げて妻と娘を泣かせ、またテレビを見ている視聴者たちにも、今ここにいる好江の様に感動を与えているのだろう。

進には世の中の霊能者と称する者たちが言う、守護霊が見えるとか、前世の姿が見えるのだと言ったことは全く信じられない。

そんな物は全て嘘八百のペテンに違いないと思っている。

けれどもこの霞里周安と言う男にはどこか憎めないと言うか、何故か悪い印象は持っていなかった。

例えペテンの嘘八百だとしても、夫を失って絶望している妻と娘に、例え嘘でもこれだけの勇気を与え、生きる希望を与えているのだから、それには罪は無いだろうと思った。

第二章

1

番組が終わると好江は美由と一緒に寝室へ入ってしまい、進はひとりダイニングに残って水割りを啜っている。

どんなに酔っても今の進にはあのガラスの弁償代金のことが全てなのだ。

こんな日はもう早く寝てしまおうと思い、少し強めの水割りを作り、酔いが回ってフラつき始めたところで歯を磨いて寝室へ入る。

ダブルベッドの上では好江がでんと横たわって鼾をかいて眠っている、その向こうでは子供用ベッドで美由が静かな寝息を立てている。

進はそっと布団をめくると好江の横に小さく縮こまる様にして潜り込み、目を閉じる。

ああ……何処かに飛んで行ってしまいたい……。

あの催眠療法を受けた時に行った、小学生時代の友達とまた遊びたい……。

セラピストの女性は催眠は決して自分一人ではやろうとしないで下さい、と言った。

一人で催眠状態に陥ってしまうと自分の力では戻ることが出来なくなり、ヘタをすると生涯正気に戻ることが出来なくなることもあるのだと言う。

でも……それならと進は思う。帰って来れなくなるのならそのままでも良い。もうこんな毎日は沢山だから。空想の中でだって良いから、僕はそのまま少年時代にいたいんだ。だってあんなに楽しかったじゃないか。

等と知っているうちにウトウトし始めてしまい、進はそのままあの懐かしい世界への瞑想に入り始めてしまう。

小さい頃に過ごした大分県、そう、小学校、進が小学生時代を過ごした、九州の大分県大分市立、浜永小学校……あの頃に帰って浜永小学校に行ってみたい……。

浜永小学校……進は精一杯記憶を遡って行く。何か手掛かりになる様な物はないかと記憶の中をさ迷う。

何が見える？ 何があった？……あ、銀杏の木、そうそう、大きな銀杏の木が、6年生の新校舎の前にあった……それから……その側に真っ直ぐに伸びた長い校舎の一番端が音楽室で……。

よく休み時間に音楽の先生が大きなステレオで僕等が持って来たレコードをかけてくれたっけ

。

その隣りが図工室で、そうそう……それから保健室と職員室。保健室の前を左に曲がると給食室があって、真っ直ぐに行くと1年生～5年生までの教室がズラッと並んでる校舎に突き当たる……思い出す……思い出す……音楽室の横が渡り廊下になっていて、新校舎へ続く間に便

所が、木造の汲み取り式で、臭かったな……よく当番で掃除をさせられたっけ。凄い、こんなこと思い出すのは20年振りなのに、どんどん精彩に浮かび上がって来るじゃないか。

人間の脳は今までに見た物を全て記憶しているのだと言う。

脳の中には海馬と呼ばれる4千万個の神経細胞から出来ている部位があり、その中に今まで見た事聞いた事の全てがコンピューターのメモリーの様に記録されていると言うのだ。

ただ人間はそれを自由に思い出すことが出来ないと言うだけで。何かきっかけになる物さえあれば、そこから辿って全ての記憶を呼び覚ますことが出来るのだと何かの本で読んだことがある。

進の目の前に、まるで自分がそこにやって来たかの様に鮮明に、小学校の光景が浮かび上がって来る。

校舎の向こうが正門だ。門を出て真っ直ぐに伸びた道を行くと両側に商店が並んでるんだ。よし、学校の外に出て歩いて行ってみよう。

ここは同級生のクーのお父さんがやってる洋服屋さん。こっちの裏にはニンジンの家が、そして突き当たりは兄貴の同級生だった丸谷君の家の自転車屋さんだ。

そこからこう行って……こう行くと……そうそう、ここが大通りになっていて、歩道橋を渡る時、上からよくバキュームカーが通るのを数えたっけ、何でそんなことまで覚えてるんだろう……。

大通りを右に行くと大分川にかかる舞鶴橋があって、その土手の前にそびえ建つのが西鉄グランドホテルだ。河原でよく友達が釣りをしていたな。

そうそう、舞鶴橋の下の水道管の上にボロボロの毛布とかが積んであって、ホームレスがいた。コンクリの橋桁にチョークで女の人のヌードの絵が描いてあって、みんなで「エロ乞食」と言ってからかったな。懐かしい。

もっと街を歩いてみよう。ここがオデキの家の酒屋さん。この家は貧乏だってよくみんなに苛められていたショウタの家。僕もからかったことがあったな、ごめんよ。

鮮明にある場面が映し出された。それは小学2年の時、貧乏で体操服も買って貰えなかったショウタは何と2学年上の姉が着ていたお古のブルマーを履いて体育の授業に出て来たのだ。

「女や！ こいつブルマ履いちよるけん女やあ、やーいやーい……」

号泣するショウタを取り囲んで進たちは囁し立てた。今思えば何て酷いことをしていたのかと思う。涙をボロボロ流して泣いているショウタの顔……あの時ショウタの心はどれだけ傷ついたことだろうか、思いがけず鮮明に再現されたその光景の中において、進は申し訳ない気持ちで一杯になった。

ごめんよショウタ。彼は中学に入ってから素行が悪くなって、当時不良と呼ばれていたグループのリーダーになった。

その後学校から姿を消して、噂では福岡で暴力団の組員になったとかって聞いたけど、今はどうしてるんだろうか、そりゃあんな少年時代を過ごしたら、世の中を恨みたくもなるだろう……本当に悪いことしたな。

再び進は懐かしい街を歩き進めた。商店街を抜けて住宅地を暫らく行くと、進の家のすぐ側にある舞鶴公園に差し掛かる。

よく遊んだなあ……野球も、ドッチボールも、メンコも、夏は木を蹴ると雨の様にコガネムシが降って来たっけ。それを捕まえて脚をちぎったり、砂場で作ったトンネルに水を溜めて浮かべて泳がせてみたり、今思えばよくあんな残酷なことしてたもんだ……。

進の目に舞鶴公園で遊ぶ少年時代の友たちの姿が展開される。

もうここからはうちの実家がすぐ側だ。行ってみようか。もう何年帰ってないんだろ。

進はそのまま懐かしい道のりを記憶を頼りに歩いて行った。

こう行ってこう行って、ここを曲がると……あった。あれ、家に着いたら夜になっちゃったな。

進の実家は元々農業を営んでいたのだが、時代の移り変わりの中でやがて土地を切り売りし、今はマンションと駐車場経営で生計を立てている。

だけど家の建物は昔のままだ。懐かしいな。でも真っ暗だ、もう親父もお袋も寝てるんだろ。うか。せっかく来たんだから入ってみようか。

「こんばんは～」と玄関に向うといつのまにか中に入っている。広い上がりかまちがあって、左右に廊下が伸びている。右へ行くと進が子供の頃兄と過ごした子供部屋だ。

冷たい廊下を歩いて、そっと襖を開けて覗いてみた。四畳半は今は物置になって荷物が山積みされている。

子供の頃はこの部屋で兄貴と一緒に遊んだり、勉強したりしていた……小さいな、こんな小さな部屋だったのか。襖を開けて、廊下を歩いて反対側にある居間へ行ってみる。

居間は昔の面影そのままだ。家具とかは多少買い換えられて新しい物になっているけど、そうそう、ここにテレビがあって。真ん中にある大きな座卓は冬はコタツになるんだ。

居間の隣りは8畳間だ。そっと襖を開けて入ってみた。そこに布団を並べて寝静まっている親父とお袋がいた。

「お母さん……」

そっと枕元に来て、寝息を立てている母親の顔を覗いてみた。

「……元気にしてるかい？ ちっとも親孝行しないでごめんよ……僕は東京でもみくちゃになりながら、毎日元気にやってるよ」

不意にポロポロと涙がこぼれてきた。もし面と向ってはこんなことは絶対に言えないクセに、想像の中でだとしてこんなに素直な気持ちになれるんだろ……。

すっかり老いた両親の寝顔を見ていたら、申し訳ない気持ちで一杯になってしまった。

だが、進が申し訳ないと思う気持ちは両親よりも兄の陽一に対しての方が強かった。と言うより、進は兄の陽一が恐かった。

進よりも三歳年上の陽一は医者になると行って地元を飛び出して行った進とは対照的に、ずっと田舎に残り実家を守っている。

行き詰まった農業経営に苦闘し、畑だった土地を駐車場とマンション経営に切り換えて、高い固定資産税を払いながら切り盛りしている。

自分の夢を追って飛び出して行った進に対して、兄は田舎に縛り付けられた自分の境遇に不満を持っていることが、素振りや仲まいから痛い程感じられた。

おまけに進はそうして送り出して貰っておきながら医大を中退してしまい、医者になるという夢も実現出来なかった。

そんな進に対して陽一が腹を立てるのは無理もないことだった。

この家には子供部屋だった四畳半と、両親が寝ている八畳間と、居間である六畳間と、その他にもう一つ部屋があった。

それは庭に面してちょっと離れ的に位置する六畳間で、当時は客間として使われていたのだが、今はその部屋に陽一が寝ているらしかった。

部屋の中から陽一のゴーゴーと腹に響く低音の鼾が絶え間なく聞こえている。

その音を聞いた進は畏怖を感じて縮み上がってしまう。

さっさと外へ出てしまおうと思い、そそくさと足音を忍ばせる様にして離れ、玄関へ向う。

実家から外へ出た。空を見上げるとさすがに東京では見られない星の大パノラマが輝いている。

ふと何か身体がふわふわと浮遊する様な感じがしたので飛べるかと思い、飛び上がってみると、そのままスイスイと身体が宙に舞い上がって行く。

飛べるんだ……きっと想像の中だからこんなことも出来るんだろう、でもなんてリアルなんだ。この空気感、風を感じる。

みるみる夜空の上へと進の身体が舞い上がって行く。あれ、全然恐くないぞ、そうか、きっと自分で飛ぶ分にはどんなに高くても恐くないんだ。

進めるんだろうか、進める。両手を突き出してみるとそっちの方へ身体が流されて行くみたいだ。ちょっとバランスが取れなくて不恰好だけれど、これは良いぞ！ よし、このまま行けるところまで飛んで行ってみよう。

進はどんどん上へ登ってみた、九州の輪郭が見えるくらい上の方までずっと……。息苦しくなるかと思ったが、全然平気だ。

それから本州の方角へと進路を取った。流される流される……いや違う、自分で進んでるんだ。顔や身体に風が当たるのを感じる。

もしこの時の進を目撃した人がいれば、不恰好でガニ股の進が飛んでいるのを見て、まるで逆さまになったクワガタが横に飛んでいる様に見えたことだろう。

J Rの大分駅の上空から別府方向へ、線路の上を伝って行こう。

早い早い、グングンスピードが上がる。みるみる別府湾が広がって来る。

あそこに見えるのは沢山の野性の猿が餌付けされていることで有名な高崎山だ。昔は良く家族で行ったっけ、今は真っ暗だな、猿たちも寝てるんだろうか。

別府の温泉地を通り超えて福岡県へ入る……アッと言う間に下関海峡だ。橋を通る車の光の列を遙か下に見ながら本州へ飛ぶ、ようし、もっともっとスピードを上げるぞ。本州に入ったら海岸線を辿って行こう。日本海の向こうに四国を横目に見ながら、目指すは東京だ。

あー飛行機が飛んで来た。ジャンボジェットだ。もの凄い轟音を響かせて、なんて大きいんだろう。こうして見るとまるで海の中をゆっくりと浮かんでるみたいに見える。

まさか僕には気づかないだろうな。ズラッと並んだ窓明かりの中に乗ってる人たちが見える。まるで精巧に出来たプラモデルみたいだ。カッコ良いな。何処まで行くんだろう。さようなら、

気をつけて。

本州の形が遙か先まで見渡せるぞ、地理は苦手だったからよく分からないけど、きっとこの辺はもう広島かな、その横が岡山県、兵庫県、そして大阪、京都と続くんだ。あっちに見える大きな黒いのが琵琶湖なんだきっと。

三重県から愛知県へは伊勢湾の上を越えて行こう。海の上へ出ると地上の明かりが無くなって真っ暗になる。

広い海。こうして見ると地球で人間の住んでる部分なんてほんの狭いところだけなんだってことが分かる。

静岡県の清水港を通過すればもうすぐだ。伊豆半島……箱根……あそこに走ってるのは小田急線のロマンスカーかな？ もうすぐ東京に到着だ。

東京、東京、やっぱり副都心の高層ビルの方へ行ってみたいな。ああ、もう見えるぞ、あっちだ。

進の身体はスイスイとあり得ないスピードで中空を移動し、遙かに建ち並ぶ超高層ビル群を見つけたかと思うとみるみる上空へ飛来した。

ああ……東京だ……なんて綺麗なんだろう。思わず息を飲んでしまう。他の街とは比べ物にならない。何て言う光の数なんだ。無数のダイヤモンドが噴き出した様にキラキラ輝いて……空から見るとこんなにも美しい街だったのか。

その上を自由自在に飛んでいる、僕は自由だ。頬に涙が伝って行く……美しい……進は思わず思っていた。

「こんな美しい光景を、葵ちゃんにも見せてあげたい……」

葵ちゃん。咄嗟に出て来たその名前に進は自分で戸惑ってしまった。

こんなふうにはあり得ない程美しい物を目にして、思わず見せて上げたいと思った相手が女房の好江じゃなくて、かつて好きだった葵ちゃんだなんて……進はちょっと寂しい気持ちになってしまう。結婚って何だろう……等と今更ながら思ってしまう。

女房に主導権を握られてここまで来た。僕の人生を決めているのは今じゃ好江だ。若い頃から進は自分から好きな女をつかみ取る事など到底出来ない男であった。だからしょうがないんだ。葵ちゃん。今はどうしているんだろう、懐かしい懐かしい……。

そうだ、栃木へ行ってみようか……行ってみたい様な、思い出すだけでも切ない様な。大分を離れて初めて一人で住んだ学生時代、ほんの2年近くだったけれど。医者になるべく勉強していたあの頃……。

行ってみよう。大分からここまで飛んで来たんだから、栃木なんてどうせひとつ飛びじゃないか、進路を変えて栃木県宇都宮市を訊ねてみよう……。

ここからだどっちの方なんだろう、そうだ、大分から来たのと同じ様に電車の線路を辿って行けば良いんだ。

下に見える新宿駅から山手線を辿って、池袋へ来たら埼京線へ分かれて……そう、大宮からは新幹線の線路の上を飛んで行けば……等と思っているうちにアッと言う間に宇都宮駅まで来てしまった。

駅の上へ低空まで降りて来ると、そこから乗り換える支線の上を辿って行く。乗り換えて二駅……そう、ここだ。この駅前からバスに乗って……こっちだ。

記憶を頼りにバスの経路を辿って行くと、やがて見覚えのある街並が広がって来る。

懐かしい街を歩いてみたいと思い、そっと地上に舞い降りてみた。足の下に確かな地面の感触がある。この街、ここで僕は短い学生時代を過ごした……。

あの頃……大分県の片田舎からいきなりこんな遠くへ来て、初めての一人暮らしだった。あの時は本当に心細かったな。子供の頃から医者になりたいって夢があって。あれは確かマンガの『ブラックジャック』を読んでから、いやTVで観た黒澤明の映画『赤ひげ』の方が影響が強かったかな……夢は大きかったけど、結局挫折してなれなかった。

この街も今見るとこんなにのどかだけれど、家から遠く離れて初めて来た時は、本当に強烈な印象だったなあ……。

ほんの2年の間だったけど通ったキャンパス。進は中退した大学まで歩いて来てみた。

緑に囲まれた広い敷地の中に、美しい白い建物が整然と建ち並んでいる。

既に閉まっている門を飛び越えて、進は敷地の中へ足を踏み入れる。

広がる緑の芝生の上を歩く。辺りは真っ暗だけれど、建物の中にところどころ灯りの点いた部屋があるのは、まだ残って研究や勉強してる学生がいるんだろうな、僕も何度か学校に残って徹夜に近いことした日もあったっけ。学期の途中は毎日勉強が沢山ありすぎて、一日もサボってる暇なんて無かった。

でも若かったし、夢があったから頑張れたんだ。それに何よりも葵ちゃんがいた……。

埼玉の高校を卒業してこちらに来ていた葵ちゃんは現役で合格していたので進より一つ年下だった。

どちらかと言うと都会育ちだったが化粧もせず、他の若い女の子たちの様にファッションやヘアスタイルにもあまり気を使うこともなかった。だけど医師になる為に勉強に望む真剣な表情と共に、小柄な葵ちゃんには素朴な可愛らしさがあった。

引っ込み思案で大人しく、女の子とまともに付き合ったことも無かった進にとって、それはまさしく初めての恋だった。

進は葵ちゃんを守ってあげたいと言う様な、愛しく思う気持ちを募らせていたが、実のところ葵ちゃんの方が進よりもずっとしっかりしており、テスト前には必ず進が分からないところを教えて貰ったりしていた。

懐かしいキャンパスを一通り歩いた後、再び進は正門へ戻って来た。

正門を出てこの坂を降りて、そう、最初のバス亭からバスに乗って、僕と葵ちゃんはよく帰った。

そうそう、この道。あのバスの経路を辿って歩いてみよう。

進はキャンパスの前にあるバス亭から、当時自分が住んでいたアパートまで通っていたバスの経路を思い出しながら歩いて行く。

葵ちゃんの住んでいたアパートは僕のところよりもずっと手前にあって、そうそう、いつもこのバス亭で先に降りてたんだ。

タラップを降りて、僕が走って行くバスの中から手を振るのを笑顔で見送ってくれたっけ。

葵ちゃんが住んでたアパート。確かこっちの、そうそう、ここだ。

このアパート。一度だけ飲み会の帰りに僕が送って行くよって、部屋の前まで来たことがあったっけ。

ふふ……あの頃の僕はまさに純真ウブで、ろくに手を握ることも出来なかったな。ここの、そう二階のあの部屋だ……電気が点いてるぞ。

もしかしたらまだここに住んでたりして……いや、まさかそんなことはないだろう、もう15年も経ってるんだ。

今頃はきっと立派なお医者さんになって、何処かの勤務医にでもなって、結婚して、子供もいるかもしれないな、幸せでいて欲しい。

懐かしい……進はフラフラと階段を登ってみた。角のこの部屋。葵ちゃんが住んでいた部屋。

中に入れないや、鍵がかかっているな。

進は宙を飛んでベランダの方へ回ってみる。部屋に電気が点いている。

葵ちゃん……窓の端のカーテンの隙間からそうっと中を覗いて見た。女の子が座って雑誌を眺めているのが見える。

ふと顔を上げて進の方を見た。知らない女の子だった。やっぱり葵ちゃんじゃないや……と目が合った瞬間に、女の子はみるみる目玉をひん剥いた。

「きゃあああああー！」

その叫び声の凄まじさにビクリと身体が跳ねる様になり、進は目を覚ました。

何だ今のは？……思わず起き上がると真っ暗な静寂の中で好江と、その向こうでは美由がスヤスヤと寝息を立てている。進の中で動悸が高鳴っている。

進は布団から出て、フラフラとベッドから降りるとキッチンへ向った。

冷蔵庫からペットボトルを取り出し、冷たい水をラッパ飲みする。

今のは何だったのか……夢か。そうだ、想像の中で大分の小学校に行っ、それから空を飛んで、そんな夢に耽っているうちにいつの間にか眠ってしまっていたんだ。

そうだ。アレは夢だ。けどこの妙な感じは何だろう？

やはりカウンセリングの先生が言っていた様に、自分で勝手にやってはいけなかったんだ……

。何だか知らないけど、夢と現実と区別がつかない様な錯乱した状態になってしまっていたんだ……。

進の身体はまだ小刻みに震えており、夢の中から抜け切っていない様な感覚だった。

重たい様な、軽いような、身体が二重になってブレてるみたいな、それは今までに経験したことのない変な感じだった。

翌朝いつもの様に進は好江に起こされて、歯を磨き、背広に着替えた。そして美由と向かい合って朝食を取っていた。

新聞やテレビではいつもながらに信じられない様な血生臭い事件が報道されている。

子供が親を殺した事件、親が子供を殺した事件、引籠もりの若者が少女を誘拐して殺した事件……。

同じ人間でありながら、一体どうしたらこんな酷いことが出来るんだろう……と思うくらい醜悪な事件が毎朝報道されている。

全くリアリティの無い悪夢の様なことが次々に起こっているなんて、まるでテレビの中はニュースにしろ現実とは思えない。フィクションの世界みたいだな……と感じずにはいられない。

進がそんなことを思いながらトーストを頬張っていると、この時間には珍しく電話が鳴った。キッチンにある端末で好江が受話器を取る。

「はいもしもし……あら、お母さん。どうもご無沙汰しています、いえいえ……」

どうやら進の実家の母からの電話らしかった。こんな朝から何だろうと思いながら、取り次がれるままに進は電話に出た。

「もしもし進ちゃん？ お早う、元気しちょるん？」

「ああ、どうしたんだよこんな朝から」

「いやぁね、ちょっと気になったもんやけんね、昨夜ね、進ちゃんがわしの枕元に座って泣いちょる夢見たもんじゃけん……」

ドキー……とした。頭に血が上って引き絞られる様な感じになり、息が苦しくなる様であった。

だが暫らくするとすぐに思い直した。単なる偶然だろう。そうだ。僕があんな夢想をしたのと、母さんがたまたま僕の夢を見たのが重なっただけなんだきっと。そうさ、そうに違いない。

毎日一刻を争う朝なのにそんなこと考えてる暇もないんだ。

そのことを単なる思い過ごしと片付けてしまい、進にはいつも通りの日常が通り過ぎて行くのだった……そして、いつもの様に満員電車で揺られている頃には、そんなことがあったことでさえ記憶の中から消え去っていたのだった。

それから何日かして、進の元へ訃報が届いた。宇都宮で二年間の学生生活をしていた頃、進の先輩だった大垣彰と言う男が、不慮の事故で死亡したと言う知らせだった。

「よっ、ご苦労さん……」

進の脳裏にフラッシュの様に白衣を着た大垣先輩の顔とあの一言が思い出された。大垣彰……そうか、あの人が亡くなったのか。

大垣さんとは進の在学中に人体病理学と言う科目で一緒だった。

学年が2つ上の先輩であり、それ程親しかった訳ではない。今だって知らせを受けて名前を聞くまでは忘れていたくらいなのだ。

大垣は卒業してから予定していた通り地元で開業している実家の病院に勤務し、次期院長になる予定だったらしい。

葬式に出るにも場所が栃木ではそう簡単に行ける距離ではない。それに進には大垣に対してそれ程の義理もないだろうと思う。

そもそも進は中退生な訳だし、この知らせだって数少ない当時の進を知る同級生が、たまたま連絡先を知っていたから教えてくれたのに過ぎないのだ。

そう思った進は弔電だけを打ってお葬式の方は失礼させて貰おう。と思ったのであった。

2

その朝も進は目覚ましのアラーム音に起こされたのだったが、起きた時に何か激しい夢を見ていた様な気がしていた。

内容までは覚えていないのだが、雲田気だけが気分に残っている。何か気持ちが高揚している様な感じなのだ。

とにかく凄くテンションの高い夢を見ていたことが感覚として残っている。

何か凄まじく人と争っていた様な、攻撃した様な、手に何か握っていた様な……そんな感触まで残っているのだが、どうしても夢の内容までは思い出すことが出来ない。

考えていても仕方がないと思い、そんなもどかしい様な、落ち着かない気持ちのまま今日も歯を磨き、朝食を食べる。

「ねえ貴方。近頃ちょっと痩せたんじゃない？」

そう好江に指摘されるまでもなく、進にも分かっていた。近頃何か、自分の顔が一時の間はずい分やつれてしまった様な気がする。かと言って体重に前とそれ程差はないし、身体が疲れていると言う自覚もこれと言ってないのだが。

気のせいだろうか……仕事は相変わらずだし、まあ辛いと言えば毎日辛いけど、最近になってことさら辛いことが続いたと言う訳でもない。

原因も分からないのに気にしていてもしょうがないと思い、済ませていたのだった。

そんな今日。会社に出勤した進は驚くべき知らせを受けた。

昨夜神奈川県郊外的高速道路で昭和台病院の村麦医局長が、自分の運転する車で自損事故を起こし、死亡したと言うのだ。

事故の状況を聞いてみると、詳しいことは分からないが、夜中、高速道路を一人で運転していた村麦はハンドル操作を誤って側壁に激突し横転したのだと言う。

正直なところ、進はとても残念だと思った。だがその気持ちは人として村麦が亡くなったことが残念だと言うのではなく、今まで自分の営業成績を支えてくれた重要な顧客を失ってしまったことへの残念であった。

純粹に人間として気持ちを動かされることが全く無いことにさえ、何も感じることは無いのだった。

進の頭の中では、葬式に行かなければならないことや、喪服の準備は大丈夫だろうか等と言うことだけに気が行っているのだった。

何よりも重大なことは、村麦と言うパイプが途切れてしまっただけでは、今後の昭和台病院との取り引きの為に、新たな窓口になる人物を確保しなければならないということだった。

次の医局長が決まったら早急に手を打たねばならない。

村麦医局長の葬儀は自宅のある世田谷区の葬儀場にて、病院関係者を始め多くの参列者を迎えて盛大に行われた。当然の様に進は来参者の受付や場内の運営等の業務を手伝いに奔走して

いた。

そんなこんなで慌ただしく村麦の葬儀が片付いて3日程経った日。入社した進は自分のデスクに届けられている一通の封筒に目を止めた。

それは工務店の会社名が印刷された窓付きの封筒で、進宛のアドレスが印字されたシールの横に「請求書在中」という文字がスタンプされている。

ああ……ついに来たのか。

例の村麦の愛人のマンションのガラスの修理代金の請求である。約束通りあの管理人が送って寄越したのだ。

ふと気が付くと渋い顔をして封筒を開いている進の様子を、目ざとく見つけた総務の倉橋俊子が見つめていた。

進と目が合うとフツといやらしい微笑を浮かべて話しかけて来る。

「高本君、まさか自宅でも新築するんじゃないでしょうね？」

「いえ、違いますよ」

無理に笑顔を浮かべてそう言うと進は封筒を手にバツと立ち上がり、鞆を持って出口へ向う。

……34万円だって！ そんな馬鹿な……本当に材料費と施工費でそんな金額になるって言うのか？ あんなガラス一枚。冗談じゃない、僕の月の小遣いが3万円なのに、その中から今まで根気良く貯金して、やっとの思いで溜めて来たヘソクリの16万円を全額出したとしても半分にもならないじゃないか、一体僕にどうしろって言うんだ。

女房にも上司にも相談出来ない以上、自分で何とかするより他にないと言うのに、進にはそんな金は無い。

こうなったら何処かでお金を借してもらうより他に手が無い。でも進の周りにはそんな金を借りることの出来る上司も同僚も思い浮かばない。

高校を卒業して田舎を出て、大学を2年で中退して東京へ出て来た進には、職場以外で付き合いのある友人もいない。

親族と言っても女房には言えないし、ましてや大分の実家に金のこと等頼めた義理ではない。もしそんなことをすれば34万くらいの金も遣り繰り出来ないのかと余計な心配をさせてしまう。

でもその34万円が進には大金なのだ。

こうなれば違法な高金利で金を貸し、やがては返済し切れなくなった人間を破滅にまで追い込むと言う消費者金融にでも頼るより他にないじゃないか。

僕に破滅しろって言うのか……。

進はこの高額な請求書を送りつけて来たあの管理人に対して、どうにもならない腹立たしさを覚えた。

本当にこんな金額になってしまうのだろうか、この修理代金の内訳について問い質してやりたい気持ちでいっぱいになる。

それに、今更村麦の愛人のマンションに付けた傷のことなんか僕が知るもんか、と言いたい。

だって村麦が死んでしまった今となつては、こうまでしてあいつに忠義を尽くす意味なんて無いじゃないか。

とは思って見たものの、あの時進は管理人と約束し、また自分の所在も勤め先も明らかにしてしまっている。逃げる訳にも行かないのだ。

かと言ってこの高額を全くメリットも無いのに払わされるのも理不尽である。

無理を承知でも、進としてはどうしてもあの管理人と掛け合ってみないことには気が済まないのだった。

「いいですよ調べて貰っても、嘘の請求なんてしてませんから、こっちだってちゃんと払って貰えないのなら出るところへ出たって良いんですからね」

初老の管理人はまともに進の顔を見ようともせず、にべもなく言う。

なんて強気なんだろう。きっとこう言うトラブルには慣れっこなんだろう。基本的に気弱な進には到底太刀打ち出来ないタイプだ。

でも自分が正論だからってこうまで高飛車な態度に出なくても良いじゃないか……とも思う。

進はどうにも理不尽な悔しさに打ちひしがれてしまう。進としては金額が金額なので簡単に諦める気にもなれないのだ。

「あのう、お取り込み中のところすいませんが……」

そこへ不意に割り込んで来る声がかかった。なんだろうと思い、進と管理人が見るとそこにはくたびれた装いの初老の男が申し訳なさそうに立っている。

だが驚いたことに、その男の手にはキラリと光る警察バッチが仕込まれた身分証が掲げられていた。

「け、警察の方ですか」

管理人もちょっと戸惑った様子だ。

「はい、すいません、ちょっとお願いがありまして、806号室にお住まいのリー・スミンさんのお宅に伺いたいのですが、在宅なのに下のドアを開けて下さらないんですよ、いや令状は無いので無理にお部屋に入ることは出来ないんですがね、せめてドア口まででもお尋ねしたいと思ひまして、下のエントランスを開けて頂きたいんですがね」

「あ、ああそうですか、分かりました。良いですよ」

国家権力には弱いのか、そう言われると管理人は腰に提げた鍵の束の中から一本の鍵を選び、各部屋へ繋がるインターホンの脇にある鍵穴へ差してクルリと回した。

グーンと音がしてガラスのドアが開く。

その刑事は「どうも」と片手を挙げて軽く会釈をするとそそくさとホールの中へ入り、エレベーターの方へ向って行く。

806号室にお住まいのリー・スミンさん……806号室……進はぼんやりと考えている。

806号室。それは確か村麦にやらされて荷物を運び込んだ部屋じゃなかったらうか、それにリー・スミンと言う名前。あの外人の女の子のことじゃないのか。

何か事件にでも関係してるんだらうか……。

でもそれよりも今の進の問題は管理人から請求されている34万円のことである。

進は今の自分の経済状況や、会社にもあの運送会社の男にも頼めない自分の立場のことを訴え、泣きを入れてすがり付く作戦に出てみたのだが、管理人は聞く耳を持たず、ビター文まからな

いと言うガンコな態度を貫き通した。

進はもはや取り付く島もないと言う絶望的な気持ちになり、涙目になってしまう。

どうしよう……34万円のうち、16万円は必死で溜めたヘソクリで賄うことが出来る。けど問題は残りの18万円をどうするかだ。

給料は銀行に振り込まれるし、その通帳もカードも好江に握られている。

どう考えても進の個人的な収入源は毎月好江から手渡される3万円の小遣い以外には無いのだから、そこからやりくりする意外に方法は無いのだが、それでは無理だ。

仕事が終わってからアルバイトでもすればどうだろう。例えば居酒屋の店員とか、終夜営業のファミリーレストランとか……嫌だ！そんなことは考えただけでも嫌で気が狂ってしまう。

となればやはり街金で借りて月の小遣いの中から返済して行くより他にないのか。

小遣いの3万円のうちの幾らを月々の返済に回せば良いんだろう……只でさえ少ない3万円。いつもどんなに節約しても月末の頃になると1週間も財布に小銭しか入っていない日々が続く……でも、どんなに嫌でも他に方法は無いんだ。

そして更に進の頭を悩ませているのが、死亡した昭和台病院の村麦の後を引き継いで医局長の座に付いた滝川と言う男のことであった。

もともと医局長のポストは村麦よりも年配の滝川が狙っており、年功から言っても滝川が先になるべき順番だったのだが、やり手の村麦に出し抜かれる形でポストを奪われたと言うのが病院関係者の間で囁かれている噂であった。

そのせいなのか、滝川は前の医局長である村麦が自分の勢力を誇示する様にこき使っていた進のことを、あまり心良く思っていない様子だった。

進が尋ねて言って「今後ともどうぞ宜しくお願いします」と頭を下げて「今度は体制が変わったから、会議にかけてから検討しますから」等とはぐらかされてしまい、どうしても良い返事を貰うことが出来ないのだ。

今度は村麦に変わって自分が権力を握ったのだから、旧勢力の村麦に属していた者は一掃して自分の息のかかった者に一新したい。と言う考えらしいのだが、そんなことをされては進にとって死活問題だ。

今まで進は昭和台病院での売り上げ成績のお蔭で大手を振って会社にいることが出来た様な物なのに。

だからこそ村麦に対してはどんな屈辱にも耐え、無理難題も聞き入れて必死になって尽くして来たんじゃないか。そう言う努力で昭和台病院とのパイプを守って来たのではないか。

それをこんな形で断ち切られてしまったのでは堪ったものではない。

進は滝川に食い下がるべく毎日の様に病院へ詣でた。それはもう必死の思いで、何としても昭和台病院とのパイプを守り通さなければならないと思った。

どんなにしつこいと言われようと、そこまで卑屈になってまで契約が欲しいのかと蔑まれようと、なりふり構って等いられる状況ではない。

あ、また来た……と受け付けに座っている看護師に露骨に嫌な顔をされようとも、ここで引き下がる訳にはいかない。

「お願いします。度々お邪魔して御迷惑なのは重々承知しておりますが……」

今日も進が滝川医局長への面会を求めて必死の懇願をしている時、不意に後から肩を叩く者がある。

何だろう？ と顔を上げた進の後に立っていたのは、先程村麦の愛人のマンションで管理人と揉めていた時に、突然声をかけて来た初老の刑事だった。

「いや、また会いましたな。お互いあちらこちらで苦労を重ねているようすな……」

と親しげな顔で進に微笑みかけている。

ここまで来るとさすがに進にも不審な思いが持ち上がって来る。

この刑事は間違いなく村麦とあの愛人のことを調べているんだ。

二人のことが何か事件に結びついているのだろうか、もしかしたら高速道路で事故死したと言う村麦の死因に何か事件性があるとでも言うのか。

所田と名乗る刑事の容貌は、極めて温和なオジサンと言った印象であり、人の良さそうな暖かみさえ感じさせた。

「それではどうも」

と所田は軽く会釈をして帰って行く。気になった進は病院の人たちに聞いてみずにはいられなかった。

「あの刑事さんは村麦先生のことを何か調べていらっしゃるんですか？」

あの刑事から聞き込みを受けた病院の人たちによると、あの刑事は生前の村麦の病院での評判や交友関係について聞き込みをしているのだと言う。

そしてもうひとつ進が驚いた事は、所田刑事は警視庁の管轄ではなく、栃木県内の警察署から来ていると言うことであった。

何故栃木県の刑事がわざわざ東京まで来て村麦の身辺を捜査しているのか？。

その時の進には所田がここまでどうやって辿り着いて来たのか、その長く地道な、でも恐るべき執念の遍歴を知る由もなかった。

3

その翌日、進は夜遅くまで三鷹市にある開業内科医で検診用の医療器具の新製品の営業にかかっていた。

来診の患者の診察が終わるまで待ってくれと言う医師の為に夕方まで待った後からの営業だったので、一通りの説明を終えるだけで夜の8時を回ってしまっていた。

院長は検討すると言ってくれたが、それは断る時の常套句だ。今日も見通しの立たない営業に進は疲労を感じる。

思えば思うほど昭和台病院の村麦が死んでしまったのは痛手だった。

進は村麦の後任になった滝川に疎まれているばかりか、ここぞとばかりに他社の営業マンが入りし始めて、進が今後も昭和台病院との取り引きを継続出来るかどうか危うい状況に追い込まれてしまっているのだ。

そんなことをトボトボと考えながら電車を降り、いつもの様に自転車を走らせてマンションへ帰って来る。

人気の無いピロティに自転車を入れ、マンションの入り口に差し掛かった時、エントランスの脇にうっそりと立っている一人の男の影に気が付く。

なんだろう、と思って通り過ぎようとする。「こんばんは、高本さんですね」と声をかけてその男が近付いて来る。

「夜分にすみません。私は栃木県警真岡署の所田と申します」

暗がりからスッと姿を現したのは、紛れもなく昨日村麦の愛人宅のマンションと昭和台病院で会ったあの初老の刑事だ。

栃木県から単身上京して村麦の身辺を聞き取りして回っていると言う。その刑事が進にまで聞き込みに来て来たのだ。咄嗟にそう理解した進は迷惑と言うよりもその労を労いたい様な気持ちになってしまう。そして思わず笑顔を作り。

「あ、どうも、ご苦労様です」

と会釈している。

「何か僕に御用でしょうか？」

所田は相変わらず温和な笑みを浮かべている。

「すみません。出来ればちょっと落ち着いたところでお話を伺いたいのですが」

と頼まれたが、進はさすがに自宅に警察の人間を入れるのは嫌な気がする。

この刑事が調べている何かの事件と自分とは全く関係無いとしても、好江や美由に余計な心配をかけたくない。

それならと所田を連れて少し駅までの道に戻り、なるべく人目につかない様な喫茶店に入ることにする。

進と所田は国領駅の側の、少し寂れてはいるが落ち着いた感じの店に入る。

「いや、こんな時間にご無理を言って申し訳ありません」

席に着いた所田はそう言って深々と頭を下げる。

所田と言う男は進が思うに、世間で言う「刑事」の印象からは程遠い、何処か気の毒な自営業のオジサンと言った感じの人物である。まるでくたびれて衰れを誘う様な風貌だ。何日も風呂に入っていないのか、肌は薄汚れており、何となく臭い体臭を漂わせている。息も臭い。

アメリカのテレビドラマの刑事コロンボを想像する。コロンボも映像で見ている分にはユニークで魅力的だけど、きっと実際側にいたら臭いのもかもしれないな……等と進はとりとめもなく思っている。しかし目の前にいる所田は日本人のせいかコロンボに比べれば相当に貧相でヒョロヒョロな印象だ。

「いや～貴方に辿り着くまでには苦労しましたよ。実は昨日の病院での聞き込みで何もつかめなかったら、もう栃木へ帰ろうと思ってたもんですからね」

心良く所田の申し出を受け入れてくれた進に対して、まるで自分のここまでの苦労を労って貰いたいとでも言う様に所田は言う。

「高本さんもコーヒーで良いですか？」

「あ、はい」

「それじゃコーヒーふたつお願いします」

と所田は水とオシボリを置きに来たウェイトレスに注文する。

「この事件は……いや、まだ事件と言える段階でも無いんですがね、栃木くんだりから私ひとりで来てやってたものですから」

中々本題に入ろうとしない所田にイライラした進は先に質問を切り出してしまう。

「あのう、何か亡くなった村麦先生が事件に関係していたのでしょうか？」

「ええ、まあそうなんですがね」

「でも刑事さんは栃木県の方なんですよね？どうしてまた栃木の方がこちらへ来て聞き込みなんかなさってるんですか？」

「高本さんはかつて栃木県の両蔭医科大学と言うところに2年間在籍していたことがありますよね」

「は？」

一瞬自分が何を聞かれたのかさえ分からなかった、思わず聞き返してしまった。この刑事は急に何を言い出すんだらう……と思った。

「そこで貴方の2学年先輩だった大垣彰さんと言う医師のことを御存じですね？」

東名高速で事故死した昭和台病院の村麦との関係について事情を聞かれるものとばかり思っていた。それ以外のことに刑事の話が及ぶ等とは思ってなかったので一瞬キョトンとしてしまった。何故この男の口から大垣彰の名が出て来たのか、その時は全く理解出来なかった。

「は、はい、存じてますけど、確か先日亡くなったとか」

「そうです。貴方が大学にいた時は親しい間柄だったのですか？」

ふいにまた、フラッシュの様に進の脳裏に過ぎる白衣を着た大垣彰の姿があった。そして進に微笑んでこう言う。

「よっ、ご苦労さん……」

脳裏の映像とは別に進は目の前の所田の質問に応えている。

「いえ、まあ2年も先輩でしたから、それ程親しかったと言う訳ではなかったんですけど……」
嘘ではない。確かに進と大垣とは2年間進が両隣医科大学に在学中にたまたま同じゼミに所属していたと言うだけで、それ程親しかった訳ではないのだ。それ程には……。

「大垣さんが亡くなられた時の状況は御存じですか？」

「いえ、それは、僕は事故で亡くなったと言う連絡を貰っただけで、詳しい事情までは聞いてないですから。それにお葬式に出ようにもおいそれと行ける距離ではないので、弔電を打っただけで失礼させて貰ったもんですから」

「そうでしたか。いえね、私は地元の管轄で実はそっちの事故を先に担当してたんですよ。実際現場検証にも当たったんですが、大垣さんは4月16日に自宅マンションのベランダから転落死なされたんです」

「転落死、ですか？」

「はい」

それって自殺なのか？ と思ったが、あの大垣先輩が自殺なんかする訳はないと思ったので、口に出して言うのはためらった。それに何故かその意見をここで刑事に言うのは得策では無い様な気もして、口をつぐんでいたのだった。そして次に所田が語り出すことに耳を傾けていた。

「それにちょっと不思議な状況がありましてね」

「不思議って？ 何がですか？」

「大垣さんが亡くなられたのは今月の15日の深夜、つまり16日の午前0時20分頃です。大垣さんの自宅は栃木県真岡市八条にあるマンションの8階なんですけど、事故当時ひとりで居間でテレビを見ながら酒を飲んでいたらしいんです。その時隣の部屋では奥さんの圭子さんがお休みになっていたんですが、突然凄まじい叫び声を聞いたかと思うとドタバタと走り出て行く様な物音がして、圭子さんが駆けつけてみると大垣氏の姿がなく、開け放たれたベランダへ出て下を見してみると、植え込みに倒れている大垣氏の姿を発見したと言うんです。この時家にいたのは他に子供部屋で寝ていた小学生の男女二人の子供さんだけでした」

初めて聞く生々しい話に進はショックを受けて言葉を失ってしまい、所田の顔を見つめる。

「でも何故大垣氏は突然ベランダへ出て欄干を乗り越える様な事態になったのか、発作的な自殺とも考えられるんですが、圭子さんは理由として思いつくことは何もないとおっしゃってるし、遺書らしき物も発見されてないんですよ。だから何らかの事情で誤って転落死したと言う以外に解釈の仕様が無いんですがね、私としてはどうも腑に落ちない点がありまして……」

と言うと所田は胸ポケットからタバコの箱を出し、一本引き抜いて口に咥え、百円ライターを出して火を点けようとして進を見る。

「あ、タバコ、良いですかね？」

「はあ、どうぞ、僕は吸いませんけど」

所田はタバコの先に火を点けるとゆっくりと味わう様に吸い込み、しばし間を置いた後濃い色をした煙を意外な程の勢いで上へ噴き出す。

その所田の顔を見ていた時、進はさっきから感じていた違和感が何だったのかに気が付いた。

さっきから所田は話している最中も、タバコを出して火を点けて煙を吸い込む最中も、片時も進の顔から目を離さないのだ。

特に怖い目をして睨んでいると言う訳ではない、さりげない仕草を装いながら、考えながらゆったり話している様なふりをしながら、進の表情を逐一漏らさず観察しているのだ。

嫌な気分になる。一体このくたびれた刑事さんは進に何を聞きたくてここまでやって来たと言うのか。溜まらずに進は所田の話に先を促す。

「それで？ その刑事さんが気になるところって言うのは何なんですか？」

「はい、一番に私が思うのは、何故大垣氏はベランダへ出る必要があったのかということなんです。その夜の栃木県の外の気温は4度ですよ。ちょっと酔いを醒ましにベランダに出ると言うのは考え難いですよね。それに酔っていたとはいえ何故欄干を乗り越える必要があったのか。しかも圭子さんの証言によれば慌てふためいて窓を開けて外へ出た様な物音だったと言うんです。とすればやはり酔いを醒ましに出たのではない。私が思うに侵入者から逃れようとして逃げ出た様な印象なんです。そう考えれば転落した大垣さんの顔のことも理解出来るんです」

「えっ？ 顔って？」

「大垣さんは8階から転落したんで遺体はかなり損傷を受けていたんですが、顔にはそれ程の変形はなかったんです。でもその表情がね……私の経験では不慮の事故で亡くなった方はあんな表情はしてません」

「あんな表情って言うのは？」

「あれは自分が死ぬことに対するの恐怖の表情ではなくて。何か恐ろしい他者に襲われた時の驚きと言うか、驚愕と言うか……」

一体あの大垣さんがどんな顔をして死んだと言うのか、進には全く想像もつかなかったが、何か背筋が寒くなる様な怖さを感じるのだった。所田の話はまだ続く。

「私の思うにやはり大垣さんは自分から飛び降りたのではなく、誰か侵入して来た他者に襲われて、それから逃れようと必死のあまりベランダへ追い詰められて落ちる結果になったのではないかと思うんです。でもそれにしても誰かが玄関のドアを開けて押入って来るなり、乱入して来るなりの物音がしたはずじゃないですか、でも隣の部屋で寝ていた圭子さんは大垣さんの叫び声と、ドタバタとベランダに出て行く物音を聞くまでは何も気付かなかったと言うんです。圭子さんと大垣さん以外に家の合鍵を持っている人はいないはずなんです。それにもし私の思う様に何者かがマンションの合鍵を持って物音も立てずに侵入して来る事が出来たのだとしても、大垣さんをベランダに追い詰めて落とした後、間髪を置かずに駆け込んで来た圭子さんに見つからずに部屋を出て行く事が出来たんだらうかと、そこにも疑問が残るわけですよ」

タバコが長い灰になっていることにも気付かずに話続けている所田は、やはり進の顔から目を離さない。

所田の手にしたタバコに気を止めた進の視線に気付いたのか、所田は思い出した様にタバコを灰皿にポンと弾いて灰を落とし、再び口に持って行き、深呼吸する様に深く煙を吸い込むと、一度間を置いてから、再び深い色の煙をボウと吐き出す。

「もし他者の犯行だとすると、状況からして一番疑わしいのは奥さんなんです。これはまずあり得ないと言って差し支えないでしょう。なんせ動機が考えられない、夫を殺しても何の得にも

ならないばかりか、これまで順風満帆だった人生を台無しにしてしまう訳ですから。何より私には圭子さんのあの尋常でない動揺の仕方がね、長年刑事をやって来た私でも居た堪れなくなる様な嘆き方には、疑いを差し挟む余地が無い様に思えましてね。その他に家にいたのは二人の子供さんですが、まだ小学2年生の長男と1年生の長女の犯行と言うのは常識的にも考え難い。例え何か隠された特別な事情があったのだとしても、小学生の体力で大人の男をベランダの欄干を乗り越えさせて落とすと言うのは、物理的にも不可能に思えるんでね」

そこまで話すと所田は一時進の顔から目線を逸らし、短くなったタバコを灰皿に押し付けて揉み消した。そして再び進の顔に目線に戻して話始める。

「いえね、うちの上層部の判断はもうすっかり大垣さんは酒を飲んで泥酔状態における事故死ってことで片付いてしまってるんですがね、私はどうにも気になりまして、いやね、正直私はもうあと少しで定年の身なんです。結局最後まで現場を駆けずり回って終わりましたが、もう今じゃ若い頃のような元気もなく、刑事部屋でもすっかり隠居扱いされてましてね、そうすると私にも意地がありまして、長年現場を踏んで来た経験を活かして、いっちょ普通の捜査では見逃してしまいそうな難事件でも解決してやって、最後に若い奴らの鼻を明かしてやろうなんて、はは……そんな気持ちもありましてね、いやこんなこと話しても貴方には関係ありませんでしたね」

「いえ、そんなことは、ないですけど……」

くたびれた所田の笑う顔を見ていると、進はふと何年か先の自分の姿を見ている様な気がして、妙な共感じみた感覚さえ覚えてしまうのであった。

「県警の方ではこの事故を事件として扱ってる人間は私以外に誰もいないんですよ、ま、それでも何人か私のことを慕ってる若い奴等が協力してくれてはいるんですがね、それで私は一人で捜査を始めた訳です。まず大垣氏の奥さんから御主人の交友関係について話を聞いたんですが、地元の大病院の跡継ぎとして生まれた御主人は朗らかな人柄で、今までに他人とトラブルを起こした事なんか無いって言うんですよ。家庭でも良い夫で、子供たちには優しい父親だったそうです。仕事上のことで揉め事やトラブルに巻き込まれる様なことも思い当たることは何も無いと言うことでした。それから大垣さんが勤務していた病院へ行って、その院長をしている大垣さんのお父さんにもお会いしたんですが、あの落胆振りは見ていると気の毒でしたよ。そりゃ跡継ぎとして大いに期待していた一人息子を失ったんですから無理も無いですが。お父様の話も、奥さんの圭子さんと同じで、大垣さんが人から恨みを買ったり、トラブルに巻き込まれていた様な気配は全くなかったと断言されました。それから病院の他の方たちにも聞いて回ったんですが、誰が言うにも、あの若先生が人に恨みを買う様なトラブルに巻き込まれるなんてことは考えられないとおっしゃりましてね。院長の息子と言ってもお父様は厳格な方で、彰さんを甘やかす様なことは一切なかったそうで、あくまで一勤務医としてしか扱わなかったそうです。一生懸命職務をこなしている姿が健気であったとさえ言う人がいましたよ。他の同僚の先生たちも同様に、あの若先生が外で女を作ったり、また悪い犯罪に加担する様な暇なんか絶対に無かったと口を揃えて仰るんですよ。ただ若い頃には……」

「えっ？」

若い頃には……その言葉への進の反応を、微妙ではあったが所田は見逃さなかった。

「いえね、若い頃にはまあ地元でも有数の大病院の御子息と言うこともあって、また朗らかでハンサムな容姿だったことから、女性の患者さんから看護師まで、女の人からは人気がありましてね、結婚してからは落ち着いたものの、若い頃には随分浮名を流した時期もあったんだそうです」

「そうですか……」

ここで所田は進の反応をじっくりと見る様に落ち着いて一息つくと、ちょっと間をおいてから先を続ける。

「そこで私の捜査は行き詰まってしまったんです。大垣さんの身辺からは家庭からも職場からもそれらしきトラブルの話は嗅ぎ付けることが出来なかったんですよ」

「そうですか」

そこまで話を聞いた進は何と言ってよいやら分からなくなってしまった。

一体この刑事は何が言いたくて進を付き合わせているのか。行き詰まった捜査の愚痴を聞かせる為にわざわざ進が帰宅するのを待ち伏せし、喫茶店に連れ込んで長々と話していると言うのか

。

そんな進の気持ちには気付きもしない様に所田は続ける。

「そんな時なんですよ、私が神奈川県で起こった村麦実さんの事故の話を聞いたのは、いや偶然なんですがね、私には県警の交通課で長年課長を勤めてる脇坂と言う同期がおりまして、たまたまそいつと食堂で一緒になった時に、お互いに抱えてる事件や事故の案件についてお喋りしてるうちに耳にしたんですよ」

「はあ」

「そりゃ他人が聞いたら栃木県で起きた転落死事故と、遠く離れた神奈川県で起きた自損事故とは何の関係も無いと思われるでしょうが、私はどちらも当事者が一人で不自然な死に方をしたと言う点と、これも偶然と言ってしまうとそれまでなんですが、どちらも医者として職業としているところに引っ掛かりましてね、それで神奈川県警まで訊ねて行って事故の詳細を聞いてみようと思った訳なんですよ」

「はあ」

「無くなった村麦さんは事故当夜自家用車のジャガーを運転して伊豆方面から帰宅途中の東名高速道路で、見通しの良い長い直線を走行中に突然ハンドルを切ってスピンを起こし側壁へ激突、車は横転して村麦さんは全身を強く打つショックと頸椎を含む全身4箇所を骨折して死亡したそうです」

進は初めて聞く村麦の事故の実情に恐ろしい思いだったが、そんな進の心情を気に止める様子もなく、所田は話を続ける。

「事故を起こした場所と言うのはかなり長い直線の続くところで、対向車線は互いに独立していて相互通行ではなかったんです。それに追い越し車線を含む片側3車線でかなり見通しの良い場所だったらいいんです。しかも事故当時他に走っていた車は少なく、少なくとも村麦氏の車の前後約100メートル以内には他に車がいた形跡は無いと言うんですよ。不思議だと思いませんか？」

「は、はあ」

「村麦さんはそんな状況の中でどうしてスピンを起こすほど急にハンドルを切ってしまったんでしょう」

まるで進に答えを求めるかの様に、所田は身を乗り出して進の顔を見つめて来る。

そんなことを聞かれても進に分かる訳はないのだが、進も考えて何かしら応えなければならない様な雰囲気だったので、仕方なく思いついたことを口に出してみる。

「居眠り運転とかじゃないんですか？」

「居眠り運転ならば徐々に方向を失って側壁に車体を擦る様な形で事故になるのが一般的なんです」

「それじゃ酔っ払いとか……」

「遺体からアルコール分は検出されなかったし、司法解剖の結果麻薬性の薬物等が検出されたと言う報告もありません」

「だけど……」

進は何か他の原因を考えめぐねて言葉に詰まってしまう。それを察したのか先回りする様に所田は言う。

「道路に何か大きな動物が立ち入ったと言う可能性もありますが、そこは高架になってる部分だし、今までに動物が入ったなんてことは一度も無かったそうです」

「それじゃ……誰か他に同乗者がいたとか」

「私もそれを言ったんですがね、もし他に同乗者がいて、何らかの形で事故の原因を作ったのだとすれば、あれだけの事故を起こした車に乗っていて本人も無事で済む訳は無いと言われてまして。実際事故を起こした車を見ましたが、私もそう思いましたよ」

「車に何か仕掛けがしてあったとか、良く小説とか映画であるじゃないですか、一定のスピードを超えるとブレーキが効かなくなる仕掛けとか」

「それも含めて車体を調査したらしいんですが、そうした仕掛けを施した痕跡もなかったそうです」

「でもそれじゃ……」

「不思議でしょう？」

まるで進がその謎を解く鍵を握っているとでも言う様な所田の問い詰めに、いい加減進は面倒臭くなって来てしまう。

「それじゃやっぱり、単なる事故だったんですよ」

と半ば突き放す様な言い方で言う。

「ただね、やはり私は現場写真の村麦さんの顔が気になりましてね」

「顔ですか？」

「はい、栃木の大垣さんと同じ顔をしているんですよ、その死顔が」

「同じ顔……ですか？」

「ええ、村麦さんも大垣さんと同じく何か恐ろしい物を見てしまったと言うか、あり得ない物に遭遇して驚愕している様な顔なんです」

「恐ろしい物って何ですか？」

「それが分からないんですよ」

「はぁ、それは刑事さんにも分からないんじゃない、尚更僕に聞いても分かる訳ないじゃありませんか」

進としてはいい加減ウンザリしていると言う意思表示をしたつもりだったが、所田はそれが分かっているのかいないのか分からない表情で、進の意志など意に介さない様に話を続ける。

「私は神奈川県警にお邪魔した後、その足で世田谷区成城の村麦さんのお宅に伺って、近頃の村麦さんの行動や周辺に不審なことが無かったかをご家族の方に聞いたんです。村麦さんはお仕事が大変に忙しかったらしく、休日も家を空けることが多かったそうですが、ご家族はそんな村麦さんのことを理解していた様です。でも本当のところは外で何をしているのか分からない部分も多かったそうです」

さもありません……と進は心の内で思ったが、口に出して言うのは謹んだ。

「そんな訳でご家族からは村麦さんが犯罪に巻き込まれていたとか、怪しい人物の影があったとか言う情報は得ることが出来なかったんですよ」

「はぁ」

「それで今度は職場である昭和台病院の方へ伺った訳です。そもそも村麦さんは八王子市内の開業医で勤務していたそうなのですが、昭和台病院の前任の院長に引き抜かれて来られたそうで、それから10年で医局長にまで出世されたんですから相当なやり手と言われていた様なのですが、実は職場の同僚、特に助手とか看護師とか、下に付いていた方たちからの評判はすこぶる悪くてですね。目上の人には機嫌を取って自分の処遇を良くすることに長けていたんですが、自分がその地位に着くと途端に威張りだして、自分より目下の者に対しては酷いくらいにコキ使っていたと漏らす方もいましたね」

そりゃそうだろう、あの人ならば……。

その時の所田の目にギクリとした。進はそんな村麦の悪い評判を聞いて「さもありません」な表情をしていたに違いない。所田の顔は「そうでしょう？ 貴方もそう思っていたでしょう？」とでも言わんばかりの顔つきだった。

「それに私の聞き込みによると仕事以外にも銀座のクラブや違法なカジノバー等にも出入りしていた様でしてね、夜の遊びの方でもかなりお盛んだったみたいですね」

「はぁ……」

そんなことは僕が一番良く知ってるよ！ と言いたかったが、ここも進は黙っていた。もうこれ以上この刑事の話を聞かされていることに我慢が出来なくなっている。

「私はこの手の話を当事者の友人等から聞き出すのが得意でしてね、生前村麦さんと良く遊んでいたと言う病院の某氏からもいろいろと情報を得ることが出来たんですよ」

もう本当に進は聞いているのが辛くなっていたのだが、話を打ち切って帰ると言うことが出来ない。

「その人によると、村麦さんはここ数年密かに若い愛人を作って囲っていたそうでしてね、あ、これはここだけの話にしといて下さいね」

そんなことはもうずっと前から知ってるよ……。

「銀座とか六本木のクラブで知り合ったホステスを愛人にすることが多かったらしいんですが、その人が近頃聞いた話ではアジア系の出稼ぎ女が金が掛からなくて良いとか漏らしていたそうです」

それがあの例のマンションの女だと言うんだろう……やっとな話の繋がりが出て来たのか。

「昭和台病院の受付の女性から、村麦さんが死亡したと言っても信用せずに頻りに電話をかけて来た発音のおかしい女がいると言う話を聞きましてね、ピンと来たんですよ、それはきっと村麦さんが囲っていた愛人に違いないとね、それで私は電話局に頼んで病院に掛かって来た電話の通話記録と、死亡した村麦氏が所持していた携帯電話の通話記録とを取り寄せて照らし合わせてみたんです。そこに共通する番号が村麦さんの愛人の電話番号に違いないと思いましてね。でもその人は村麦さんの事故を信用していない訳だから、あの事故が事件だとしてもまず関係ないとは思ったんですが、そこが私が犬の所田と言われる所以でして……」

そんなことは僕の知ったことじゃないよ。と言いたかったが、進は早く帰りたい一心で黙っている。

「私はどんな細い線でも調べてみないことには気が済まない性質でしてね」

「ああ、そうですか」

ついに進はかなり露骨な態度に出してしまったのだが、やはり所田は気に止めないのか、それとも本当に気が付かない様子である。

「そこで見つけたんですよ、村麦さんの愛人の物だと思われる電話番号をね、電話局に要請してその携帯の持ち主を洗い出して貰ったところ、それは渋谷でバーを営んでいる人物だったんですが、私が行って問い詰めるとその携帯を所持している27歳の中国籍の女のことを白状しましてね、さっそくその女が最近引越したと言うマンションを訪ねてみたんです」

「……」

「そうです、そこで初めて貴方にお会いしたんですよ」

やっとなここまで話が来ましたと言わんばかりに所田は笑顔を見せると、一息つく様に新しいタバコに火を点け、店内のウェイトレスに「コーヒーお代わり下さい」と大きな声で言い付ける。

「あ、貴方も飲みますか？」と進にも聞いて来たが、進のカップにはまだ冷め切ったコーヒーが半分程残っているし、進としてはもう早く帰りたいだったので「あ、まだありますから」と断ったのだが「もう冷めちゃってるでしょ、私が御馳走しますから」と言って「あ、お姉さん！ コーヒーお代わりふたつね、ふたつっ！」と叫ぶ。

「その女はね、半年程前からその渋谷のバーにホステスとして勤めてたらしいんですが、そこに客として来ていた村麦さんと知り合ったんですよ。店の者によると村麦さんは金払いも良くて、他の客とのトラブルもなく良いお客さんだったそうです。それからあのマンションですよ、貴方も御存じの通り、あそこはオートロック式になっていてインターホンで上の部屋からロックを解いて貰わないと敷地に入れないじゃないですか、私が警察だって言うとしても開けてくれないんで、それで貴方もご承知の通り管理人さんに頼んで入れて貰って部屋の前まで行ったんです。でもやっぱり中々ドアを開けてくれませんでね、私が事情を説明して、旅券や在留許可の件で来たのではなくて、聞きたいのは村麦さんのことだけだってことを説明したらようやく開けてく

れました。それで話を聞くことが出来たんですが、村麦さんとの関係については、上海から来たあの女の子は日本の裕福な男に愛人として囲われると言うありがちなパターンでね、こんな言い方もヘンですが、特に変わったところは無かったんです。彼女としては村麦さんはこれからずっと生活費を出して貰っていっぱい稼ぎ出そうと思っていた相手だった訳だから、突然死んでしまったと言われてもどうにも信用出来ずに何度も病院へ電話を掛けていたと言う訳です。あのマンションの家賃も村麦さんが出していたんでしょう。可哀相に重要なパトロンを失って酷く落胆してる様子でしたよ。彼女は村麦さんが人から命を狙われていたと言う様なことは知らないと言うことでした」

ウェイトレスが新しいコーヒーをふたつトレイに乗せて持って来た。所田は熱く湯気を立てているコーヒーカップをありがたく受け取ると、砂糖もミルクも入れずにズズと音をたてて啜り上げる。

進にはここから話がどんな展開になって行くのか、もう訳が分からなくなっていたが、何故か所田は余裕を持っており、まだまだこれから面白い展開があるのだよ……とでも言わんばかりの表情をしている。

「そこで私は八方塞がりになっちゃいましたね、栃木県と神奈川県で起きた二つの不審な死亡事故に勝手に事件性を嗅ぎ付けて単身捜査に飛び出してみたは良いものの、ここまで来て何の手掛かりも発見することが出来ないんですから。二つの事故が何者かの故意による事件であると立証するには、二つの事故に共通点を発見する必要があるじゃないですか、それが全く分からなくなってしまった物ですからね……」

「で、やっと見つけた共通点が僕だったって言う訳ですか？」

思わず口走っていた。

思わぬ進の発言に所田は一瞬言葉に詰まったが、落ち着きを取り戻そうとする様に一口コーヒーを啜ると話始める。

「そうなんですよ、これだけ嗅ぎ回っても何も出て来ない訳ですからね、いい加減私も諦めて栃木へ帰らなきゃと思ってたんですが、最後にもう一度だけと思って昭和台病院を訪ねてみたところで、貴方と再会したんですよ、受付で新しい医局長との面会を求めて頼んでいたでしょ」

あの時の自分は我ながらあまり見られたくない姿であった。

「それで貴方のことが気になりましたね、失礼とは思ったんですが、他の方に貴方のことを聞いてみたんです。そうしたら貴方、村麦先生に専属の営業マンで、村麦さんからは子分の様に扱われて、コキ使われてたって言うじゃないですか」

子分の様にコキ使われてた……他の人からどう見られようと、そんなことは気にしてられないのが営業の仕事だと思っていたが、他の病院関係者たちが自分のことをそんな風に見ていたのかと思うと、所田の言葉に少なからずショックを受ける。

「それで私は、貴方の経歴とか現在の境遇とかを調べさせて貰いましてね、もうこの事件に関してはこれで最後にしようと思ってね、もし何も出て来なかったら大人しく栃木へ帰ろうと思ってたんですよ。そうしたら貴方、出たじゃないですか、栃木で死亡した大垣さんの出身した大学に同じ時期貴方は在学していた……」

どうです、よくも私はここまで辿り着いて来たでしょう？ 私の労力を褒めて下さいよ。とで

も言わんばかりの得意顔をして所田は進に微笑みかける。

ここまで来ると進は不気味と言うより気持ち悪いと言う感情が胸に湧いて来るのを感じている。

この刑事は勝手に自分の趣味で、どう見ても不慮の事故としか思えない二つの死亡事故に無理矢理事件性をこじ付けて、進をまるで重要参考人の様に位置づけようとしているのだ。

偏執狂と言うか、長年刑事等をやっていると言う人物も出来上がって来るのかと、呆れる思いだった。

「それで何ですか？ だからどうだって言うんですか？ まさかその二つの事故が殺人事件で、僕がその容疑者だなんて言うんじゃないでしょうね」

「いや、まだそこまでは言ってませんよ。ただ、現時点で私が聞きたいのは、大垣さんの事故があった4月16日の午前0時20分頃と、村麦さんが高速で事故を起こした19日の夜11時頃に、貴方が何処で何をしていたかと言うことなんですがね」

進は仰天してしまった。まさかそんな展開になるとは思いもしていなかった。

「……アリバイと言うことですか、分かりました。ちょっと待って下さい」

進は鞆からシステム手帳を取り出した。そんなことに真面目に応えようとしている自分にさえ苛立つのを感じながら、その日のスケジュールを調べてみる。

「刑事さん。そうならそうと最初に仰って下さいよ、アリバイがしっかりしてれば良い訳でしょう。それならこんなに長々と話を聞く必要も無かったじゃないですか」

そんな進の抗議じみた言動にも表情ひとつ変えずに所田はタバコをくゆらせている。これが刑事の仕事なのだからしょうがないだろう……とでも言ったところなのか。全く普通にしている。

システム手帳の問題の日付けのページを繰り出すと進は次の様な内容を出来るだけ事細かに所田に説明した。

まず第一の大垣彰が転落死した時刻、4月16日の午前0時20分頃。

この日、つまり15日の夜は今年新卒で入社した2名の新入社員の歓迎会として御茶ノ水にある割烹居酒屋「錦の茶屋」にて一次会が午後の9時まで行われていた。

その後進は営業課長の島孝二郎につかまり、二次会の会場へ行った。そこは島の普段からの行き着けのスナックで、進がそこから解放されたのが午後10時30分頃。

そして自宅マンションに帰宅したのが11時30分頃で、その後就寝、翌朝家を出るまで自宅にいた。

第二の村麦が東名高速で事故を起こした19日の夜11時頃。この日は後輩社員の塩中透と共に練馬区の顧客である籠原医院に医療器具のメンテナンスに伺い、その後院長を接待する為に池袋へタクシーで移動、池袋駅近くのスナック「スワニー」で飲食し、店を出て院長をタクシーに乗せたのがほぼ11時頃。この間塩中がずっと同行していた。

お代わりのコーヒーが冷めるのも気にせず所田は進の話の逐一漏らさず手帳に記入している。後でアリバイの裏づけを取る為なのであろう。進はもう気にせず放っておくことにする。

ひととおり話を聞き終わると、所田はポケットからさりげなくジッポのライターを取り出して、テーブルに置く。

「それとこのライターなんですがね、これに見覚えはありませんか？」

「は？ いえ、僕はタバコは吸いませんから」

「そうですか、ちょっと手に取って良く見て貰えませんかね」

疑うことも知らない進は言われるままにライターを手にとり、そのボディに彫刻された模様等を眺めて見た後、テーブルに置く。

「いえ、やっぱり見たことありませんけど」

「そうですか、それなら良いんです」

所田はさり気無くライターをハンカチですくい取る様にしてポケットに戻す。お人好しな進はまさかそこまでとは思っていなかったが、勿論指紋を取る為である。

「どうも遅くまでご足労おかけしました」

と、語るべきことは全て語ったと言う様に、ようやく腰を上げた所田は、進に礼を言って頭を下げる。だがその時も顔を完全には伏せず、進の顔から目を離さない。

進は所田がレジに行って金を支払うのを黙って見ている。それから店を出て駅に向う所田と別れた。

進はやれやれと言う風に急ぎ足で家に向う。

ふと気になって振り返って見ると、小さくなった所田がまだ店の前に立ってこちらを見ている。振り向いた進に小さく会釈する。

進は背筋にゾットする物を感じるが、自分には何もやましいところは無いのだからと思い、気にせずに歩いて行く。

僕が大垣さんと村麦先生を殺した殺人の容疑者だって？ 一体何をどう勘違いしたらそういう見解になるんだろうか、しかし警察と言うものはそういう無駄な捜査を無限に繰り返しながら、真実を探り出して行くものなのだろう。と解釈することにする。

しかし一番驚かされたのはやはり所田の口から出た大垣彰の名前だった。

「よっ、ご苦労さん……」

それは進の中では無かったことにしていたことだった。二度と思い出してはいけないことだった。もう既に「思い出す」と言うことさえ思いつかない程遠い過去として決着がついているはずの出来事だったのだ。

それなのに……封印をしていた映像が進の意志に反して再生されてしまう。スイッチを切ろうとしても勝手に始められて、最初の断片が……。

……あの日、夜遅くに大学の研修室にいる大垣から電話があり、調べ物をしているのだが、どうしても進の持っている研究データを見せて欲しいので持って来てくれないか、と呼び出されたのだった。

仕方なく進は大垣が要求した資料を持って大学へと出かけた。人気のない校内を歩いて灯りの点いた研修室を見つけ、ひっそりとした室内に入って来た時、最初に聞こえて来たのがその喘ぎ声だった。

最初は微かに聞こえてきて、何だろうと思っていた……それは鼻にかかった女の鳴き声の様だった。

ああ、あの声が……もうやめてくれ！ 拒絶しようとする進の意志に反してそれはどんどん進

の中で映像を再生して行く。

ペチンペチンと言う肌がぶつかり合う音。これ以上開かんと言わんばかりにほぼ180度を開かれた女の真っ白な太腿の間に割って入って、凄い勢いで打ち付けられていた男の尻。それは引き締まった大垣の尻だった……。

まだ女性の身体に触れたこともない進には一瞬自分が何を見ているのかも理解出来なかった。余りの驚愕に声を出すことも忘れ、衝立の陰からそっとその様子に見入ってしまった。

その時の、上半身は白衣を着たままの大垣に組み敷かれて身体を揺さぶられている女が葵ちゃんだと気付いた時の衝撃は、とうてい進の身体では受け止めきれぬ範囲の物ではなかった。

衝立の脚部に足が当たって、小さく出してしまった音に大垣が反応したのを進は見逃さなかった。

大垣はその時進が覗き見ていることを分かっていたのだ。

それでいて知らんフリをしながら尻を振り続けた。進の視線を意識してからは前後に揺すられる尻の動きが一層激しくなり、それにつれて葵ちゃんの呻き声も一層甲高く継続的に響き始めた。

愕然としたまま進はその行為が終わるまでそこに立ち尽くしていた。

遂に「ううっ」と呻いた後激しく尻を痙攣させながら大垣がうな垂れた。葵ちゃんはエビ反る様にベッドの上で跳ねた後、目を瞑ってグッタリと沈み込んでしまった。

「……おう、高本、いるんだろう」

そ知らぬフリをして声をかけた大垣に葵ちゃんは驚いて起き上がり、慌てて衣服を身に付け始める。

進は何も言えず、強烈に居た堪れず、かと言って動くことも出来ずに、ただそこに立ち尽くしている。

進がそこにいることが分かった葵ちゃんはみるみる顔色が真赤になり、俯いて顔を強張らせていく。

葵ちゃんは激しく動揺し、取る物も取り敢えずと言った感じでどうにか服を身体にあてがうと、ダッと駆け抜ける様にして進の脇を通り抜けて行った。

その間も大垣は何も意に介さないかの様にゆっくりとズボンを上へ、至極普通にしながらベルトを通していった。

そして白衣の乱れを直し、そこで初めて進に向き直って手を出した。

「よっ、ご苦労さん……」

進は持って来た資料を無言のまま大垣に突き出すと、そのままクルリと背を向けて室内を出た。

あの夜の、一部始終が進の中で再生されてしまった。もう二度と思い出すことは無いと思っていたのに。そんなことは記憶の中にさえ残っていないはずだったのに、何と云うことだ……。

あの刑事は、一体何の権利があって僕に……僕にこんな苦しい思いを思い起こさせてくれたのか！。

夜道の途中で頭を抱え込んだ進は、呻き声を上げながら、そのままよろめく様にして道端に蹲

ってしまった。

4

翌日の早朝。まだ通勤ラッシュの始まらない早朝の時刻。JR御茶ノ水駅に所田刑事が降り立った。

所田は高本進の勤めるシャノンメディカル株式会社があるオフィスビルの脇に隠れ、そこから出社してくるサラリーマンたちに向けて望遠レンズの付いたカメラを構える。

やがて社員たちが出社して来る時刻になると、所田の覗くファインダーの中、ぞろぞろと群をなして出社して来る背広姿の社員たちが溢れて来る。

そしてその中に、所田が待っていた高本進の顔が現れる。

所田は息を殺し、ファインダーの中に揺れる進の顔を中心に据えて幾度もシャッターを切る。

その後所田は物陰に隠れて待つ。やがて営業に出て行くであろう高本進の後姿を確認した後、シャノンメディカルのオフィスを訪れて聞き込みに回るつもりである。

所田は昨夜の進のアリバイの話に出て来た課長の島や後輩の塩中から聞き込みをして、進のアリバイの裏を取るつもりでいる。

進はいつもの様に朝の営業に出た後、昼前に社に戻って来て驚いた。そこには他の社員のデスクにすり寄ってメモを取りながら話を聞いている所田の姿があるではないか。

進の同僚や課長の島にまで取り入って、昨夜の進の供述の裏付けの為に聞き込みをしているのだ。

冗談ではない、アリバイの裏を取りたいのなら勝手に取れば良い、しかしこんな真昼間に堂々とオフィスの中でやられたのでは、まるで進が殺人事件の容疑者だと言うことを会社中に言って回っている様なもんじゃないか。警察だからってここまでする権利があると言うのか。

「ちょっと刑事さん。良い加減にして下さいよ、困るじゃないですかこんなところまで来られては」

と進は所田の側へ行ってトゲのある口調で訴える。

「いや～すいませんすいません。いやね、御迷惑とは思ったんですが、どうしても今日は栃木の方へ帰らなきゃならないもんですからね、昨夜貴方に伺った関係者の方からの聞き取りをしておかなければならないと思って。いや本当に申し訳ない」

口から出る言葉とは裏腹に、所田には全く悪びれた様子は無い。

これには閉口してしまう。だが考えてみれば、進のアリバイを証明してくれる会社の同僚や上司たちに、一通りの確認を取って貰いさえすれば、晴れて進の疑いは無くなり、二度とこの刑事の追及に遭う心配も無いのだから、と進は思い直す。

「あっははは.....あの刑事さんも刑事さんだな、高本が村麦さんを殺したとでも本気で思ってるのかね、あまりにも有り得なくて気の毒になって来たよ」

と課長の島は笑い飛ばした。

「高本君も災難よね、きっと好江ちゃんに話したら大笑いするでしょうね」

と総務の倉橋俊子も嬉しそうに言った。

所田が帰った後で進は聞き込みをされた同僚や上司たちに事の経緯を説明し、全くの誤解であること、そしてあり得ないことを立証しようとしている所田と言う男の偏執ぶりを説明して回ったのだが、どうやらそんなに心配する必要もなかった。

進の人柄を知る社の人々は、所田が進に対して持っている疑いを、まるで荒唐無稽な想像でもあるかの様に微塵も本気にしてはいなかったのだ。

第三章

1

シャノンメディカル株式会社で高本進の言うアリバイの裏づけの為の聞き込みを終えた所田は、御茶ノ水駅からJR中央線で東京駅に出て、新幹線で宇都宮へと向っていた。

この出張は県警の上層部の許可も得ずに自腹を切って来ていた為、所田としては少しでも経費を節約したいところだったが、今はそれよりも時間が惜しい。

高本進の勤めるシャノンメディカルでの、他の社員たちへの聞き込みの結果は、全て高本進の語る16日及び17日の彼の行動を立証するものに他ならなかった。

上司や同僚たちの証言する限り、高本の語るアリバイに疑いの余地は全く無い。

特に村麦実の事故があった17日の夜11時に関しては完璧である。

だが栃木県の大垣彰の場合はどうか、16日の午前12時。その日高本は新入社員の歓迎会があり、その2次会の会場となった御茶ノ水のスナックを出た10時30分には自由の身になっている。その時間からなら栃木の犯行時刻に間に合うのではないか？ こちらの件に関してはまだ調べる余地がありそうではないか。

所田には、高本のアリバイを裏づけたそれらの証言者たちに偽証の臭いを感じ取ることは出来なかった。高本を庇う必要など彼等には全く無いと思われた。

所田は新幹線の車窓をフルスピードで過ぎて行く景色を眺めながら、思えば自分はよくこんな取り留めもない捜査に独断で暴走してしまったものだと思う。

栃木県で起きた医師の謎の転落死と、神奈川県で起きた同じく医師の自損死亡事故に、所田は全くの直感で関連性を見出して、上司の許可も取らずに単身神奈川県警まで押しかけて行った。

神奈川県警では誰が見ても自損事故として決着がついている事故の調書を見せてくれと頼み、そんな栃木くんだりから訊ねて来た老刑事に対し、交通課の警官たちから奇異な目を向けられた。

それでも現場検証に当たった警察官たちに頼み込んで話を聞いて回った。

そして村麦医師の自宅から勤め先である昭和台病院、村麦の愛人であったと見られる中国籍の女のマンション……散々にあちらこちらを嗅ぎ回って聞き込みを繰り返したものの、何の手掛かりを得ることも出来ず、もう諦めようかと思っていた。

だがこれで最後と思って訪れた昭和台病院で、村麦の愛人宅マンションにいた高本進と再び会うことによって、始めて手掛かりらしき物を見出した。

高本進と言う人物は、このままでは全てが徒労に終わるかと思われた時、やっと見つけた光明だった。その時の所田は高本進と言う存在に興奮した。

そして高本の自宅にまで押しかけて、今までの自分の捜査の経緯を語って聞かせ、その反応を見たのだが、その時の高本の表情には全く何も見出すことが出来なかった。

所田の心づもりとしては、今まで自分の捜査によって高本進に辿り着いた経過を説明すれば、

高本が犯人だとすれば隠し様のない動揺を露わにするに違いないと踏んでいたのだ。

だが表情の変化を逐一見逃すまいと高本の顔から目を離さずにいたのに、それらしき動揺を読み取ることは出来なかった。

そして今日は会社に押し掛けて事件当夜のアリバイの裏付けを行ったが。結局は彼のアリバイ証言に嘘が無いことを確認して回ったにすぎなかった。

我ながら老体に鞭打って良くここまで奔走したものだと思うが、一方ではそんな自分に呆れる思いだった。

しかしまだ諦めるのは早い、例えその時事故現場に犯人がいなかったとしても、何か間接的な方法で殺人を犯す可能性だってあるはずだ。

例えば催眠術をかけてその時間になると本人も気付かないまま自ら死に至らしめてしまう様に仕向けるとか、本人の知らぬ間に潜在意識の中に何等かのキーワードを埋め込んでおいて、その言葉を耳にすると自殺する様に命令しておくとか、そんな方法があることをテレビか何かで聞いたことがある。所田はそんなことまでも想定しているのであった。

時代はどんどん移り変わり、犯罪の方法もどんどん新しくなっていくのだ。警察だってそんな可能性までも視野に入れて考えていかなくは、新しい時代の犯罪に対応出来なくなってしまうではないか。

所田はまだ諦めるつもりではなかった。第一の被害者である大垣彰と高本進が15年前の同時期に在籍していた両隣医科大学。

そこは我が管轄なので大手を振って聞き込みに行くことが出来る。地元の捜査で何か新しい事実がつかめるかもしれないではないか。

ポケットにはハンカチに包んだジッポのライターが大切に保管されている。それには高本進の指紋がついているのだ。

高本には伏せてあったが、実は大垣彰の自宅から鑑識に指紋を取らせた結果、たったひとつだけ、大垣が死亡する直前まで酒を飲んでいた居間のドアノブから、大垣の家族以外の者の指紋が検出されているのだ。

所田はその指紋と、ジッポライターに付いた高本の指紋とを照合してみるつもりだった。

それに今朝隠し撮りした高本の顔写真を持って、大垣の自宅マンションの近隣住民に、もう一度聞き込みに回るつもりであった。

それに高本が両隣医科大学にいた2年間に在籍していた他の学生たちを捜し、彼等の指導に当たった教授たちからも、また当時高本が居住していたアパートの持ち主等からも聞き込みをしたいと考えている。

そんなことを考えながらポーッと窓外を見るともなく見ていると。所田はふとそこにあるはずの無いものを見ている自分に気がついてギョッとなった。それは窓の外から所田の顔をじっと覗き見ている高本進の顔であった。走る新幹線の屋根にしがみついているのだ。

「！た、高本さん……あんだ……」

と思わず口にした時、新幹線はトンネルに入り、バツと真暗になって高本の姿も見えなくなった。仰天した所田はそのままじっとその箇所を見つめていたが、再びトンネルから出た時には消えて無くなっていた。

時速200キロ近くで走っている新幹線の屋根にしがみ付いて窓から車内を覗き見るなんて、そんなことがある訳はない、きっと疲労した頭の中で高本のことばかり考えていたのでそんな幻覚を見たのだろう。と所田は解釈した。

だが、今の妙に青白い、それでいて目だけが黒くギョロッとして、所田を見つめていた高本の奇怪な表情が、妙に生々しく記憶に残っているのだった。

2

栃木県警真岡署は真岡鉄道の真岡駅の近く。県内から茨城県へと流れる美しい五行川を渡ったところにある。

宇都宮駅からバスに乗り、所田は4日振りに真岡署に戻って来た。

広い駐車場を横切り、警棒を手にした門番に軽く会釈を交わして正面玄関から中へ入る。

受付のカウンターを尻目に署内を進んで行くと、所田に気付いた警官たちがチラチラと白い眼線を向けるのを感じる。それを無視しながら真っ先に階段へと向かい、2階へと上がって行く。

2階に上がるとすぐのところ所田の所属する刑事二課の部屋があるのだが、所田はそのまま通過して廊下の奥にある鑑識課へと向う。

鑑識課に入った所田は昔からの馴染みである担当の南河に声をかけ、ハンカチに包んだジッポのライターを託して、高本進の指紋の検出を依頼した。

続いて大垣彰の住んでいたマンションの管理人から預かっていた防犯ビデオの画像の分析結果を聞く為に、所田を慕っている後輩の三浦刑事の所属する刑事一課へと赴いた。

大垣彰の住んでいたマンションには階段や踊り場等の5箇所に防犯カメラが設置されており、随時3秒ごとの静止画像が記録されていたのだ。

所田は事故が起こった時刻の5時間前から、事故が起きてから1時間が経過するまでの防犯ビデオのテープを管理人から預かり、その画像のチェックを三浦刑事に依頼していた。

あの夜大垣彰が部屋に侵入した何者かにベランダから突き落とされたのだとすれば、その部屋に侵入及び脱出するには全ての防犯カメラの視角から逃れることは不可能だと思われた。不審者がいれば必ず写っているはずなのだ。

まだ30歳になったばかりの三浦は、22歳で真岡署に巡査として配属されて以来刑事志望であり、その時既に現場で最古株であった所田が刑事のイロハを一から仕込んでやったのだ。

三浦刑事の報告によれば、防犯ビデオに写っていた人物はどれも夕方から夜にかけて学校や仕事から帰宅した住人と幾人かの来訪者が全てであり、その他に不審者の人影を見つけることは出来なかったと言う。

「そうか……やっぱり」

がっかりする所田を見て、三浦はもじもじと何か言い出し難そうな素振りをしているので「どうした？」と問い質してみたところ「実は……」と言いながらパソコンからプリントアウトした三枚のビデオ画像の写真を差し出した。

「ちょっとヘンな物が写ってまして」

手に取って所田は見た。三枚の写真は防犯ビデオの静止画像で、どれも同じ角度であるマンションの階段の踊り場が連続写真の様に写されている。

「何だよコレは？」

と所田が問うと、三浦は「ここにヘンな光が映ってるでしょう」と写真を指さして言う。

これは時間的に大垣氏がベランダから転落するほんの5分程前に写された画像なのだという。三浦の指し示す所には確かに暗い階段の中にポツンと光る不自然な光が浮かぶ様に写っている。ビデオの画像は3秒にひとコマの割りで撮影されているのだが、その光はカメラの前を通過する経過に沿って、3コマの映像に連続して写っている。

1コマ目は階段の踊り場の手前、階段の下の方から登って来る様な形で光りの筋が来ており、2コマ目は丁度カメラの前を横切る様な位置で光の玉が後に尾を引いて浮かんでいる。

その玉は宙に浮かぶ人の横顔の様にも見えるが、定かではない。そして最後に写っている3コマ目では既に画像の上の方に光は消えかかっており、少しだけ光の尾筋が細い線になって下へ垂れ下がる様な感じで写っている。

それが何なのか所田にも検討がつかなかったが、三浦の言う様に「きっと何か、光の反射の悪戯だと思うんですが」としか解釈の仕様がなかった。それ以外に写真を分析する言葉は見つからない様に思われた。

その時はそれで片付けてしまったのだが、後から思うと所田の胸には何か言い知れぬ予感と言うか不安と言う様な、違和感が過ぎるのを感じていた気がするのであった。

続いて三浦は今日神奈川県警の伊谷交通課長から所田宛てに届いたA4版の封筒に入った資料を持って来た。

所田はうとましく思われることも承知の上で神奈川県警の伊谷交通課長に頼み込み、村麦の事故に関して2つの点で調査を依頼していたのだ。

まずそのひとつは村麦が事故を起こす前、伊豆のゴルフ場を出てから事故現場へ行く途中での村麦の運転する車の目撃者がいないかどうか探して欲しいと言うこと。

例えば高速道路の料金所の職員や速度違反の取締り用の撮影システム（オービス）に村麦の車が写っていないかを確認して欲しいと言うことであった。

その日村麦は医師会のゴルフコンペに参加した後、会場である伊豆のゴルフ場からひとりジャガーを運転して帰途に付いたことが他の参加者たちに確認されている。

もし事故に何者かの故意の関わりがあったとすれば、なんらかの犯人との接触なり、おかしい点等が見出されるのではないかと思ったのだ。

そしてもうひとつは神奈川県警内の保管場所に残されている事故車のジャガーの車内からの指紋の検出である。

大破したジャガーの車内はメチャメチャに破損しており、人が入ることもままならない状態だったが、処分する前に屋根等を分解して、出来る部分だけでも良いのでお願いしますと頭を下げて頼んでおいたのだ。

所田がそんな無理を言ってお願いしておいた調査の結果を伊谷交通課長が送って下さったのだ。

迷惑な所田の頼みを聞き、約束を守ってくれた伊谷に対して感謝の気持ちで一杯になる。

伊谷交通課長の報告によれば、村麦の車は制限速度を越えて走行中に高速道路に設置された撮影機に撮影されていたらしく、A4サイズにまで拡大した写真が同封されていた。

その写真には、運転する村麦が事故を起こす直前の姿が写し出されているのだが、誰もいないはずの助手席に人が乗っている様なぼうっとした光があり、人間の顔の様に不気味に目や鼻が形

作られていた。すぐに連想したのは大垣のマンションの防犯ビデオに写っていた不審な光の残像であった。

コレについて伊谷交通課長はどう言う見解を持っているのかはまったく記されていないかった。

それは見ようによっては高本進の顔に似ているとも思うのだが、気のせいかもしれなかった。

そして第二点の指紋については、報告書にはたったひとつだが大破したジャガーのハンドルから村麦氏以外の者の指紋が検出されたとあり。封筒に指紋の検出箇所の写真とサンプルが同封されていた。

所田はそれを持って再び鑑識課に向かい、南河に大垣彰のマンションの居間のドアノブから検出された指紋と、ジッポのライターに付いた高本進の指紋と、そしてこの村麦の車のハンドルから検出された第三の指紋との照合を依頼した。

その結果三つの指紋は完全に一致し、南河はこの三つが同一人物の物に間違いのないとの見解を述べた。

所田は興奮した。誰もが単なる事故と思っていた二つの死亡事故が、連続殺人事件に発展するかもしれないのだ。

所田は刑事課長に高本進に対する逮捕状の発行を裁判所に要請するよう依頼すべく、足早に刑事二課の部屋へと向った。

「これはちょっと無理だな」

まさかとは思ったが、恐れていたことが起きた。所田よりもずっと年若く、キャリア出身でありながら片田舎の警察署で刑事課長の地位に甘んじている川下は、上司の許可も得ずに自費で出張し、自分の憶測で勝手な捜査を進めている所田巡查部長を快く思っていないことは百も承知であった。

ここまで状況証拠がそろっていながら逮捕状の請求を許さないと言うのはどう言う了見かと、喰ってかかりたい気になったが、そんなことをしても無駄なことが分かっていたので思い留まる。

現場に指紋が残されていると言うだけで、容疑者に確固たるアリバイがあったのでは裁判所から逮捕状が降りるかどうか微妙である。それに動機もいくら村麦にコキ使われていたとは言え、村麦は高本に取って大事な顧客なのだから、殺してしまっただけでは今までの苦労が水の泡になってしまうのだ。

大垣の方にしたところで、過去に如何なる事情があったにせよ、15年も経った今になって復讐に走ると言うことも考え難い。

冷静に考えればそれももったもな見解なのだが、それ以前に川下刑事課長の反応は冷やかで「また困ったオッサンが余計なことを始めやがって」とでも言いたげな反応なのだ。

そもそも所田と川下との確執は川下が真岡署に赴任して来た4年前から始まっていた。

当時真岡署の管轄で起き世間を騒がせていた母親による一人娘殺害事件は、当初幼い少女が誤って一人で河へ転落した事故死であると判断されていたのだが、所田が母親の言動に不審を抱き執拗な捜査を繰り返した結果、遂に手掛かりを得て母親の犯行を暴き出したという経緯があった。

だがその時刑事課長として赴任したばかりの川下は、所田の唱える少女の他殺の線を踏みにじり、言うことを聞かずに他の事件を放り出してまでその事件に執着し、ひとりで捜査を続ける所田を疎ましく思っていた。

上司の言うことが聞けないのなら降格するとまで息巻いていたクセに、いざ所田が苦勞の末にやっと母親の犯行を裏付ける手掛かりを見つけて来ると、さも自分の指導による成果であると言わんばかりの記者発表を開き、全ての手柄を自分の功績としてしまい、所田の苦勞を蔑ろにしたのだ。

依頼所田は親子程も歳の離れたこの若き上司を軽蔑している。

とは言っても今度のケースの場合、冷静に考えれば逮捕状を取ることは難しいと言う川下の判断も無理からぬところもある。

だが、ここまで散々な苦勞を重ねて、やっとのことで辿り着いた所田にしてみれば、どうにもやり切れない思いを抱いてしまうのだ。

だがまだ諦めることは出来ない。そうだ、出来ることはまだある。思い直した所田は管轄内にある高本進と大垣彰の出身大学や、大垣の自宅周辺への聞き込みに出かけた。

3

あの煩い刑事が栃木へ帰って数日が過ぎた。

進にはまた煩雑だが不毛とも思える営業に回る日々が戻って来た。

例のガラスの弁償代金については、結局のところ仕方なく大手の消費者金融に借りることにし、月々の返済額を1万円にして、金利を含めて1年6ヶ月の長期に渡る返済期間で契約したのだった。

今から向こう1年と半年の間、僕のお小遣いは毎月2万円だ。考えてもしょうがない、しょうがないんだ……。

この頃になると進の容貌はますますやつれた顔つきになり、好江は心配していたが、進としてはこれと言って身体に調子の悪いところがある訳でもないのだから、放っておくより仕方がないのだった。

ただ……近頃よく見る様になっていた夢を、近頃は朝起きた時に徐々にだが思い出せる様になって来ていた。

たかが夢だからと言って片付けてしまえばそれまでなのだが、問題なのはその内容があまりにも異様なことであった。

それはとても人に話せる様な内容ではなかった。進としても何故自分がそんな夢を見てしまうのか、まったく説明もつかないのだった。

それは……夢の中で、自分が幼い女の子の首を締めているのだ。

その子の顔は知らないのだが、それはまだほんの4歳か5歳くらいの、美由より1つ下くらいの可愛い女の子だった。

気が付くと進はその幼女のか細い首を両手で締めているのだ。

女の子は苦しそうに目を引き瞑り、嫌々をする様に顔を左右に振って逃れようとするのだが、進の手はすっぽりと柔らかな首を包み込む様に締めているので、決して逃れることは出来ない。

このまま強く締めて殺すのは容易いことなのに、夢の中の進はそうはしない。

息が詰まるギリギリのところでは僅かに力を緩めて、半殺しのまま死なない様に空気を吸い込ませてやる。かと言って苦しみから逃れられる訳ではない、喉に空気が通ったか通らないかのところでまた首を締め、やがて息を吸うことも吐くことも出来なくなって少女は絶句する……。

目覚めた進は覚えている。まるで手の中にまだ幼女の柔らかな首の感触が残っている様な感じだ。

嫌な気分だった。自分にはサディスティックな趣味等は無い。ましてや幼女趣味なんてある訳がない。

テレビで連日の様に放映される幼児の虐待事件や変態行為のニュースを見る度に激しい嫌悪感に見舞われ、そんな犯罪を犯す者に対してやりきれない怒りを感じてしまうくらいなのに。何故僕があんな夢を見てしまうんだろう……。

ましてや自分にも美由と言う年端も行かない娘がいて、もし美由がそんな目にあったらきっと気が狂って死んでしまうだろうとさえ思うのに、まったく訳が分からない。

そんなある日、営業に出て珍しく早い時間に会社に戻った進が帰宅しようと会社を出たところで、ビルの正面玄関の脇に立っている所田刑事ともうひとりの男の姿を見つけたのだった。

嫌な物を見つけてしまった。とウンザリした気持ちになった進は無視して急ぎ足で行き過ぎようとしたが、逃さず所田は進の横にピッタリとついて歩いて来る。

「また貴方ですか、今度は一体何の用なんですか」

進としては精一杯の怒りを込めて言ったつもりだった。

「いやぁ、どうもすみません。こちらは調布警察署の神原刑事さんです」

と所田は紹介したが、進はその男の顔も見気にはなれない。

「何の用なんですか」

「すみません。今日は貴方に所轄の調布警察署まで任意の同行をお願いしたいと思ってやってきました」

任意同行？……。

思わず立ち止まった進は泣きそうな顔で所田を見る。

「どう言うことなんですか」

さすがの所田も進のベソをかいた様な顔を見て恐縮したのか、話し方を出来るだけソフトにしようと意識しつつ言葉を続ける。

「すみません。先日の事件のことでもう少し高本さんにお話を聞きたいことがありまして、今度はもっと深い事情についてお聞きしたいと思ったものですから、他の人に聞かれてもマズイ部分もあるかと思ひまして、それなら署の方へ来て頂いた方が良いと思ったもんですからね。かと言って私の管轄である栃木まで来て頂く訳にも参りませんし、貴方の住んでおられる調布署の方で協力頂きまして、場所をお借りしようかと……」

「今日これからですか？」

「はい、出来れば」

「困りますよ、今日は珍しく早く帰れると思って、僕だってたまには家族とゆっくり食事したいじゃないですか、僕には小さな娘だっているんですよ、僕と遊んで飲しくて家で待ってるんですよ」

涙を浮かべた進の訴えが効いたのか、所田はこれ以上は押せないと思い、では明日の日中ではどうかと提案してきた。

任意同行ならば強制ではないのだから、拒否しても良いはずなのだが、それではきっとこの刑事のことだ、また自宅や会社にでもしつこく押し掛けられたのでは溜まったものではない。

こうなればいっそのこと警察にでも何でも行ってじっくり話に付き合っやり、しっかりと自分の無実を証明してやるしかないと思進は考える。

「それじゃ明日、午前中に僕の方から伺いますから、今日のところはお引取り願えませんか」

「分かりました。それじゃお待ちしてますので」

と言って所田は立ち止まり、駅の方へと歩き出す進を見送る。

所田の隣りに立っている調布署の刑事だと言う男も進に向かって会釈したが、これには反応せず

に進は急ぎ足に駅へと向って行く。

4

翌日進は営業に行くと言って会社を出て、所田の待つ調布署へ任意出頭する為に新宿から京王線に乗り、ついさっき電車に乗って来たばかりの国領駅まで戻り、そこから歩いて調布警察署へと赴いた。

駅の近くには好江がパートに出ているファミリーレストランがある。もし前を歩いて好江に見つかりでもすれば余計な心配をかけてしまうと思い、進は遠回りになりながらもその場所を避けて行くことにする。

自分の住む街の管轄である調布警察署に入るのは、ずっと以前に一度自転車の盗難に遭った時以来である。

まだ新しいビルの一階のフロアは広く受付カウンターが横に伸びており、どちらかと言うと区役所を思わせる様な清潔感がある。

受付の担当者に声をかけていると、すでに隅のベンチに座って待っていた所田が進の姿を見つけて立ち上がり、スタスタと近くへやって来る。

「お忙しいところありがとうございます」と頭を下げて言う。

「あ、どうも」

「それじゃ、こちらへどうぞ」

所田はそそくさと進を促して通路を歩き始める。後に進が付いて来ているのを確かめて階段を上る。

「あのう、あまり時間が無いので出来るだけ早く済ませて頂きたいんですけど……」

その問いかけに所田は半分進の方に振り返りながらも微かに頷いただけで、曖昧に流されてしまう。

「こちらです」

と言って所田が扉を開けて進に入る様に促したのは「取調室」と書かれた小さな部屋であった。

入ってみるとそこは四畳半程の殺風景な部屋であり、向かい合って座る机と椅子が真ん中に置いてある。まるでテレビの刑事ドラマに出て来るセットの様な間取りである。

まさかこんなところに自分が座らされる日が来るとは、進は思ってもみなかった。

所田は当たり前の様に進の前に腰を下ろすと、さあ今度は逃がさないぞと言わんばかりに目を爛々と輝かせ、タバコに火をつける。

「一体何が聞きたいんですか、もう早く聞いちゃって終わらせて下さいよ」

「まあそう慌てずに、今記録官が来ますから、ちょっと待ってて下さいよ」

と言うと、そのまま黙ってタバコの煙をくゆらせ始める。進も仕方なく黙っている。

ちょうど所田が一本目のタバコを吸い終わろうとする時、ようやくノックの音がして制服を来

た若い警官が「失礼します」と言って入って来る。そして部屋の隅に置かれている記録用の机に着く。

それを確認すると所田は進に向かって姿勢を正し「お待たせしました。それでは始めましょうか」と言う。

「はい……」

「まずお聞きしたいのは、今から15年前。貴方が栃木県の両蔭医科大学に在籍していた時のことなのですが。その頃貴方と同じ学年で在籍していた依野葵さんと言う女性のことを御存じですよね」

その名前をこの人なんかの口から発音して欲しくなかった。嫌、例えこの男ではなくても、その名前を他人の口から聞くことは生涯無いと思っていた。あってはならないことだった。

「……」

「どうなんですか？ 本当のことを言って下さいよ」

「分かってますよ、はい、知ってます。知ってますよ、確かにその女性は僕と同じ大学で同じ学年でした。一緒に在籍していましたよ」

「それでは時間も無いと言うことなので単刀直入に聞きますが、その頃二学年上だった大垣彰さんと、依野葵さんと言う女学生と、貴方とは三角関係にあったのではありませんか？」

「……」

この刑事はどうしても進が一番触れて欲しくないことを持ち出すのだ。いやこれこそが刑事と言う職業の成すべきことなのかもしれない。

しかし、捜査の為だからと言って何の罪も犯していない僕をこうまで苦しめても良いと言うのか、今日こうしてわざわざ出頭して来たことだって僕としては大変な好意だと言うのに、それをこの様な酷い仕打ちで迎えられるとは、進は胸中に怒りの炎が沸き立って来るのをどうしようも無い。

「でも……どうしてそのことを？」

「いえね、私は栃木へ帰ってから貴方が在籍していた頃に同じ大学に通っていたと言う方々と何人かお会いしましてね、そこで皆さんから当時のことについてお話をお聞きしたんですよ」

「誰なんですかそれは」

「いや、それはここでは申せませんがね」

「その依野葵さんにも会ったんですか？」

「それにもお答え出来ません」

「貴方は何も答えられないけど、僕は全てに答えなければならないと、そう言うことですか」

「そうです」

「……」

「ある方の証言によれば、貴方は依野さんに対して片思いの感情を抱いていたけど、依野さんの方ではそうした貴方の気持ちには全く気付かずに、他の女学生の間でも大変人気のあった先輩の大垣彰氏に憧れを抱いていたそうじゃありませんか」

「……」

「どうです？ もちろん貴方もそのことは知っていましたよね？」

「……はい」

「2年生の2学期の途中で貴方は突然大学を中退されていますね」

「はい」

「何故ですか？」

「……」

「その頃在学していた方にお聞きしたんですが、貴方が中退されてから大垣さんと依野さんとは公にも公表する形で大っぴらにお付き合いを始めたそうじゃないですか」

そうだったのか……進は知らなかった。

僕がいなくなった後、あの二人は本格的に付き合いを始めたんだ。きっと僕がいた頃はまだ陰でこっそり付き合ってたんだ。

そう思うと一層の悔しさがこみ上げて来て、進は思わず唇を噛み締める。

そんな分かりやすい進の表情を所田が見逃す訳も無い。

「貴方が大学を中退されたことと、依野さんと大垣さんのことと、何か関係があるんじゃないんですか？」

食い入る様に質問してくる所田の視線が、進の顔に突き刺さる様でうっとおしい。

「そんなこと……ある訳がないじゃありませんか」

進はこういう場合に嘘をついて取り繕うことが全く出来ない人間だった。

所田の目には進の表情が「はい、全て貴方の言う通り、その通りでございます」と言っている様に読み取れるのだった。

だが、ここへ来て露わになる進のそうした性質が、前回国領の喫茶店で尋問した際の進の返答に全く嘘が無かったことを立証する結果にもなっているのだ。

「それでは何故高本さんは大学をお辞めになったんですか？」

「それは……勉強が難しく、付いて行けなくなったからです」

「ほう、でも私立の医大と言うのは入学金にしる授業料にしる大変な高額なのではないですか？」

そんな大金を支払ってまで入学した大学をそう簡単に辞められる物ですかね」

「そんなことは、貴方の知ったことじゃないじゃないですか！」

思わず大声を出していた。所田は進がこんなに感情を露わにしたのを見るのは初めてのことだった。実に分かり易い……。

「それに……」

「は？ 何でしょう？」

「それが刑事さんの言う通りだったとしても、もう15年も前の事じゃないですか、何で今更なんですか？ 例えその時本当に僕が大垣さんに対して酷い憎しみを抱いていたとしてもですよ、何で15年も経った今になって恨みを晴らす様なことをしなければならないんですか」

「そうなんです……実はそれなんですけどね、そこが私にも一番ひっかかっているところなんですよ」

「だから、僕は何もしていませんって」

進のそんな訴えは無視された。

「実は大垣氏の事故のあった翌日に、マンションの近隣に住んでいる人たちから聞き込みを行ったんですが、その中で一人だけ不審な人物を見たと言う目撃証言を得た方がおりましてね、その方が目撃したのは事故のあった日の夜12時過ぎで、その方が友人宅から帰宅した時のことだったと言うんですが。私は今回栃木へ帰った時に、貴方の写真を持参してその方に見て貰いに行っただけですよ」

「えっ、僕の写真をですか」

「はい」

進は所田が何処から自分の写真を手に入れていたのか、検討もつかなかった。

「それでその方の言うにはですね、あの夜目撃したと言う不審な人物は貴方に間違いはないと言うんですよ、その人はその写真を一目見て迷わずそうおっしゃったんですよ」

「それは一体……どれですか？ 僕のどの写真を見せたって言うんですか」

バサッと数枚の写真が進の前に投げ出された。それは望遠レンズで撮影された朝の出勤して来る背広姿の進の顔である。

「こんな……」

こんなことまで警察はするのか……絶句して進は所田の顔を睨み付けた。この時初めて進は所田に対して明確な憎しみを抱いた。

「この写真を見てその人は即答しましたよ、この人に間違いありませんって」

「そんな勘違いに決まってるじゃないですか、僕のアリバイが正しいことだって貴方は会社まで来てしっかり確認してたじゃないですか」

「それなんですけどね、確かに貴方は大垣さんの事故のあった日の夜10時30分頃まで、課長の島さんと御茶ノ水にある行きつけのバーで一緒だったと言うことは確認出来ているんです。でも大垣さんが転落したのはそれから1時間50分も後の深夜0時20分頃なんですよ。東京駅から最終10時44分の新幹線に乗ることが出来れば、宇都宮へは11時39分に到着します、そこからタクシーを飛ばせば0時20分の犯行時刻までに大垣さんの自宅へ行くことは可能だと思われるんですよ」

「そんな、僕が自宅に帰ったことは妻に聞いて貰えば確認出来るじゃないですか」

「恐縮ですが高本さん。こういう場合はご家族の方の証言は証拠としては認められないんですよ」

「そんな……」

「ちょうど大垣さんの転落事故が起きる前頃に貴方を目撃したと言う方はこう言ってます。その人は知人宅から自転車で帰って来たところだったらしいのですが、家の前まで近付いて来た時に真正面からこちらに向かって歩いて来る男がおり、このままだとぶつかると思ったのだが相手には全く避ける意志がなさそうだったので、自分が避けてすれ違ったのだが。その時に見た男の顔は何だか妙に青白く光っている様な感じで、表情も虚ろで、まるで前など見えていない様な感じだった。だが、その人物は顔も髪型もこの写真の男にそっくりでしたと」

「そんなことある訳が無いじゃありませんか、それじゃ村麦さんの事故の場合はどうなんですか？ 事故が起きた時間に僕は籠原医院の院長さんと後輩の塩中と一緒に池袋にいたってことは確認出来るんでしょ」

「ええ、そっちの方はまあ立派にアリバイが成立しているんですがね、今のところは」

「今のところはって何ですか」

「いえね、私は正直言って必ずしも犯行時刻に貴方が現場にいたとは考えていないんですよ、例えば催眠術をかけて、その時間になると脈絡もなく自ら死んでしまう様に仕向けるとか、あるキーワードを潜在意識の中に記憶させておいて、その言葉を聞くと自ら命を断ってしまう様に仕向けておくとかね」

「そんなSF映画みたいな話がある訳ないじゃありませんか」

「いや、それは後催眠暗示と言ってね、調べてみたんですがそう言うことも理論的には可能だし、実際それに近いことが出来たと言う実験結果も発表されているんですよ。だから可能性はあると私は考えています」

「そんな……僕にそんなことが出来る訳ないじゃありませんか。貴方はどうしても僕を殺人犯にしたいんですか。そんなに僕のことを陥れたいんですか、こんなことまでして貴方は自分の功績が欲しいんですか！」

所田には自分に向けて必死に抗議するこの進の表情も、全く澁みが無く真実だと思ってしまうのだった。

もし本当に高本が犯行を犯しているのだとすれば、高本進と言う男は確信的な精神分裂病なのか、もしそうでないとすれば……もしコレが全て演技なのだとすれば……悪魔……所田は背筋がゾットするのを感じた。

また奥深い迷宮が所田の前に入り口を広げている様な思いがした。

「それでは貴方は飽くまでこの事件に自分は関係ないとおっしゃるんですね」

「当たり前じゃないですか。だからそもそも、これは事件なんかじゃないんですよ」

「それじゃ、コレはどうですか」

と言って所田は一枚の指紋サンプルを進の前に提示する。

「コレはこのライターから採取した貴方の指紋サンプルです」

とポケットから出したジッポのライターを進の前に置く。

「コレは……」

一層の憎しみを込めて進は所田を睨みつける。

だが所田は全く動じる様子も無く、進の表情だけをじっと分析するようにつめてている。

「そしてこれ」

と言って二枚目のサンプルを提示する。

「コレは大垣さんが転落する前に酒を飲んで居た居間のドアノブから、たったひとつだけ検出された大垣さんのご家族以外の指紋です」

それがどうした？ と言わんばかりに進は手に取って二つを比べて見る。

「そして最後に、コレは村麦さんが乗っていた車のハンドルに付いていた村麦さん以外の者の指紋です」

「えっ」

三枚の指紋を比べて見ると、確かに似た様な模様を描いている様である。思わず進は自分の指

を目に近付けて見る。

「うちの鑑識官に分析させたところ、この三つの指紋は同一人物の物に間違い無いとの見解を得ました」

「そんな！ そんなバカな！ 僕は栃木県の大垣さんの家になんて行ったことありませんよ、村妻さんのジャガーにだって乗せて貰ったことなんか一度も無いし」

「ではコレをどう説明するんですか」

「そんなこと分かりませんよ、汚い！ 卑怯じゃないですか、こんなことまでして容疑者をでっち上げて逮捕してるんですか日本の警察ってところは！」

進の余りの剣幕に記録を取っていた警官が立ち上がる。それを所田が「まあまあ」と押し止めて座らせ、進にも落ち着く様に促す。

所田は脚を使ってあちこち聞き込みに戻る捜査では、もうこれ以上の進展を期待することは出来ないと思っていた。

なのでもう後は本人へのアプローチから切り崩して行くより他に無いと思っていたのだ。

だが、ここへ来て長年培った所田の勤は、この男は本当にやっていないのではないか、と言っている。

やっぱりこの二つの事故は単なる事故であって、それに無理矢理事件性を見出そうとしたあまりに自分は高本進犯人説を捏造しようとしてしまっているのだろうか。

しかしこの三枚の指紋サンプルにインチキは無い。それだけは歴然とした事実だ。

所田の長年の刑事生活はあと3ヶ月で終わる。最後に来て誰もが何の関連もない単なる事故だと思っていた二つの事件を、連続殺人事件として解決し、世間をアッと言わせて刑事生活の最後を飾ってやりたかった。

何よりもあの生意気な川下刑事課長の鼻を明かしてやりたかった。そんな思いで突っ走って来てしまった。

それが間違いだったのか。疲れ果て、もはや絶望している様な高本進を見ていると、所田も精根尽き果てたと言う感じで椅子に深く座り直す。

タバコに火をつけて溜め息をつく様にして煙を吐く。

「一体どうやってやったんだよ？」

もう頼むから、教えてくれよ……とでも懇願する様な情けない口調で所田は言う。

「だから、僕がそんなことする訳が無いじゃありませんか、そんなことをしたら僕の人生はどのようなんですか？ 家で待っている家族の生活もムチャクチャになるじゃないですか、そりゃ僕の人生なんてささやかで取るに足りない物かもしれませんが、だけど、僕はそれを必死になって守って来たんですよ」

最後の部分はもう泣き声になっている。所田は思う。もうやめにしようと、本当のところはまだ分からないにしても、こんな風に必死になって訴える高本の顔を見ていると、所田としてももうコレ以上は無理だと言う確信を得てしまうのであった。

5

所田の執拗な取調べは午前中から延々と続き、夕方の4時になってやっと終わった。

進は酷く消耗してしまっただが、これでやっと解放されたのだと思い、ヤレヤレと言う気持ちだった。

やっと普通の生活に戻れるんだ。刑事に殺人犯として疑われるなんてことが、僕の平凡な人生の中で起こるとは思ってもみなかった。でも良いんだ。もうこれで本当に終わったんだから。これで……。

所田は正直性根尽き果てたと言う感じだった。もうやめよう。もうこれ以上は無理だ……と思った。

二つの事故現場に残された指紋。目撃者の証言。犯人として考えられる動機。これだけの状況証拠が出揃っていても、所田を憎む川下刑事課長は高本進に対する逮捕状の請求を許可しなかった。

今となってはその判断は間違っていないかと言う気さえする。

それに加えて長年の所田の刑事生活の中で培われた職業人としての勤がこう言っている。

『高本進は人殺しはしていない』

もうやめよう。刑事生活最後の事件として、世間がアッと驚く様な事件の解決を見せて、華々しく咲かせてやりたかったが、もうその夢は潰えた。

所田は協力してくれた調布署の担当官たちに丁寧に礼を述べ、調布警察署を後にした。

国領駅から京王線に乗って新宿へ出る。そこからJRの埼京線で大宮へ出て新幹線に乗るつもりである。

乗り換えの為に夕暮れの帰宅時間で混雑する新宿駅を歩いている時、ふと後ろから視線を感じた様な気がして所田は振り返った。

見ると行き交う人々の向こうにぼつんと立ってこちらを見ている高本進がいた。青白い顔をして、不自然な程に無表情だが、目だけがギョロリと黒い。

どうしたんだ？ あの人は一体……と思い、歩み寄ろうとした時、また幾人かの通行人が過ぎて視界を遮ったかと思うと、それっきり姿を見失ってしまった。

おかしいな、気のせいだろうか……等と思いつつ、その時の高本の顔が妙に恨みがましく、自分を睨みつけていた様な気がしたのだった。

今日の取調べのことを、怒ってるのかな……そりゃあ自分がやってもいない殺人の容疑を掛けられて、朝からこんな時間まで延々と付き合わされたのでは誰だって頭にきてしまうだろう。

思えば悪いことをしたな……。

と思い、暫らくキョロキョロしながら探してみたのだが、この雑踏の中で、もう見つけることは不可能だと思い、諦めて埼京線のホームへと急いだ。

大宮から新幹線に乗り換えて、宇都宮からは私鉄とバスを乗り継いで、所田は久方ぶりの自宅へと向った。

やっとアパートに帰って来た。カンカンと音を鳴らして古びた鉄の階段を登る。

所田は一人暮らしだった。今までに結婚する機会が無かった訳ではないが、どうも自分には結婚生活は向かないと思い、刑事と言う職業だけを天職と思い頑張ってきたのだ。

等と言えば聞こえは良いが、正直所田には女性に対するコンプレックスの様な物が昔からある。自分は女に持てない、かと言って人並み以下の女に媚びてまで結婚することは出来ない……等とあれこれ考えてみても、要は甲斐性無しと言う一言で片付けられるに過ぎないのだ。

高卒で県警の採用試験に合格した所田はコツコツと実績を重ねて10年後にやっと巡査部長になった。

それ以上の出世を望むには現場を離れて昇進の為の勉強に没頭する必要があったが、それよりも所田は直に犯罪者と立ち向かう刑事と言う生き方を選んだ。

出世の為に制服警官の職に甘んじて試験勉強ばかりしている同僚たちを尻目に、所田は刑事を自分の天職として現場を駆けずり回って来た。

そして結局自分は定年まで巡査部長の階級で終わった。

そのことに後悔は無い、後悔は無いのだが……あのキャリアの若造は大卒で赴任して来いきなり警部補の役職になった。

俺が一生かかってもなれなかった警部補……まあいいさ、所田には階級なんぞに未練がある訳ではない。

階段を登り切り、自分の部屋の前まで来ると郵便受けに入りきれなくなった新聞が下に落ちて散乱している。

この部屋に帰って来るのは10日ぶりくらいになるだろうか。

新聞を拾い集めて、ガチャガチャと鍵を開けて部屋へ入る。

久方ぶりの殺風景な6畳一間の和室。空気がヒンヤリとしている。

衣類や雑誌等が適当に散らかっている様子は10日程前に部屋を出た時と寸分変わっていないのだろう。

そう、俺以外にこの部屋を出入りする者等はいないのだから。

今となっては身寄りもない、これから定年を迎えてその後はどうなるものか、考えてみても仕方が無いことだと思っている。

風呂を沸かして入ろうと思ったが、所田にはどうも先程の新宿駅で見かけた高本進の姿が気になってしょうがなかった。

雑踏の向こうで、ポツンと立って所田のことをじっと見ていた高本進……。

彼にしてみれば、あらぬ疑いを掛けられて、長時間の取調べにまで付き合わされて、酷く腹を立てているのだろうか。まあそれも無理もないことだ……。

思い立って所田は時間的に遅いかとも思ったが、まだ起きているであろうと言う推測で高本の自宅に電話を入れて今までの無礼を詫びようと思った。

ボロボロに使い古した手帳を開き、そこにメモしてある高本の自宅の電話番号をダイヤルする。

4～5回の呼び出し音の後、高本の妻らしい女性の声が響いた。

「はい、もしもし、高本でございます」

お目にかかったことは無いが、その声に所田は勝手に何故か清楚で都会的なセンスのある女を思い浮かべる。

「あのう、夜分にすみません。私お仕事で御主人のお世話になった所田と言う者なんですが、御主人様にひとことお世話になったお礼を述べたいと思ひまして、電話では失礼かとも思ったのですが、御主人はまだ起きていらっしゃいますでしょうか？」

「あ、はい、どうもわざわざご丁寧にありがとうございます。ちょっとまって下さいね……進さん！」

受話器を置いて高本を呼んでいるらしい妻の音が響く。

暫らくしてようやく電話に出た高本の口調は露骨に嫌そうな反応である。

「一体何なんですか？ もう僕には関わらないって今日言ったじゃないですか」

「いえ、あの、はい、それはその通りです。私は貴方に今までの非礼をお詫びしたいと思ひまして。最後に電話を差上げた次第なんです」

「えっ？」

驚いた様子で進は素っ頓狂な声を上げた。

「本当に、多大な御迷惑をおかけ致しまして、申し訳ありませんでした」

「いえ……そんな、良いんですよ、だって、刑事さんだって、お仕事でなさってたんでしょから」

所田の真意を聞いた高本進は途端に軟化して所田の労を労ってくれる。

「はあ、そうご理解して頂けると、ありがたいんですが、でも本当に、御迷惑をおかけしました……」

何て物分りが良くて優しい男なんだ。自分は全くの無実だと言うのに、俺と言う人間に疑われてしまったばかりにあれだけの理不尽な目に遭わされて、それでもこちらの詫びの一言で全てを許すと言うのか。嫌それだけでなくこちらの労をも労う言葉をかけてくれると言うのか……。

「本当に、申し訳ありませんでした」

何て良く出来た男なのかとしきりに感心しながら、所田はまるで相手がそこにいるかの様に受話器を握り締めたまま何度も宙に頭を下げて、謝りの言葉を繋いだのだった。

だが実は進の方ではまだしつこく電話して来る所田に対して、何事なのかと腹を立てていた。相手が詫びを入れている以上はこちらとしてもそれに応ずる応えをしなければならないと思ひ、心ならずも所田の労を労う様な言葉を口にしていたのであった。

定年間近になって、自分をバカにしている若い奴等の鼻を明かしてやりたかったのだと言う所田……その気持ちは分からないではないけれど、冗談ではない、そんなことに何日も付き合わされる方の身にもなって欲しい。と進は思う。

しかしここでそんなことを言い返してみても、却って逆効果になると思ひ、もう本当にこれでこの刑事とはオサラバ出来るのだから、と言う思ひで労いの言葉を並べたのだった。

しかし受話器を置いた進は腹の中で密かにこう呟いている自分を自覚している。

『本当に煩い刑事だった。あんなヤツ早く定年していなくなっちゃえば良いんだ……』

所田は10日振りに自宅の風呂を沸かして入っている。

シャンプーをかけて髪をゴシゴシと洗った。頭を洗うのも10日ぶりくらいのことで、髪の毛が引っ掛かって指がなかなか通らない。

一度洗い流し、もう一度シャンプーをかけ直してジャブジャブと洗う。

そして二回目のシャンプーを洗い流そうと手探りでシャワーの口を開き、勢い良く湯をかけて泡を洗い流す。

その時だった。一人で入って身体を洗うのもやっとと言う狭さの浴室の隅に……しゃがみ込んで髪を流している所田の後に誰かが立っている……。

まず見えたのは黒い影だった。それは背広のズボンらしい。振り向き様にギョッとして見上げると、そこには背広姿の高本進がギョロリと黒い目で所田を見下ろしている。

「わあああああー」

その瞬間所田には全てが分かった。今自分の目に見えているコレは人間ではない、犯人はコレだったのだ。

コレが殺人を犯していたのだ。姿形は紛れも無く高本進であるけれども、決して高本進ではないコレが……寸分狂いもなく高本進であることに間違いないけれども、この薄気味の悪い青白い顔、黒いビー球の様な瞳は決して人間の物ではない。

ソレは後から所田の首を両手で驚づかみにしたかと思うと凄い力でスーッと持ち上げ、そのまま有無も言わず凄く勢いで浴槽の中に落とし込んだ。

バシャーン！

所田はゴボゴボと自分の口から鼻から気泡が顔面を上へ沸き上がって行くのを感じながら、頭の中は驚きに満ちていた。

こんなことが！

そして思った。俺も今あの大垣彰や村麦実と同じ顔をしているのだなと。あの驚愕に慄き叫び続けている様な、見る者を戦慄させる様なあの顔をして、今自分も死ぬのだなと

ここにいるはずがない者なのに……その確かな両腕の感触で首を締め付けられながら、所田はなす術も無い。

こんなにも自分の中に空気があったのかと思うくらい、口から鼻からゴボゴボと気泡が顔を伝って上がって行く。やがて意識が遠のいて行く。

第四章

1

その時進は夢を見ていた。それは誰かの首を締めて水の中に無理矢理沈めている夢だった。近頃は徐々にだが自分が眠っている間に見ていた夢のイメージを思い出せるようになって来ている。

そうだ……僕は人の首を締めて湯船に沈めていた……男の人だ、おじさんの様な……あの後頭、僕の手を放そうと必死になってもがいて……そうだ。あれはあの刑事だった。間違いない。あの所田刑事を無理矢理お風呂に沈めてしまう夢だった。

あの刑事には酷い目に遭わされたから、きっとこんな夢を見たんだ。

リアルな夢で、両手で締めていた所田の首の感触と、進の手をどうにかして解こうと手を後に回してもがいている所田の後頭や頭髪の感じが生生しく思い出される。

所田が暴れるので湯船から湯気がもうもうと立ち上り、その湿気た空気感までが実感として残っている様な感じだ。

進の容貌は尚一層老け込んで見え、目は落ち窪み頬はやつれ、まるで重病人の様な面持ちになっている。

栃木県警真岡署の刑事、所田義晴が自宅アパートの風呂場にて溺死したと言う出来事は、翌日地元地方紙には写真入りで大きく報じられたが、全国紙には三面記事の小さな欄にそっと記載されたに過ぎなかった。

「ねえ高本さん。コレってこないだ高本さんのこと調べに来てた刑事さんのことじゃないですか？」

と後輩社員の塩中が新聞を持って進のデスクへ見せに来る。

塩中も進のアリバイについて所田から聞き取りを受けていたので覚えていたのだ。

記事には昨夜未明、所田が自宅アパートの風呂場にて、浴槽に頭を突っ込む様な形で死んでいるのが見つかったとある。

発見された時には入り口のドアや窓は全て施錠されており、他者が入った形跡はなく、警察では事故か自殺の可能性もあると見て、調査しているとのことであった。

！？

進にはこの時初めて全てのことが分かった。

大垣彰と村麦実の事故に対する所田刑事の推理は間違っってなどいなかったのだ……。 所田刑事を殺したのは僕だ……。

そして、栃木の大垣さんを殺したのも、昭和台病院の村麦さんを殺したのも僕だ。ただ、僕が知らなかっただけだ……。

進の脳裏に、もうひとりの進の記憶が自分の記憶として甦って来る。

あの時……夜中ひとりでウィスキーを飲んでいた大垣彰先輩……そうだ、そうだった。進の脳裏に自分の記憶としてハッキリと思い出すことができる。

居間のソファで、見るとはなしに点いていたテレビを眺めながらくつろいでいた大垣さん。

そこへ何の前触れもなく居間のドアが開けられ、青白い顔に真っ黒な目をした男が無言で入って来たのだ。

大垣さんは僕の顔などすっかり忘れていたに違いない、いきなり見知らぬ奇怪な男がドカドカと入り込んで来たのだ。

その時の仰天振りは何程の物だったろうか、もうひとりの僕はそのまま大垣さんの襟首をつかんでねじ上げる様にしてソファから立たせ、そのまま引き摺る様にして運び、窓を開けてベランダに出し、そしてそこから……驚愕の悲鳴を上げる大垣さんを、有無も言わず欄干の外へ放り投げた……。

村麦さんの時は、空いている夜の東名高速を愛車のジャガーをひとり快調に飛ばしていたところに。僕は空から舞い降りて村麦さんの車を捉え、スウッと車の中に忍び込んだ。

村麦さんの横に、誰もいるはずのない助手席に突然青白い顔をした僕が座っていたんだ。

その時の、今にも目玉が飛び出してしまいそうな村麦さんの表情もありありと思い出すことができる。

「どうしたんだお前！ 一体どうなってるんだ！」

叫び声を上げる村麦さんの方へ身体を乗り出して、やめろと言う村麦さんを無視して僕はハンドルをつかんでグルグル回した……車はスピンして横滑りを起こし、前方が側壁にぶつかった衝撃ででんぐり返った。そして凄まじい衝撃が、村麦さんの絶叫と共に……。

身体がブルブルと震え出した。風邪を引いている訳でも寒さを感じている訳でもない、なのにガクガクと視界が揺れて上手く喋れないくらいに進の身体全体が激しく振動している。

「大丈夫ですか高本さん？ どうしたんですか」

尋常でない進の様子を見て、塩中が心配そうに言う。

「う、うん。だ、大丈夫だから……」

慌てた様にトイレへ駆け込んで行く進の様子を、塩中は不審そうに見送る。

何が起こったのか！ 僕は一体どうしてしまったと言うのか、一体僕にどうしろと言うのか！

トイレの個室に入った進は激しく身体をのたうたせながら、ベンキへ向けて何度も嘔吐を繰り返す。

しかしまさかそんなことが！ そんなことがある訳は無いと必死に自分に言い聞かせている。

そうだ。そんなこと誰が聞いたってあり得る訳無いじゃないか、偶然だ。偶然に決まってる。たまたま僕の見た悪夢や、無意識のうちにしてしまった空想と、現実が重なってるだけだ。恐ろしい偶然が重なってしまった為に、僕はあらゆる想像力を働かせてしまっているんだ。

しかし、一方ではそんなことでは説明のつかない事実であることを、進自身の思考が、記憶が、確信している。もう逃れようが無いのではないか……。

ひとしきり嘔吐を繰り返し、もう出て来る物も無くなって咳込んでいると、進はふと背後の、トイレブースのドアの上から誰かが自分を覗き見ている様な気がして後を見上げた。

ドアの上をサッと黒い影が飛び退いた様な気がしたが、錯覚だったのかもしれない。

2

疲れているんだ。毎日の仕事と、あんな変人刑事の強引な取調べに付き合わされた為に。そうさ、精神的に参っていたんだ。ただそれだけのことだ。僕の生活の何が変わったって言うんだ。何も変わっちゃいないじゃないか。

もう僕を本気で殺人犯だと思ふ奴なんて誰一人いないんだ。そうさ、僕には関係ない、全ては何の関係も無いことだ。僕はどうかしてたんだ。こんなことにいつまでもかかずにいる暇は無いじゃないか。早く正気を取り戻さなきゃ……。

そもそも今僕はそれどころじゃないのだから、今日こそは昭和台病院の新しい医局長、滝川さんに取り入って、新しく参入して来ようとしている他メーカーと、僕とで提示する商品の価格設定の比較で注文先を決めて貰えるように、承知して貰わなくちゃならないんだ。

先任の村麦さんの子分だったからって、それだけで有無も言わず契約を打ち切るだなんて、そんな無茶なことをされて溜まるもんか。

購入する備品について、僕と他社メーカーとの間で見積もり値段を出し合って、価格競争をさせて貰えれば、僕の方は今までの取り引きの実績からみて、会社の方でも絶対に負けない程の低い値段を出して勝負させてくれるに違いないんだ。

今日こそは滝川さんに何としてもそのことを了承して貰わなければ……。

と気合を入れて会社を出ると、進は一路昭和台病院へと向う。

いつもの様に受付けで来訪の旨を告げ、エレベーターに乗って4階の医局長室を訪問する。

ノックをして中に入ると、滝川は他社メーカーの営業マンと商談している最中だった。

「医局長、お忙しいところお邪魔してしまってすみません……」

進は滝川の大きなプレジデントデスクに歩み寄ると、その前に立っている他社メーカーの営業マンにも軽く会釈をし、滝川に向き直った。

「お願いします。是非とも我が社にも、今後のお付き合いを続けて頂けるチャンスを与えて頂きたい、今日もお伺いいたしました……」

と言って深々と頭を下げる。

「うん……」

と滝川は唸る様に言って、そこに控えている他社の営業マンの方へ目を向けて言う。

「どうかね、こちらは今後の契約について、その都度こちらの注文する製品について価格の見積もりを提出させて欲しいと言って来てるんだが」

少し戸惑った様な顔をして他社の営業マンは答える。

「はぁ、それは、滝川様の方でご判断なさるべきことですので、我が社としても、滝川様のご選択に応じて如何様にも対応を取らせて頂きたいと思っておりますが」

「そうか……」

進は驚く。今までは何を言っても取り付く島も無いと言った感じで拒絶されるばかりだった

のに、ここへ来て滝川が始めて軟化の兆しを見せてくれた。

何故なのかは分からなかったが、偶然この他社の営業マンが同席していたお陰で、進にとって良い方へ流れが向いてくれたと言うのか。

とにかく進としては思いがけない嬉しさが込み上げて来る。

その他社の営業マンは重ねて言う。

「我が社としましては、こちらには新しく参入させて貰っている立場ですので、どちらがより好条件で医局長様のご期待に添える事が出来るのか、と言う点で判断して頂くことに依存は御座いません。どうぞ宜しく願いをしたいと存じます」

と言ってその営業マンは進にも頭を下げる。

そう言われると進の方も慌ててその営業マンに居直り、こちらこそお願いしますと言う意味で頭を下げる。

「それでは、私の方は今日はこれで失礼いたしますので、今後とも宜しく願いいいたします」

そう言って男は部屋を出て行く。

滝川とふたりだけになった進は思わず「ありがとうございます」と立ったまま床に頭をつけばばかりに頭を下げて礼を述べる。

ついこの間まではそこに村麦が座っていたプレジデントチェアに踏ん返り返った滝川は、少し困った様な顔をして進を見る。

「うう〜ん、まあ、私としても君の頑張りには少々参ったと言う感じかな、はっははは……」

滝川は何処か力無い様子で笑う。

「はあ、恐縮の至りです」

「君は村麦さんの時にもそこまで屈服して仕えていたのかね」

「は、はあ……」

そう言われるとさすがにちょっと恥かしい気がする。

「だけどねえ君」

「はあ」

「君のそこまでの仕事に対する熱意には感服するけれども、夜中に私の自宅の側まで来てずっと立ってたりするのはやめてくれたまえよ」

ギョッとした……。

「は、はあ、と言いますと？」

「いやね、私はチラッと見ただけだったんだが、うちの女房が怖がってね、夜中中電柱の陰に立ってず〜っとウチの方見てたって言うじゃないか」

「はっ……いっ、いえあの、どうも、とっとんだ失礼をいたいたしまして……申し申し訳、ありませんでした」

「いや、もうそういうのはやめてくれればそれで良いんだ」

心臓が高鳴っていた……。

滝川には今後のことを宜しくお願いしますと念を押して、医局長室を後にする。

3

せっかく危機を脱出して晴れ晴れとした気持ちになれるところなのに……街を歩いていても進はたちまち目眩を起こして倒れてしまいそうになる。

僕は……滝川さんのことも……いや、そんなことはない、僕が一晩中立って見ていたんだなんて、そんなことある訳はない、滝川さんが見たと言うのも、何かの見間違いだ、何かの見間違いだ！。

僕は大口の顧客からの契約解除と言う最大の危機を脱することが出来たんだぞ、喜ばなくちゃ、顎が繋がったんだ。これからも毎日仕事を続けて行くことが出来るんだ。

進は無理矢理その様に結論付けた。そうして悪い想像に引っ張られて浮かび上がって来ようとする恐怖を押さえ込む。

さあ今日は良かったな。そして明日も仕事だ。何ら変わることも無い今までと同じ僕の日常が明日も明後日も続いて行くんだ。

何も心配することなんて無い。それは僕の気持ちの問題だけなのだから……。

慣れない心理カウンセリングなんか受けて、催眠療法なんか受けるから妙な妄想に浸るクセが付いてしまったんだ。

とってはみたものの、進の容姿は前よりも一層目に見えてやつれ果てて来るのだった。

今日等は美由と一緒に風呂に入っていた時に、顔だけでなく枯れ木の様にシワの増えた進の身体を見た美由が思わず「パパー御爺ちゃんみたいだよー」と口走った。

そんな進に対する好江の心配も募り、ついに今度の休みに病院で人間ドックに入り、身体中の精密検査を受けることを約束したのだった。

そして……夜眠っている時には、相変わらずの夢が……進の意思に反して入り込んで来てしまう。

近頃見る夢は決まっていた。そう……あの幼い女の子の首を締めている夢。

それを夢の中の進は得も言われぬ楽しい気持ちでやっている。

進がしっかりと指に包んだ両手の中で、女の子の小さな首は締められて、可愛い顔を苦悶に歪めながらイヤイヤをする様に左右に振る。

「……可愛いね、苦しいかい？ 苦しいんだね、でも苦しそうなその顔が、僕には堪らない快感なんだよ……出来るだけ長引く様に、より酷く苦しむ様に、微かな感覚で首を締め続けてあげようね……ギリギリのところでは死なない様に、こんな苦しみが続くくらいなら一刻も早く死んでしまいたいだろうけど、ギリギリのところでは死なない様に、ほんのちょっとだけ息をさせて……君は何よりも可愛らしい存在なんだから、僕が両手で包んであげようね……」

眠っている進は驚かされてそこから逃れようと、苦悶の表情を浮かべながら顔を左右に振る。

「やめろっ、やめろっ！ うわあああーっ」堪らずに絶叫して目を覚ます。

進の叫び声に驚いた美由が泣き声を挙げ、驚愕した様に好江が進の顔を見つめている。

「進さん……貴方、どうしたの？」

身体がブルブル振るえている。

夢の中で楽しんでいた自分の気持ちが、目を覚ますと自分への嫌悪となって跳ね返って来る。
こればかりは眠りに付いている自分にはどうすることも出来ない。

4

ぼんやりと朝食を取っていると好江が心配そうな顔をして語り掛けて来た。

「ねぇ貴方。昨日はどんな夢を見たの？」

答えられるはずも無い。

「最近毎晩じゃない、美由も怖がってるし」

「ああ、ごめんよ」

「近頃の身体をやつれ方は尋常じゃないわよ、本当に何も自覚症状は無いの？」

「えっ？ ああ、大丈夫だから、何かあれば、今度病院で検査した時に分かるさ……」

進の容貌の衰弱振りは尋常ではない。

「仕事の方が大変なの？」

「えっ、いや、そんなこともないんだけど」

そんな好江と進の様子に、美由も心配そうな顔をしてじっと見つめている。

「大丈夫だから、心配ないから……」

まるで老人の様にやつれ果て、元気のない様子で仕事に出かけて行く進の姿を、好江と美由は心配そうに見送る。

今日は大田区で開業している内科医に顔を出す予定になっている。

会社を出て中央線に乗り、神田から山手線に乗り換えた進は五反田駅で降りた。

駅前の大きな交差点で信号待ちをしていると、ふと車道を行き交う車の向こう側で信号待ちをしている人々の中に、何か気になる気配を感じて、それとはなしに目線を泳がせていた。

広い車道の向こう側まではかなりの距離があり、そこに立つ人たちの顔もハッキリとは判別出来ないのだが、何故か進にはそこに立っているそれだけはハッキリと分かった。

あそこに自分がいる……。

まるでこちら側にいる自分をそっくり鏡で写した様に、そこには同じ鞆を提げ、同じスーツを着た自分が、こちらを向いて立っていた。

顔だけが妙に青白く、まるで夜光塗料を塗った顔が暗闇の中で浮かび上がっている様にぼうっとしている。目が真っ黒で表情は無い。

ギョッとすると同時に脚がガクガクと震え出し、立っているのもままならなくなってしまう。

だが、確かめなければならない、両脚をしっかりと踏みしめて、信号が変わると同時に進は歩き出す。

いた、確かにいたのだ。進は自分を見た場所を目指して、先を急ぐ群衆の中を急ぎ足で向う。だが、その男を見つけることは出来ない。

やっぱり見間違いだったのか……でも確かにここに……辺りをキョロキョロしながら今来た反対側の歩道を振り返ると、いつの間にすれ違ったのか、車道の向こう側に立ったそいつがじっと進を見ている。

「あっ」

そいつは無表情に軽く片手を上げたかと思うと、そのまま踵を返して歩き去って行ってしま

。慌てて追いかけてみようとしたが、既に信号が変り、双方から凄い勢いで車が走りだしてしまい、とても渡ることは出来なくなってしまった。

脚の力が抜け、激しい目眩に襲われた進はその場に身を伏せてしまう。

いた。確かにいた。そいつは青白い顔をして、マジックで書いた様な輪郭と、黒々とした目鼻のついた、マンガの様な顔をしていたけれど、あの顔は確かに僕だった……。

あいつが夢の中の僕なんだ。大垣さんを殺したのも、村麦さんを殺したのも、所田刑事を殺したのも、あいつだ。そしてそれは、僕なんだ……。

そして今度は、あの女の子を殺そうとしている。夢の中に現れる、僕に首を締められて苦しんでいるあの子。僕が、僕の意味で……あの女の子……僕は知らない、あの子は一体誰だって言うんだ。

進にはその女の子に対して「もしかしたら……」と薄々思い当たるところがあった。それを思うと身体中に寒気が走り、とてつもない恐怖で縛り付けられる思いだった。

それでもまだ、進は仕事を放り出す訳には行かない。

仕事だ、仕事をしなければ……生きて行けないんだから、例えどんな状況にしろ、頭の中がそれどころじゃなかりと。僕の人生に一番大切なことじゃないか、さあ仕事をしなければ、好江や美由の為にも。

僕を苦しめ苛んでいるのは現実のことじゃない、いや少なくとも現実には説明のつかないことなんだ。

僕が住んでいるのはあくまでも現実の社会の中なのだから。そうだ、僕は責任を果たさなければならぬ。

この期に及んでもまだ進は認めたくなかった。自分以外の自分の存在だなんて、ある訳が無い。無いんだ……。

と必死の思いで立ち上がり、自分を叱咤して仕事に向う気持ちを取り戻した。そして訪問先の内科医へと向った。

そしてまた夜が来る……。

「今日はぐっすり眠れると良いわね」

心配そうに進の顔を見ながら、いつになく優しい好江は進の身体にそっと毛布を掛けてくれた

。

そして電気を消して、進を労わる様に肩を抱きながら横に入って来た。

近頃あまり感じたことの無かった好江の体温が進の身体を包む。ああ……何やら懐かしい臭いだ……。

「好江……」と母親に甘える子供の様に進は福よかな好江の胸元に顔を押し付けて、ギュッと目を瞑った。

そんな進をいとおしむ様に好江は両手で包み込んだ。

そんな好江と進の願いも虚しく、眠りに落ちた進には、今夜もまた同じことをしている自分の視界が見えて来てしまう……。

幼女に馬乗りになって首を締めている自分……。

そんな夢の中の自分に対して、進は必死になって抵抗を始めた。近頃は毎晩見ているこの夢の中で、徐々にだが現実の進本人の意思が入り込める様になって来ていた。

「やめろ！ やめろ！ よせ！ 僕は、僕がこんなことをする訳がない……こんなことをして楽しいだなんて、思うはずない……やめろ、やめるんだー……」

幼女の首を締めている自分の両腕を必死になって外そうともがいた。だが小さな首をしっかりとつかんでいる腕はビクともしない。

可哀相に女の子はギュッと両目を瞑って歯を食い縛り、イヤイヤをする様に顔を左右に振り続ける。

進は、身体を左右に振って反動を付け、幼女の身体から自分の身体を振り解こうと揺すった。すると、徐々にだが自分の肩が二重になってブレて行く様な気がして来た。

左右に揺することで二重写しの様に身体全体がブレて分離し始めたのだ。幼女の首を締めている自分と、自分の身体から離れようとしている自分。

進は思い切り力を込めて自分の身体を揺さぶった。そのうちにブレが段々激しくなり、ついには進の身体はまるで魂が身体から抜け出る様に、蛇が脱皮するかの様に本体からスッポリと分かれて行くではないか。

幼女の首を締めている自分の身体から抜け出ることが出来た進は、そのまま宙に浮いて離れ、首を締めているもうひとりの自分の姿を見た。

それは、やっぱりあの男だった。もうひとりの自分……青白い顔をして、真っ黒な目をして……無抵抗な幼女の首を締めている。

幼女はベッドに仰向けに寝ており、その男は上から押し掛かる様にして馬乗りになっている。そして、幼女のベッドの脇にいてその男の姿を見ることが出来ず、幼女の苦しむ原因が分からずに必死になって看病している母親は葵ちゃんだった。

葵ちゃん！……ああ、やっぱり、そうだったのか、あれから15年も経って、葵ちゃんも34歳になっているはずだけど、見間違える訳もない、紛れもなくこのお母さんは葵ちゃんだ！。

進は必死になって、葵ちゃんの娘の首を締めている自分の分身を振り解こうとするのだが、締めている腕をつかもうとしても、身体全体で体当たりしようとしても、抵抗無く身体がすり抜けてしまい、どうすることも出来ない。

「あなたっ、あなた！　しっかりしてよ」

そのうちにヒステリックな声を上げて進の身体を揺り動かす好江に起こされてしまった。

目を覚ました進は、全身にびっしょりと汗をかいている。

進は期せずして激しい嗚咽を漏らし、滂沱の涙をほとぼしらせて泣き始めてしまう。

驚いて目を覚ました美由も恐怖に慄いた目で進を見つめている。

僕が葵ちゃんを苦しめている……。あんなに大好きだったのに、誰よりも幸せを願っていたはずなのに、どうして僕は、こんなことするんだ！。

余りのことに驚愕の表情を浮かべながら、好江は泣いている進の顔を茫然と見つめている。

「進さん……どこか、精神科の病院に行って、見て貰った方が良いんじゃないかしら……」

「うん……」

こんなにも心配している好江と美由に、もう全てを打ち明けるしか無いんじゃないだろうか、だけど……。

もし真実をありのままに説明したとしても。到底事実として受け入れられる内容の物ではない。もし打ち明ければそれこそ何処か精神に異常が発生しているということになってしまう。

専門の医師に見て貰ったりすれば、精神異常と言う診断を下されてしまうに決まっている。

もしそうなれば、それこそ普通の家族生活を営んで行くことは無理だということになり、家族を失うことにもなりかねないではないか。

でも、それじゃあ僕はどうしたら良いのだろう……。

6

昨夜の夢で判明した事実の為に強烈なショックを受けてしまい、進はもう仕事も何も手に付かなくなってしまった。

いつも通り会社へは出て来たが、営業の行き先も決めないままに当ても無くフラフラと会社を出る。

一体どうすれば良いんだろう……僕は葵ちゃんの娘を苦しめている……。

しかも、ひと思いに殺すのではなく、ジワジワと苦しめて……どうして？ 何でそんな卑怯な真似をするんだ！？。

こんなことは許せない、どうしたら助けることができるのか。どうしたらアイツをこの世から消すことができるのだろうか……。

そして考えあぐね、苦しみ抜いた末に進の思いついた結論は、自分が死ぬば……とすることだった。

アレは僕の分身なのだから、僕が死ねば、アイツも消えて無くなるに違いない。そうだ、きっとそうに違いない。

だけど、今僕が死んでしまえば、残された好江と美由はどうなる？ 生命保険には貯蓄型も含めて二つ入ってる。二つとも加入したのが10年くらい前だから、死因が自殺だとしても保険金は降りるだろう。でもそれで二人が一生生活に困らないだけの金額になるのだろうか。それはちゃんと確かめておかなければならない。

もしそれが二人の今後の生活に十分な金額になってさえいれば……後はきっと、問題無いんだ。

そう思った進は踵を返してオフィスへと戻り、加入している二つの生命保険会社の担当者へと電話を入れて、自分が加入している保険の契約状況についてそれとなく説明を受ける。

そして、今進が死亡した場合に好江が受け取ることの出来る保険金を計算する。

これだけあれば……好江はきっと今のパートも続けて行くだろうし、マンションは売らなければならないとしても、しっかり者の好江のことだから、美由が成人するまではきっとやって行けるはずだ。

熱中して計算している進の姿を、オフィスに残っている倉橋俊子が好奇な目でじっと見つめていたが、進は気にすることなく計算したメモを見つめている。

そのメモ用紙をワイシャツの胸ポケットに入れて、進は鞆も持たずにオフィスを出ようと椅子を立つ。

その様子を見て奇異に思った俊子が「ちょっと、高本君……」と声を掛けてきたが、振り返りもせずに進はエレベーターに乗って行ってしまふ。

進は夢遊病者の様にフラフラと外を歩き、御茶ノ水駅の前を通り越していた。

気が付くとJR線の線路と平行して流れる神田川をまたぐ聖橋に差し掛かっている。その橋を

渡り、そのまま歩いて行く。

そこには大きな東京医科歯科大学の校舎があり、その向かいに広がる森の中に、湯島聖堂と呼ばれる中国の仏閣を思わせる巨大な建造物があった。フラフラと進はその敷地の中へ足を踏み入れる。

湯島聖堂は何百年も前に儒教の教えを広める為に五代将軍綱吉が建てたと言われる。古い中国の神社の様な建物で、広い敷地の中は厳かで都心とは思えない静寂に包まれている。

心を落ち着けるには良い場所である。進は以前からひとりで何か考え事がある時などに良く訪れていた。

まるで心ここにあらずと言った風情で進は人気のない森の道を歩く。

.....好江はあれだけのしっかり者だし、僕が死んだら保険金を受け取って、きっと立派に美由を育て上げてくれるだろう。それにきっと、押し掛け女房の様に僕の妻に納まってしまった様に、僕がいなくなっても新しく自分の糧になってくれる男をつかまえて、第二の人生を謳歌してくれるに違いない.....。

そう思った時、ふいに涙がこみ上げて来た。それは悔し涙だった。コレが、こんなことが、今まで僕の生きて来た人生の終着点だと言うのか.....僕が.....僕が何故.....。

静寂に包まれた森の中で、そんなことを思って進は声を押し殺し泣いた。

ひとしきり泣いた後、一方ではこんな考えも浮かんで来る。

コレは現実には誰にも想像出来ない事なのだから.....例えこの先あの僕の分身が何人の人間を殺そうとも、誰にも僕の犯行だなんて立証することは出来ない。

それにも、またあいつの犯した殺人を僕が犯人じゃないかと疑って警察が捜査をしようものなら、所田刑事みたいにまたあの分身が殺してしまうに違いないんだ.....だから、現実の法律の中では、僕は絶対安全なんだ.....。

だからその為に、僕や僕の家族を犠牲にすることなんて無いじゃないか.....そうさ、僕は何にも悪くないんだから.....何にも悪く無いんだから.....。

だけど、僕はあの葵ちゃんの泣いていた姿を無視出来るのか？ 可哀そうに、アイツの姿を見ることが出来ず、自分の子供が何故こんなにも苦しんでいるのか原因を知ることが出来ずに、あんなに心配そうな顔をして看病してた葵ちゃん.....今何処にいるんだろうか.....あの子の父親はいるんだろうか.....。

僕は誰よりも葵ちゃんの幸せを願っていたのではないのか。あの頃.....思い出だけで胸がキュンとなる数々の葵ちゃんとの場面。一緒にコーヒーを飲んで微笑んでいた葵ちゃん。実習で互いのノートを交換して確認しあっていた真剣な表情の葵ちゃん。一緒にバスで帰った、雨の日のあの葵ちゃん.....。

僕は今、あの葵ちゃんを地獄の苦しみの中に陥れているんだ.....。

ダメだ。やっぱり僕は死んでしまおう。一刻も早く.....それしか無いんだ。

湯島聖堂の森を出た進は、聖橋とは駅を挟んで反対側の御茶ノ水橋へと向った。

駅の改札に向って客待ちのタクシーがズラリと並んでいるのは反対側を通過して御茶ノ水橋を渡り、神田川を過ぎてJR線の線路が何本も平行して通っている上に差し掛かる。

そこに立ち止まって、腰程の高さまである欄干の側に寄り、下を通る線路の列を見下ろしてみる

。遙か真下にそれぞれが複線になった上下線4本の線路が平行に連なっている。

やがてどちらからか電車が走って来るだろう……。この下を電車が通過している最中にここから飛び降りれば、それで良いんだ。

僕の身体がどんな風にぶつかって、どんな風に引っ掛かって、どんな風に電車の車輪に踏まれて……何処が千切れようと、何処まで意識があろうと、もう関係無いんだ。その時ここから飛び降りさえすれば、全ては終わるんだ。全ては……。

……ただ。必死になって守ろうとしていた僕のささやかな幸せ、小さな家庭、好江、美由、ごめんよ、僕は最後までだらし無い男だったね。

カタンカタンと線路を踏む音を響かせて遠くから電車が向って来る。その速度に引き寄せられる様にして進は橋の欄干に手をついて身体を乗上げる。

さあ飛び降りよう、この下を電車が通過し始めたら、ここから飛んで全てが終わるんだ。

やがてゴトンゴトンと大きな音を立てて電車が差し掛かって来る……。

よし……橋の下へ身を投げよう。

進は欄干の上に片足を乗せ、身を乗上げて目を瞑った。そのまま身体を前へ傾げて落ちようとする、その時いきなり後から腕と肩をつかまれて思い切り後へひっくり返された。弾みで進は歩道に激しく倒れこんでしまう。

「やめなさい」

驚いて見ると黒い毛糸のスキー帽を目深に被り、目にはサングラスをして、口もとにはマフラーを巻いた奇異な風貌の大男が、転んだ進を見下ろしている。

驚いて見つめている進に向って男は言葉をかける。

「ちょっと貴方にお話があります。こちらへ来て下さい」

何のことだか分からずにキョトンとしている進の腕を取り、凄い力で立ち上がらせると、そのまま引きずる様にして駅の繁華街の方へ連れて行く。

「良かった、間に合って……」

喫茶店の席に腰を下ろしたその男は、顔につけていた帽子とサングラス、それにマフラーを外してやれやれと言う様に言った。

中から出て来た顔に見覚えがある様な気がして考えていると、どうやら周りに座っている他の客たちからもチラチラとその男に向って視線が集まっている様な気がする。有名人なのかな……と言う考えが過ぎた時、思い出した。

よく見ると右頬の上に縫い付けられた様な大きな傷跡がある。そうだ、その男の顔はテレビで見たことがある。霞里周安と言う霊能者だ。だけど何故、この人がこんなところにいるんだろう？。

「か、霞里さん……ですか？」

驚いて見つめる進に、その男はニッコリと笑顔を見せて頷く。それは紛れも無くテレビで見せている霞里周安の顔だ。それはサングラスやマフラーを取って最初に見せた厳しい顔とは別人の様に柔和な笑顔だった。

「はい、僕ですよ、僕、分からないかな？」

「えっ？」

「確かに私は霞里周安ですけど、その前にも別の名前で貴方は私のこと知ってるでしょう？」

「えっ？」

進には何のことだか分からなかった。

「別の名前で、ホラ、貴方は最近私のこと思い出して会いに来てくれたじゃないですか」

「は？」

ますます分からなくなる。

周安はこれ以上ないと言わんばかりの笑顔を作って相好を崩し、優しい眼差しを向けてニコニコと進を見つめている。

「えっ、そんな、どなたでしたっけ？……」

「思い出してくれないなんて寂しいなあ、それじゃヒントを上げましょう。貴方、小さい頃は九州の大分にいらしたでしょう」

「え、はい、そうですけど」

「小学校は浜永小学校でしたよね」

「はい……」

ニコニコと進に微笑む周安の顔を見ていると、何か脳裏にボンヤリとした物が浮かんで来た。

その面影、大きさも形も年輪を経て大分変わってしまっているけれど、その顔に幼少の次期を思い浮かべてみると……。

「あ……あ……」

「よく思い出して下さい」

「あ、キミ、ショウタ……ショウタなのかい？」

うんうん！ と嬉しそうに周安は顔を揺らして頷くと進の手を取って握り締めた。

「そうじゃあ、シンちゃん、懐かしいのう」

にわかには信じられなかった。だが良く見るとその顔には、あのショウタの面影をハッキリと確認することが出来た。

貧乏で、いつも皆に苛められていたショウタ……あのショウタが……。

周安をテレビで見っていた時は名前も変わっていたし、風貌も同い年とは思えない程に貫禄があって見えたので、周安は進より少なくとも10歳くらいは年上だと思っていた。

それに、当時には無かった酷い傷跡が右頬の上にある。

まさかテレビで何気なく見ていた霞里周安が、あの苛められっ子のショウタだったなんて。仰天してしまった。

「で、でもどうしてここに？ それに、さっきは、どうして僕のことを？」

進の頭の中にはまだ沢山のクェッションマークが乱舞している。

ニッコリと微笑んで周安は答えた。

「僕に謝りに来たじゃろう？」

それも進には、何のことを言っているのかサッパリ分からない。

「最近僕んごと思い出しち、昔僕に悪いことしたなあち思うて、心ん中でごめんなさいっち、言

うちくれたことなかったっけ？」

あ……言われてみれば……進には思い当たることがあった。瞬間脳裏にお姉さんのお古のブルマを履いて皆に囃し立てられて泣いている小学生のショウタの姿が甦る。

「そうじゃあ、それぞれ、そんなことでシンちゃん僕に謝りに来てくれたんじゃ、嬉しかったなあ、昔ん友達が生き霊を発しち会いに来てくれるなんちこと、初めてやったけん」

「えっ？ 生き霊？」

「そうじゃ……」

周安の発した「生き霊」という耳慣れない言葉に進は思わず聞き返した。

「生き霊って、何？」

「うん、人の想念ちゅうかね、精神的なエネルギーが何かのきっかけで物質化して他人の前に現れるっちゅうか、それは概して人に対する深い恨みとか、憎しみが呼び起こす場合が多いんじゃけどな」

「憎しみ？」

「でん僕んところに来ちくれたシンちゃんは憎しみじゃのうて、悪いことしたなっちゅう後悔の念の方じゃったんじゃけど、じゃけどな」

「何？」

「僕んところへ来たシンちゃんは謝りに来たんじゃけど、その姿は深い邪心と怨念の方が強い意志を持ち具現化した様子じゃったから、そいやけん酷く気になっちしもうてね……」

「怨念？……」

「うん。そいで捜しちよったんや。本当はもっと早う会いに来ちよれば良かったんやけど、中々忙しうてな、せやけど、間に合うて良かったわ……」

進の手を包む周安の手はとても暖かい。柔和な目で見つめている周安の顔を見ると、進は言葉に詰まってしまい、顔を歪めて泣き出してしまった。

「うう……僕、どうしたら良いか分からなくてね、どうしてこんなことになっちゃったのか、とても怖くて、もう生きてはいられないと思ってたんだよう……」

もうそれ以上は言わなくても良いと言わんばかりに、周安は進に全てを察しているという風に何度も深く頷いて見せる。

この人は……ショウタは、今まで誰にも話すことの出来なかったことを、全て理解してくれているんだ。

しかもまだ何も話して無いのに、もう僕の抱えている問題の大体のことは分かってくれている様な顔をしている……。

息せき切った様に進は今までの経緯、自分が抱えている問題を全て周安に語り始めた。

あの店で退行催眠を受けてから見る様になった不思議な夢のこと、夢の中で故郷に帰ったら翌朝母から僕が枕元に来たと言う電話があったこと、もう15年も会っていない大学の先輩と、仕事のお得意様であった病院の医局長が相次いで不思議な死に方をして、それが殺人であり進の犯行ではないかと疑って調べに刑事が来たのだが、その刑事までもが先日進の見た夢と同じ状況で死亡したこと、また街中を歩いていた時に自分の分身を目にしてしまったこと、そして今、かつ

て恋をしていた女性の娘を自分の分身が殺そうとしているらしいこと、そして自分は何としてもそれを止めさせなければならないと思い、自殺しようとしたのはその為だったこと……進はそれらのことを、まるで亀裂の入ったダムが水の勢いで決壊し、大量の水が流れ出てしまう様に、一気に話し尽くした。

進の話を目を瞑って聞いていた周安は、進が話し終わると口の中で何やら経文か呪文の様なことをブツブツと唱え、目を開き、ふーっと深く息をついてから話し始める。

「それらは全部、シンちゃんの発した生き霊の仕業なんじゃ。精神カウンセリングで退行催眠を受けたことがひとつのきっかけになって、シンちゃんは自分でん思いがけずに生き霊を発する術を習得してしもうたんじゃ。シンちゃんが心の中で他の場所にいる自分を強く瞑想することによって、その場所に自分の魂を送り出すことに成功してしまったんじゃよ」

「魂を送る？」

「せや、人には精神エネルギーっっちゃう物があるな、それは僕らの様な能力を持った者には、その人を包んでいるオーラっちゃう色を持った光で見える物なんじゃけど、シンちゃんはそのオーラが大きく欠けてしまっているんじゃ」

「オーラ？ 僕の精神のエネルギー？」

聞き慣れない言葉の連発に度々周安に問い質さなければ、進には周安の話を理解することが出来ない。

「普通ん人のオーラが、そん人の周りに満月んごと円を描いて取り囲んじよるとすると、シンちゃんのは三日月みたいに半分くらいの量が欠けて真暗になっちよるんじゃ」

「それじゃ、その欠けた部分って言うのが？」

「うん、そのもうひとりのシンちゃんになって、勝手に何処かをうろついちよるんじゃ」

「勝手に？」

「せや、そやかてそれはシンちゃんの持っちよる恨みを晴らす為なんじゃよ」

「僕の恨み？ そんな、僕はそんなこと思ってないよ」

「でもそうなんや、退行催眠を受けたことがきっかけになっち、シンちゃんが無意識んうちに生き霊が解き放たれてしまったんじゃよ」

「そんな……僕の意味が？ 僕の意味が葵ちゃんの娘を苦しめろって……生き霊に命令してると言うの？」

「命令はしちよらんでも、代わりにやってくれとるんじゃ。シンちゃんの本性のな」

「本性って？ 僕がそんなこと思ってる訳無いじゃないか」

「まゝ落ち着いち、僕ん言うことを良く聞くんじゃ」

周安はニコニコしながら心配無いと言う様に進を宥めながら話を続ける。

「ええかい、こげんなっちしもうたんはシンちゃんの普段の性格にも原因があるんじゃ。よう考えてみい、例えば昔のことを思い出しちみると、驚くくらい細かいことでん鮮明に思い出すことが出来るんやないか？」

「うん。それは、僕は昔からそうなんだけど、時々周りの皆がビックリするくらいに、僕だけが昔の出来事を凄く細かいところまで思い出すことが出来て、驚かれたりすることがあるよ」

「記憶力が良いっちゃうことは、つまり昔起きた出来事を忘れずにいつまでんちゃんと覚えち

よるっっちゃうことなんじゃ。そんな時の心が受けた感情も、喜びもそうじゃけど、その中でん恨みは一番強い思いとしち残っちゃうものなんじゃ」

「そんな……恨みだなんて」

「それと、シンちゃんは家庭でも会社でも、周りと上手くやって行こうち努めて、いつも朗らかに事なかれ主義みたいに振舞おうと思っちょるじゃろ」

「うん」

「そんな為に、人に対して敵意とか恨みを持つことがあったとしても、必死になっち自分の中に隠してしまおうちすることないか？」

「それは……（その通りだ）」

「人に対する怨念をその場で言い返して晴らしたりすることをせずに、自分の中に溜め込んでしまいうタイプやと思わん？」

「思う……」

「恨みとか、特定の人物に対して憎しみを持った時に、それは無かったことにして忘れたつもりでいても、それはシンちゃんの身体の中に蓄積されちょるんじゃ。その行き場を失ったシンちゃんの怨念が、今度のきっかけで生き霊ちゅう形になって、身体の外へ飛び出しちしもうたんじゃ」

「そんな……」

「いいかい、シンちゃんの怨念は一番卑怯なやり方でそんな人のことを苦しめようと考えちょるんじゃ。それで娘さんに取り憑いちょるんじゃ」

「そんな、そんな事を僕が考えたって言うの？」

「考えたんは生き霊じゃ。でん考える為に使うたんはシンちゃんの頭じゃ」

「アイツは僕の意志とは関係なしに勝手なことしてるんだよ。僕はそんな嫉妬深い人間じゃない。そんな十何年も前のことをいつまでも恨んだりする訳ないじゃないか」

「いいから良く聞いて、まずシンちゃん自身がそんなことを認めることから始めんじやったら何も出来んのじゃ。現にシンちゃんの生き霊はいるんじゃけに」

「あれは……僕じゃない、化け物だ」

「でもシンちゃんの中から出て来たんじゃよ、シンちゃんの分身じゃのうて何なんじゃよ」

「……」

「なあシンちゃん。何よりもシンちゃんが生き霊の存在を、自分の怨念の存在を現実として認めん限り、生き霊を消すことは出来んのじゃ。生き霊を倒すには、まずその正体を暴いてやることから始めんとならん。そしてそれが出来るのは、シンちゃんだけなんじゃ」

「そんな……」

進としては絶対にそんなことを認めたくない。あんなに愛しく思っていた葵ちゃんのことを、僕が憎んで苦しめているなんて……そんなことは無い、そんなはずはない……そう思う。いや、思いたい。

「何よりも今一番危険が迫っちょるのはその女の子じゃ。早く助けてやらんと大変なことになる。なあシンちゃん。今そんな人がある場所は分らんのか？」

「えっ？ 葵ちゃんの？ いや、それは……」

今葵ちゃんがいる場所……進は今までそんなことは考えたことも無かった……。

「僕は、15年前に栃木の大学で別れたきりで、一度も連絡も取ってないから……でももしかしたら、同じ大学を出て医者になった人が勤務してる病院を知ってるから、その人から卒業生の伝手を辿れば、分かるかもしれない……」

「じゃ早急にそん人を捜し出して、何としても居場所を突き止めるんじゃ、話の様子じゃと生き霊はすぐにそん娘さんを殺すことは無いかもしれんけど、急いだ方が良いわ、さ、すぐに始めようや」

「えっ？ 今すぐに？」

「せや」

当然だよ。と言う様に周安は進の顔を見つめて頷いた。

15年間一度も連絡を取ったことの無い葵ちゃん。そう、あの時から……僕は一度も葵ちゃんと会うことはおろか口もきいていないんだ……。

進の脳裏に、あの朝のことが蘇って来た。大学の授業に出て来なくなった進を心配して、アパートの前まで迎えに来てくれた葵ちゃん……。

ドア越しに僕の名前を呼んでいた葵ちゃんの声……ドアをドンドン叩きながら……。

「高本くん！ 高本くん！ どうしたの、授業に来ないから皆心配してるよ！ 遅れた分は私のノート見せて上げるから、ねえ、学校に行こうよ、医者になるって夢諦めないでよ！ ねえ、高本くん！」

その時進は部屋の中で布団を被って目も耳も塞いでいた。悔しくて、苦しくて、情けなくて、とてもドアを開けて外へ出て行く気になんかなれなかった。

それっきり大学へも行かず、誰とも会わず。進は人知れず退学の手続きをして、アパートも引き払って来てしまったのだった。

その時は医者になると言う夢に挫折したということよりも、もう生きて行く気力を全て失ってしまい、人生に絶望してしまった様な感じだった。

……無かったことにしていた。かつて自分が医者になる夢を持っていたということも、葵ちゃんのこと……。

僕が今葵ちゃんがいる場所を捜すって？ そんなことはあり得ないはずだった。もう二度と、葵ちゃんに会うこと等は僕の人生には無いはずだった。あの葵ちゃんに……。

でも、苦しんでいる娘を心配してあんなに悲しそうな顔をしていた葵ちゃんを放っておいて良いのか？。

そんなことは考えるまでも無い、僕に助けることが出来るならば、どんなことをしてでも助けてあげなければならない。

自分ではどうすることも出来ない諦めていたけれど、ショウタの力を借りれば生き霊から葵ちゃんの娘を救うことが出来るかもしれないんだ。

すぐにこの店を出て、葵の居場所を探す為に行動を起こさなければならない。

葵ちゃんの居場所が分かり次第ショウタに連絡を入れ、すぐにでも一緒に会いに行く打ち合わせをするということになった。

二人が話終わって喫茶店の席を立つと、瞬く間に周りにいた客たちが近付いて来て周安に握手を求めたりサインをねだったりし始める。

周安は嫌な顔もせず笑顔で応えて丁寧に一人一人に応じて行く。

「時間かかってしまうけん、シンちゃんひとりで早く行って」

と周安に追い払われる様に手を振られ、進は「分かったよ」と言って一人出口に向う。

「ねえショウタ」

進はふと振り返って呼んでみた。

「なんじゃ？」

と周安は寄って来た客が差し出すシステム手帳や色紙にサインを書いてやりながら進の方を見る。

「ありがとう……」

周安はニッコリと笑い、いいからいいから……と言う様にまた片手を振って次の客から色紙を受け取りサインを書き始める。

懐かしかった。そうだ、確かに小学生の頃僕は友達から「シンちゃん」と呼ばれてた。それにショウタの口から聞く大分弁。テレビに出ている時は標準語で話しているのに。ショウタもきっと、僕といる間はタイムトリップしたみたいに小学生時代に戻っていたのかな。

だがそこにいるのはもうかつて皆に苛められて泣きべそをかいていたショウタの姿ではない。霊能力と言う頼もしい力を身につけて人格者になった、周りから尊敬される偉大な霊能力者になった男の姿だった。

少年時代に家庭が貧乏で苦労したショウタは、中学生から高校生時代には世の中を激しく憎む様になり、その頃の所謂不良になって、怒りにまかせて散々に周りの人間を傷付けた。

そしてある時そのしっぺ返しが来て、彼に恨みを持つ十数人の仲間たちからリンチを受け、重傷を負ってしまい、病院に入院した。

そして病院のベッドの上で何日も生死の境をさ迷って、危うく命を落としかけた時、自分の人生を考え直す啓示を受けたのだと言う。

退院してからは顔に大きな傷跡が残ったものの命を取り留めたことに深く感謝の念を抱き、それまでの荒んだ生活を捨て、心を入れ替えて一から出直すことに決めた。

その手始めとして自分の過去の非業を謝罪する為に母校の中学校を尋ねたところ、担任であった教師から修験道と言われる修行法を紹介された。

それは仏教と神教の隔たり無く霊山の中に籠もり、その山野の持つ霊力を自分の物として取り込むべく経文を唱えたり滝に打たれたりすると言う過酷な修行方法であった。かつて山伏と呼ばれる修行僧や出家して仏の道を決意した者等が選び通る道だったと言う。

ショウタは山に籠って修行する決意をした。

それくらいの覚悟が無くては、今までの非道を一掃し、心を入れ替えて出直す事等許されないと考えたのだ。

そして何と4ヶ月もの間、福岡県の英彦山と言う山に籠り、俗世との関わりを一切断った。そこで経文を唱えながら滝を浴びたり山中を駆け巡ったりする荒行を重ね、精神を叩き上げたのだ

と言う。

山を降りてからは霞里周安と言う法名を得て、真言宗に属する京都の神社に奉職を許された。

そこで神主としての仕事をする傍ら、修行を重ねていた周安に、この頃ある異変が起きた。

それは悩み事等の相談にやって来る者の話を親身になって聞いている時に、相手の持つ問題の原因や過去の因縁等が当人に説明されずとも分かってしまうことに気付いたのだと言う。

やがてそのことは次第に能力を増し、遂には相談者の前世の様子や、背後に連なっている守護霊の姿までもが手に取る様に見える様になった。

そのことが評判になり、周安に悩み事を相談しようと言う人たちが神社へ押し掛けて来る様になり、止む無く周安は神社の外にアパートを借りて、訪れる人々の相談事を聞く専門の部屋を設けることにした。

やがてテレビ局や雑誌社等も取材に来る様になって、気が付くと今の様な有名人になっていた

。

そう言えば進も周安のそんなプロフィールがテレビで紹介されていたのを見たことがある様な気がした。

それからの周安は世の中で悩み苦しむ人たちの為に、自分の力で助けを与えることを生きる道として行こうと決めたのであった。

かつての自分の様に人生の疑問や迷いに悩み苦しんでいる人たちを救うことによって、自分の生きる意味を見出そうと考えたのだ。

7

周安と別れた進はすぐに会社へ戻り、郊外の私立病院に勤めている両隣医科大学出身の医師に連絡を取り、電話を切るとすぐに出向いて午後にはその医師の元を尋ねていた。

だが相手に事情をそのまま説明したのでは変人扱いされかねないと思い、ただ単にあの頃の友人たちの消息を知りたいのだからだけ伝えた。

その医師からその場で両隣医科大学のOB会に連絡を取って貰い、進と同じ代の卒業生を紹介して貰い、その伝手を辿って旧姓依野葵、現在は古内葵と言う名前になっている人物が勤めていると言う総合病院の所在を突き止めることが出来た。

葵は練馬区にある荘野総合病院と言うところで内科医として勤務していると言う。

進はすぐにその荘野病院に電話してみたのだが、葵は現在娘さんの看病の為に休職していると言うことであった……。

進は自分が大学の同級生であることを告げたが、その場で葵の連絡先を教えて貰うことは出来なかった。

仕方なく進は対応に出た担当者に自分の携帯電話の番号を教え、古内葵さんの方から至急電話をして欲しいと言う旨を伝えて貰える様に頼み、電話を切ったのだった。

果たして葵ちゃんは僕からの伝言を聞いて、自分から電話等して来てくれるだろうか……。

連絡を待つまでもなく葵が勤めていると言う荘野病院へ訪ねて行ってみようかとも思ったが、周安に相談したところ連絡も入れずに押し掛けて行ったのでは悪戯に相手を驚かせるだけだと言うことなので、その日は引き上げて葵からの連絡を待つことにした。

夕方になって会社に戻り、電車に揺られ、自宅へ向う帰路の途中も、胸ポケットに入れた携帯がいつ着信を告げるバイブレーションを発するかと思うと、ドキドキする様な、何かあり得ないことを想像して待っている様な、不安と期待の入り混じった気持ちを感じていた。

家に帰ると、その夜はもう美由は好江と共に風呂に入ってしまったっており、進はひとり湯船に浸かって疲れを癒した。

その間も、背広のポケットに忍ばせた携帯のことが気になっている。

……15年の時を隔てて、またあの葵ちゃんと言葉を交わすことが出来るのだろうか……。

風呂から上がると、携帯のことが気になりつつも何食わぬ顔をして、テレビを見ながら好江の出してくれたビールを飲んだ。

好江は世話女房で、とても優しい女だと思う。僕は好江の言いなりになって生きているのかもしれないけど、好江はいつも僕を大事にしてくれる……今僕の頭の中が初めての恋をした葵ちゃんのこと一杯になっているなんて思いもしないだろう。

好江は何も知らずに甲斐甲斐しく僕の為にツマミを作り、用意しておいた今日の話題を振って来る。

そんな好江にとっても済まないと言う気持ちが湧き上がって来る。好江と結婚して以来8年。進

が好江に対してそんな気持ちを抱いたのは初めてのことだ。

夕食を用意する為に好江がキッチンに入っているところを見計らって、進はそっと寝室に入って背広の内ポケットから携帯を取り出してみた。するとそこに「着信あり」の表示と共に見慣れない番号の着信履歴が残っている。

葵ちゃんだ……間違いのないと思った。進はそこに並んでいる文字列にドキドキと胸が高鳴るのを感じる。

しかし今は自宅にいて、側に好江がいる。まさかここで掛け直す訳には行かない。だが、事は一刻を争う。急がなければならない……。

好江にはどうしてもコンビニで買いたい物があるので行って来ると言って、そそくさと携帯を持って外へ出た。

外に出ると少し夜道を歩いて近所の公園に入り、ベンチに腰掛けてポケットから携帯電話を取り出す。

先程の着信番号を呼び出し、その番号へ発信するボタンを押す。耳に宛てた携帯から相手の呼び出し音が鳴る……。震える思いで聞いていると、3コール目で相手に繋がった。

「もしもし……」

それは15年振りに聞く、葵ちゃんの声だった。

「今晚は……あの、高本進です」

「高本くん？」

胸がキューッと締め付けられるようになった。

「……うん」

「病院の方に連絡があったって聞いて、ビックリしてたんだけど……」

「あ、ああ、ゴメンね、突然で」

「うん……どうしたの？……」

「うん……実は、どうしても話さなきゃならないことがあって」

「えっ……何のこと？」

「葵ちゃん、娘さんがいるでしょ」

「うん」

「何か、今病気に掛かったりしてない？」

「えっ？……なんで？」

「実はね、話さなきゃならないことって、そのことなんだけど……」

「どういうこと？」

葵ちゃんは何か警戒心を持った様な言い方をした。

「葵ちゃんの娘に、関係のあることなんだ」

「どうして？ 何で高本くんがそんなこと言い出すの？」

「電話じゃ上手く説明出来ないんだ。葵ちゃんのところに尋ねて行きたいんだけど」

「……」

「信じて、きっと、力になれると思うんだ」

「本当？」

「うん」

「私を助けてくれるの？……」

「！」

葵の声はとても心細く、消え入りそうなくらい弱弱しかった。それはまるで自分を助けてくれるなら誰でも良いからすがり付きたいと言うような、そんな気持ちの表れの様でもあった。

聞けば葵は大学を卒業後、彼女の地元であった埼玉県の大学病院に研修医として勤務し、その先輩であった古内と言う医師と結婚、娘も生まれたが2年前に離婚し、職場を今の病院に移して娘と二人で暮らしているのだと言う。

娘の名前は里瑠ちゃんと言って現在4歳。1週間程前から原因不明の高熱を発し始め、夜になると悪夢を見ている様にうなされ続けており、みるみる身体も衰弱して行くのだが、どんな検査をしてみても原因が分からず、昨日からは葵が勤務している病院の小児科病棟に入院しているのだと言う。

葵ちゃんは15年も音沙汰の無かった進から急に電話がかかって来たことに驚きを隠せず、また進が娘の病気のことを持ち出したことにも酷く驚いている様子だった。

進は今までの経緯をこのまま電話で説明しても、余りにも荒唐無稽であり、葵ちゃんに信じて貰える様に話す自信も無かったので、葵ちゃんには明日の朝病院を訪ねると約束をして、電話を切った。

葵ちゃんとの電話を切ってすぐに周安に掛け直しその旨を伝えると、周安は翌日の午前中のスケジュールを開けて進に同行すると言ってくれた。

何とも心強い味方を得ることが出来て、これで葵ちゃんを救うことが出来るかもしれないと思い、進は多少の希望を感じる事が出来た。

進は携帯電話をトレーナーのポケットにしまうと、公園を出て急ぎ足で家へ戻った。

家に入ると心配した様に好江が待っていた。

「どうしたの進さん、何を買って来たの？」

と聞かれたが「うん、やっぱり無かったよ」と言って誤魔化した。だが好江は何か不審を感じている様な顔をしている。

「おっ、今日はハンバーグに野菜炒めまであるじゃんか、やった一御馳走だな」

と進は必要以上に元気を見せて、好江に心配を掛けない様にと、努めて明るく振舞っていた。

8

翌日の早朝。進は周安と新宿駅で待ち合わせた。

駅の広場で先に来た進が待っていると、周安は御茶ノ水駅の橋の上で会った時と同じ、顔が見えない様に扮装した姿で現れた。

「お早う、それじゃ行こうか」

新宿からJR線で高田馬場へ、そこから西武線に乗り換えて二人は葵のいる病院を目指した。上りの通勤電車とは反対方向だったし、まだ通勤ラッシュの始まる時刻より遥かに早い時間だったので、電車の中は空いている。

家を出る時進は好江に、今日はちょっと遠くにある顧客を訪問するので早く出ると言って家を出て来た。会社には得意客を回って午後から入社する予定であると伝えるつもりだった。

葵ちゃんに教えられた最寄の駅からタクシーに乗り、二人は荳野病院へと向った。

その病院は自然に包まれた郊外の閑静な住宅地の中にあり、広い敷地の中に整然と白い建物が建ち並んでいる。

正面玄関でタクシーを降りた進は、その病棟を見上げた。

「ここに葵ちゃんがいるんだ……」

「さ、シンちゃん、早う」

そんな進の心情はお構いなしに周安が急ぎ足で中へ入ろうと促すので、進も慌てて後を追う。受付けで来訪者カードに記入を済ませ、葵ちゃんの娘が入院している小児科病棟の場所と病室の番号を教えて貰い、向う。

本館から渡り廊下を通過して小児科のある病棟へ入る。

病室の番号を確認しながらそそくさと歩く周安に付いて行きながら、葵ちゃんと娘がいるその病室が近付いて来るに連れ、進の胸はドキドキと高鳴る。

あの葵ちゃん……あの葵ちゃんが……もうこの側にいる……。

そして周安と進は目指す葵のいる病室の番号に行き着いた。

周安に促され、思い切って進がノックすると、中から「はあい」という返事が聞こえた。中からパタパタと扉に近寄る足音がしたかと思うと、進の前でガラリと扉が横にスライドして開く。

「……」

目の前に、進を見つめる34歳の葵の顔がある。この背丈、この顔立ち……。

「葵……ちゃん……」

……それまでの進の脳裏には、20歳だった頃のあの、あの瑞々しくてどことなく幼さの残る美しい葵の面影がそのままに残っていたのだが、今この瞬間にそのイメージが15年経った現在の葵の姿にオーバーラップして入れ替えられる。

「高本クン……」

声は、殆どと言って良い程変わっていない、ここにいるのは、紛れも無くあの葵ちゃんだ。

「こんにちは、久し振り……」

葵は驚いた様な顔をして進の顔を見つめた後、進の横に立っている、季節外れのマフラーや帽子とサングラスで顔を隠した怪しい姿の周安に目を移す。

「こちらの方は？」

「あ、こんにちは、どうも、失礼します」

と言って周安は目深に被った帽子を取り、サングラスを外し、口元を隠したマフラーをグルリと外して素顔を見せて行く。

「あ……」

あれだけマスコミで話題になっているだけあって、葵も周安の顔を見てすぐに見たことのある人だと気付いた様子である。

「この方は霞里周安さんと言って、テレビとかで見たことあるでしょ、実はあの、僕の小学生の時の同級生なんだ」

「えっ、そうなんだ、でも……」

周安は進と並ぶ様に一步前へ出ると、誰にでも暖かさを与えるあの柔和な笑顔を浮かべて言った。

「突然訊ねて来てしまってすみません。私は貴方と高本さんのお力にならせて頂きたいと思って、やって来たんです」

「……どう言うことなんですか？」

「はい、実はこれには特別な事情がありまして、娘さんのご病気に関係があることなんです」

「娘のですか？」

「どうですかお加減は？ 大分お悪いですか？ 娘さんにちょっとお会いすることは出来ないでしょうか」

「はあ、はい、どうぞ」

葵は戸惑いを隠せない様子であったが、入り口の脇へ退いて二人を病室の中へ招き入れた。室内のベッドには初めて見る里瑠ちゃんが小さな腕に点滴を刺したまま、寝息を立てて眠っている。見ると間違いなく、進が夢の中で見た、あの少女の顔であった。

だが、里瑠ちゃんの顔は赤い発疹の様な物に覆われており、それがまた乾燥してひび割れ、所々がまばらなカサブタになっている。なんとも恐ろしい形相を呈している。

周安はしばしじっと里瑠ちゃんの様子を見つめると、額に手をかざして何かを探る様に目を閉じてブツブツと口の中で唱えている。

進が近付くと何かを察したのか、里瑠ちゃんは突然唸りを上げてむずかり出したかと思うと、おもむろに目を開く。

何事かと視線を泳がせてまどろんだ後、そこにいた進の顔に目を止めたかと思うと「きゃああああ——！」と叫び声を発し火が付いた様に泣き始める。

「助けて！ 助けて！ いやあ！ 恐いよう、ママ、ママ恐い恐い恐いようわあーんわあーん……」

進の顔に何が見えると言うのか、慌てて側に来た葵が泣きじゃくる里瑠の身体を抱きしめる。

「大丈夫よ、大丈夫よ里瑠ちゃん、この人はね、ママのお友達なのよ」

「いやー怖い、助けてー！ いやぁ、いやああああ……」

葵がなだめても、抱きしめて背中をさすってやっても一向に泣き止む気配も無く、一層声を張り上げて泣き叫び続ける。

一体どうしたと言うのか、訳が分からずに進の方を振り向いた葵は、困った様な、進に敵意を表した様な顔をして「お願い、高本くん、外に出て行ってくれる」と言った。

何か言いかけた進を制して周安が進に部屋の外へ出る様に促す。

周安に連れられて進は病室を出てドアを閉めた。中では泣き続ける里瑠の声と、あやしなだめている葵の声とがいつまでも聞こえている。

仕方なく二人は一階にある談話室で待つことにして、葵には里瑠ちゃんが落ち着いたら降りて来てくれる様にと伝えて来たのだった。

その病棟の談話室は10畳程の広さがあり、幾つかのテーブルが並び、それぞれに椅子が設置されている。

周安と進の他に来ている人はなく、椅子に座った進は。先ほどの里瑠ちゃんの反応にショックを受けてうな垂れてしまった。

「僕は……一体何てことを……」

と自分の頭を拳でガンガン殴る。

その進の腕を横に座った周安がつかんで殴るのを止めさせる。

「シンちゃん、大丈夫、大丈夫じゃけん」

一体何が大丈夫だって言うんだ……と言う思いで周安を見た進は、じっと見つめている周安の柔和な顔を見て、急激に心が安らかに落ち着いて行くのを感じる。

葵はようやく泣き止んだ里瑠のことを担当の看護師に言付けてから、一階で待つ進と周安のところへやって来た。

「葵ちゃん……大丈夫？」

神妙な顔をして席に着いた葵は進と周安に頭を下げた。

「私もう、何が何だか分からなくて……」

と両手で顔を覆ったかと思うと嗚咽を漏らし、指の間からポロポロと涙を流す。

「葵ちゃん……」

進は両手をギュッと握り締めて、苦汁のあまり唇を噛む。

葵は里瑠が一週間程前から、深夜突然高熱を出して夜泣きする様になり、息苦しそうでうなされていたかと思うと、時には呼吸が止まりそうになることもあるのだと言う。

進と周安は「やはり」と言う様に顔を見合わせた。

「調べても原因が分からないんです。単純な風邪の症状とは明らかに違うし、抗生物質を打っても効かない、かと言って新種のウィルスに感染した形跡も無いし、私もう、どうしたら良いのか分からなくて……」

「ごめんよ、葵ちゃん……それは、僕のせいなんだ……」

「えっ？」

何故進が自分に謝らなければならないのか、葵は訳が分からないと言う風に進を見つめる。

「何を言ってるの？」

そこで周安が進に助け舟を出す様に話し始める。

「こんなことを突然切り出しても医者である貴方にはとても信じられないことだと思います。でもいいですか葵さん。どうか私の言うことを信じて聞いて下さい」

「は、はい……」

葵はまだ訳が分からず不安そうな顔で周安を見つめる。

「今里瑠ちゃんが原因不明の病気で苦しめられているのは、霊障が原因なんです」

「えっ？ れい、しょうって？」

「靈魂が及ぼす障害、つまり祟りのことです」

「そんな、一体誰の祟りだって言うんですか」

「それがシンちゃん。ここにいる高本さんなんです」

「高本くん？ えっだって」

「はい、確かにこの人はまだ生きています。でも生きている人の霊が他人に祟ったりするということもあるんです」

「生きている人の霊が？」

「はい、それはつまり、生き霊ということですよ」

「生き霊？」

「ごめん、葵ちゃん。僕は、僕は……」

いたたまれなくなった進は椅子から立つとその場にバッと土下座して床に頭を擦り付けた。

「ごめんよ、ごめんよ葵ちゃん。僕のせいで……僕のせいで……」

急にそんなことを言われても全く訳の分からない葵は啞然としてしまう。

「ま、待ってよ、高本くん、それに周安さんも、私一体、何が何だか、さっぱり理解出来ないんだけど……」

「葵さん、貴方はかつて栃木県内の医科大学でシンちゃんと一緒に勉強していましたね」

「はい」

「その時一緒だった先輩の大垣彰さんが先日亡くなられたのは御存じでしたか？」

「は、はい、それは、私も連絡を貰ってましたから……」

葵は思いがけず出て来た大垣の名前を聞いて、何か居た堪れない様子になった。

周安はこれまでの経緯を葵に事細かに説明した。進が自分の生き霊を発する様になってしまった精神カウンセリングの退行催眠のこと、そこから始まって栃木の大垣彰医師の事故死と、進の大切な顧客であった昭和台病院の村麦医局長の不審な事故死。更にそのことで進を調べていた栃木県警の所田刑事までもが不慮の死を迎えたこと。それ等一連の事件と今まで進が見て来た夢との関連性。そして現在進が毎晩襲われている夢の中で、進が里瑠ちゃんの首を締めているのだと言うこと……。

そんなことをいきなり話されても、生き霊だなんて、葵がにわかに信じられなかったのは無理もない、だが、考えてみればあれだけテレビで持て囃され活躍している霞里周安と言う霊能者が、紛れもなく本人が、今現実に目の前に来ているのだ。それにさっき病室で進が入って来た時の里瑠の反応の仕方は尋常ではなかった。

周安の話聞いていくうちに葵は衝撃を受けてしまい、驚きのあまり目を見開いたまま絶句してしまっただ。

「ごめんよ葵ちゃん。僕のせいで、こんな思いをさせてしまって……」

土下座して俯いたままの進は肩を震わせて泣き出してしまっただ。

「でも、それじゃ、それじゃどうすれば良いんですか？ 里瑠の病気が本当に高本クンの生き霊の仕業なんだとしても、それをどうすれば里瑠の病気は治すことが出来るんです？」

「それは……除霊を行います」

「えっ？」

「里瑠ちゃんの身体からシンちゃんの生き霊を引き離して、シンちゃんの身体の中に戻します」

「でも、そんなこと……」

「ええ、普通は生き霊を除霊する場合、取り付かれた人から引き離れた霊は形代と呼ばれる人形の形をした紙に縛り付けて川に流したり、または護摩焚きの炎に入れて燃やしてしまったりするんですが、そうしてしまうと生き霊を甦した本人は精神のエネルギーを放出したままの状態になってしまいます。それではシンちゃんはやがて精神力を失って死んでしまいますので、今回は生き霊を甦した本人であるシンちゃんにも儀式の場に同席して貰い、払った生き霊を元の場所、つまりシンちゃんの身体の中に戻すと言う方法を取りたいと思います」

「でっ、でも、そんなこと、本当に出来るのかい？」

と訊ねたのは進だった。

「うん。こげんやり方は今までは例が無いんやけど、今回は生き霊を甦した本人が除霊の場に同席することが出来るんじゃから、やってみようち思うんじゃ。それに、生き霊を戻さんかったらシンちゃんはこれからずっと不完全な人間のまま過ごさなければならなくなって、みるみる衰えて1年もしないうちに死んでしまうと思うんじゃ……」

「そ、そんな！」

不完全な人間？ あの化け物を自分の中に戻すだなんて、そう考えただけでも薄気味悪くて逃げ出したくなるのに、アイツを僕の中に戻さなければ僕は不完全だって言うのか？ だったらずっと不完全なまま生きて行った方がずっと良いんじゃないのか……でも、それでは僕は長く生きられない……何て皮肉なことなんだろう。

葵の方は、医療では里瑠を救う手段が無い以上、どんなものにもすがりたいと言う気持ちだった。除霊でも何でも本当に里瑠を助けることが出来るのならと、周安に全てをお任せしますから、宜しくお願ひしますと言う返事をした。

それには進も依存は無かった。こうなればもう何だってやらなくちゃ、どんなことしたって里瑠ちゃんを助けるしかないんだから。それも出来るだけ早い方が良い。

周安は具体的な除霊を行う日時と場所の相談に入った。

周安の言うには、除霊は神社等に祭られている神仏の力を借りてするものなので、然るべき寺社をお借りして、儀式を行う為には準備も含めて三日間はそこに籠もらなければならないと言っ

進は週末の二日間は空けられるとしても、どうしてもあと一日は会社を休まなければならない

。好江には心身のリハビリの為に寺社で行われるセミナーにでも参加すると言えば誤魔化しが効くと思った。

進は次の週末の金曜日から日曜日までの三日間でやろうと提案した。

日程はそれで進めようと言うことになり、儀式を行う寺社は決まり次第周安から二人に連絡を入れると言うことになった。

「ねえショウタ」

「なんじゃ？」

必要な打ち合わせが済んだ後、進はそっと周安に言う。

「お願いがあるんだけど、ちょっと葵ちゃんと、二人にして欲しいんだけど……」

「うん……」

周安は頷くと席を立ち「そしたら表で待ちよるけん」と言って外へ出て行った。

進は「ありがとう」と言って見送り、葵に向き合った。

初めて葵と二人きりになると、思いがけず気まずい空気が張り詰めてしまう。

「……葵ちゃん。せっかく、久し振りで会えたのに、こんなことになっちゃって、僕のこと憎んでるだろうね」

「どうして？」

「だって……」

「高本くんは、私のことを憎んでるの？」

「ううん、そんなことないよ！ 本当だよ信じてよ、僕は……」

「分かってるよ」

葵は進にニッコリと笑って見せた。

「でも、ショウタ……いや周安さんは、僕の心の中に、葵ちゃんへの強い恨みが溜まってたから、僕の代わりに、生き霊が恨みを晴らしに来てるんだって、そう言うんだ……」

「そう」

「……ごめんよ、僕だってそんなこと、信じられないんだけど、でも……」

「謝らないで」

「えっ？」

「あの時のことは、私もずっと、思い出す度に心が痛んでたから……」

「えっ……」

あの時のこと……そう、葵ちゃんは確かに今「あの時のこと」と言った。あの時のこと……あの時のこと……。

顔を真赤にして、慌てて衣服を身体にあてがって進の脇を走り抜けて行った葵ちゃん……その姿が脳裏に過ぎる。

「いつか言いたいと思ってたの……ごめんなさいって……でも、今はこうして高本くんが私のこと助ける為に来てくれたことが、とても嬉しいよ……」

「葵ちゃん……」

「高本くん、助けて……」

テーブルの向こうから葵は進の手の上に自分の手をそっと重ねてきた。

「私にはもう、あの子しかいないんだもん……」

あれから……進がアパートに閉じ籠り、葵に何も語らないまま大学を辞めていなくなってしまうから……。

葵は大垣彰と付き合っていたが、大垣には葵の他にも複数の女がおり、葵が思っている程には大垣の方は本気ではなかった。

勉強が忙しかったこともあって、1年も続かないうちに自然消滅と言う形で終わってしまったのだと言う……。

その後葵は臨床実習を含む6年間の課程を修了して、医師国家試験にも合格した。

地元の埼玉県に戻り、研修医として勤務した病院で知り合った古内と言う医師と交際を始めたが、その時古内には妻子があり、葵が妊娠したのをきっかけに古内は前妻と離婚し、葵と結婚した。

だが、古内は2年もしないうちにまた新しい恋人を作った。その相手は葵が研修期間を終えて勤務していた同じ病院の新しい研修生だった。

その研修生と葵との間で争いが起こり、また古内が子供の養育費を払わないと言って押し掛けて来た前妻も加わって泥沼の様相となり、結局葵は離婚して里瑠を一人で育てることにしたのだった。

そんな話を聞いていると、何故こんなに素敵な葵ちゃんが、そんな人生を歩まなければならないのか……と言う思いがつのる。

葵は勉強や生活のことはしっかりしているのに、男を見る目だけは無かったのか……。もし僕と一緒にになってくれているならば、絶対こんな思いはさせなかったのに……と歯噛みする思いだった。

葵ちゃんは男運だけは無いのか、それとも自分からろくでも無い男に惹かれてしまう性なのか……。でも進にはそんな、しっかりしているようで儂気な葵のことが一層愛しく思えて来るのだった。

自分の顔のすぐ側にあの葵の顔がある。まさかこんな時が来るなんて、信じられなかった。

月日が経って年齢を重ねて来た葵の顔。でも進の目にはあの時のあの日のまま、その面影が二重写しになって見える。ああ、僕の好きだった葵ちゃん……。その瞳、唇、抱きしめて思い切りキスしたい……。

進にとってはあの遠く手の届かなかった葵ちゃんが、今自分にすぎる様な瞳を向けて助けを求めているんだ。

「生き霊とか、除霊とかって言われても、急には信じられないけど、正直まだ戸惑ってもいるけど、でも私本当にどうして良いか分からなかったのよ……。私、高本くんが来てくれて嬉しかった。助けて、お願い、あの子が助かるなら、私なにをしてもいい……」

と言って横に来た葵は進の肩に額を付けて泣いた。進は葵の肩に手を回して抱き寄せた。

自分の身体に寄り添った葵の身体の重みを感じる。

その体温が、ほのかな香りが伝わって来る。一瞬気が遠くなる様な陶酔に痺れるのを感じた時、思いがけず進の顔にニヤリと笑みが浮かんだ。

その時初めて進の意思が生き霊の意志とピタリと重なったのだ。そうか、進にも初めて分か

った。僕はこうなりたかったんだ。

「復讐は成った！」

葵を抱きしめながら進は、今こそ生き霊と肩を組んで勝利の歌を歌い出したい気持ちになった

「なにをしてもいい」

葵はそう言った。するとあんなことや、こんなこともして良いのか。あの時、屈辱と嫉妬にまみれた、あの思いのたけを全てぶつけて葵の中に注ぎ込んでやる！ 今こそ葵の唇、葵の身体は全て僕の物になるんだ。

抱きしめた葵にキスしようとして顔を上げさせた時、葵はその進の顔が不気味に青白く目玉が真っ黒になっているのを見た。

「きゃああああー！」

恐怖に慄いた葵は進の身体を突き飛ばした。床に尻餅を付いた進はその瞬間我に返る。

ハッとして気が付くと、葵が恐怖に慄いた目で自分を見つめている。

「ち、違う、僕は……違う、違う違う僕じゃないよ！ 僕じゃないっ！ 僕は、僕はっ……わあああああ……」

頭をかきむしる様にして一目散に走り出した進は、談話室のドアをバーンと開け放ち、部屋の外へ出た。

廊下で待っていた周安は驚いた。

談話室を飛び出した進は階段へ向い、凄い勢いで駆け上がって行く。

「高本クン！」

中から葵の呼ぶ声が聞こえる。

周安も急いで後を追った。

進の心の中では、生き霊の意思とそれを認めたくない進の意思とが激しく葛藤していた。

僕は絶対にお前を許さない！『何言ってやがる、嬉しくて思わず笑ったクセに』進の顔がその内部の葛藤を表す様に青くなったり、目が黒くなったり、まだらに元に戻ったりして変貌し続ける。

病院の屋上へ出た進はそのまま縁へと駆け寄り、欄干をよじ登って外側の縁に降りる。

そのまま生き霊諸共飛び降りて息の根を止めてやるつもりだ。

ちくしょう、コイツと一緒に死んでやる、

こんな僕は……こんな僕は死んでしまった方が良いんだ……やっぱり僕が生きていちゃ、葵ちゃんを救うことなんか出来やしないんだ。僕は何て卑怯なヤツなんだ……殺してやる。僕が死ねば僕の恨みも消えてお前も消えてなくなるんだ。そうすれば里瑠ちゃんも直って葵ちゃんも救われるんだ！。

決意を固めて飛び降りようとした時、搭屋から走り出て来た周安が叫ぶ。

「やめろ！」

振り向いた進が周安を見つめる。

「やめろっちゃ！」

「止めないでよ……もう、僕には分かったよ。やっぱり僕は、葵ちゃんを恨んでたんだ。生き霊

がやろうとしてることはやっぱり僕の意志なんだよ……」

「違う！　だってシンちゃんは、葵さんを助ける為にこうしてここまでやって来たやないか」
涙を流して進は激しく顔を横に振る。

「葵ちゃんを救うにはもうこれしか無いんだよ、僕が死ぬしか……僕が死んで生き霊と一緒にこの世から消えるしかないんだ」

「バカな、そげんことしたっち生き霊は消えたりしないんじゃ！　シンちゃんが死んだっち何にも意味無いんじゃ！　シンちゃんが死んだら、生き霊はそのまま怨霊になってこの世に留まり続けるだけなんじゃ。怨霊になった方がずっと救われないんじゃ！　生き霊を消すにゃ、シンちゃんの中に戻すより他に手はないんじゃ。せやから、僕も手え貸すから、なァ、生きて一緒に戦う勇気を持つんじゃよ、なァシンちゃん！」

「うううう……ショウタ……うううううう」

進を勇気付けようとする周安の必死の呼びかけに絆されて、進はその場に泣き崩れてしまう。

葵の娘の里瑠の身体から生き霊を払い、進の身体に戻すと言う儀式は、周安の手配により都内にある牧挟不動尊と言う寺社の境内を借りて行うことになった。

儀式は三日間の日程で行い、周安と進は初日の早朝から入って準備を行い。葵と里瑠は二日目の午後から参加して儀式を執り行なうということになった。

進はその週末の金曜日に有休を取る旨会社に申請を出し、好江には続く土日を利用して三日間の精神静養の為に牧挟不動尊で行われる禅の会に参加したいのと言った。

それまでの好江ならば進が一人で三日間も家を空けること等許すはずも無かったが、近頃の尋常でない進の憔悴振りを心配していたので、そんなことででも進の容体が良くなるのならと、進の申し出を許したのであった。

第五章

1

その日の金曜日が来た。進は簡単な着替えと最低限必要な洗面用具だけを鞆に入れ、ひとり電車を乗り継いで周安の指定した牧挾不動尊へと向った。

牧挾不動尊は東京都の外れ、埼玉県との県境にある。

都心から離れ、2時間あまりを費やしてローカル線を使い継いで辿り着いた小さな駅から、更にタクシーで国道を30分も走ったところにその入り口はあった。

それは都内とは思えない程鬱蒼と生い茂った森の中にあり、タクシーを降りてから林道を延々と歩いて行くと、やがて大きな山門が姿を現した。

そこへ一歩足を踏み入れると、築後三百年を経過していると言う境内は荘厳な雰囲気包まれている。辺りに人影は無い。

進は周安から「私は本堂の中にいますから、来たらまず本堂の中へ入って来て下さい」と言われていた。

おそらくあの一番大きな神社の様な建物がそうなのだろう。そう思って近付いて行くと、中から微かにお経を唱える声が聞こえている。

正面に据えられている木造の階段を上り、重々しい扉を開くと、中は二十畳程の板敷きの広間になっており、正面の奥に御本尊である神像が祭ってあるらしかった。普段は畳敷きなのだが、今は儀式の為に畳を挙げ、全面板の間になっているのだ。

その中央で修行僧の様な法衣を身に纏った周安が腰を下ろして読経している。

「あの、お早う、御座います……」

進の声気付いた周安は読経を中断し、進の方を振り返った。

「よう来たね、シンちゃん。さ、こっちに来て、まずは御本尊様にご挨拶しち……」

「うん、あ、はいっ」

ピンと張り詰めた堂内の雰囲気に気押されながら、進は靴を脱いで中に入った。靴下を履いた足に板張りの床が冷たい。

周安の横に習って正座をして座り、促されるまま正面に向って頭を下げ、顔を上げて奥に据えられている御本尊を見上げた。

この寺社の主として祭られているその巨大な神像を見て、進は思わず息を飲み、たじろいでしまった。それは……まるで、鬼だった。

大きな目玉が隈取りをした歌舞伎役者の様にギロリとこちらを睨み点けている。その右手には大きな剣を、左手には束ねた太い縄の様な物を持っている。そして背中には赤い炎が燃え上がっている様が彫刻されている。

「こん神様はなあシンちゃん。不動明王様っっちゃうんじゃ」

「ふどう……みょうおう様？」

「うん。いいかいシンちゃん。説明しちよくけん、除霊の儀式っちゅうんはな、僕がやる訳ではないんじゃ」

「えっ？ それじゃ、誰がやるの？」

「段取りや進行を取り仕切るのは僕じゃけど、悪い霊を排除する力は僕たち人間には無いんじゃ。せやから、そん為に神仏の持っているお力をお借りしなければならないんじゃ」

「そうなんだ」

「うん。今回は僕が修行して来た修験道で崇めて来た神様の中で、除霊の儀式には一番の力を持つち言われちよる、この大日大聖不動明王（だいにちだいしょうふどうみょうおう）様のお力をお借りしようと思うんじゃ。そん為に僕はこの場所を選んだんじゃ」

「……そうだったんだ」

「うん」

もう一度進はその恐ろしい形相の神像を見上げた。本当にこの神様が進の生き霊を葵ちゃんの娘から取り払う手助けをしてくれると言うのか。

進は周安が教えてくれた名を口に出してみる。

「だいにち？…」

「だいしょう」

「だいしょう」

「ふどうみょうおう」

「ふどう、みょうおう……」

「シンちゃんも名前くらいは聞いたことあるじゃろ？ 仏法で最高の神様とされるお釈迦様のことを密教の間では大日如来（だいにちにょらい）様ち言うんじゃけど。不動明王様ち言うんは、その如来様の教えを俗世の人々に広める使命を帯びちよるんじゃ」

「へえ、でも……」

「うん、どないしてこげな怖い顔をしておられるんかち言うとな、不動明王様の役目は仏様の教えに従わない邪悪な心を持った者を、無理矢理降伏させて従わせるっちゅうことなんじゃ」

「無理矢理？」

「せや、現世の僕たちはともすれば思いあがって、生きていることの感謝も忘れて神仏をないがしろにしてしまうじゃろう。そんな時に怒って僕たちに鉄槌を下して、力づくにでもお釈迦様の教えを僕等に浸透させる為に、時として怒り狂うと言う恐ろしい神様なんじゃ」

「そうなんだ……」

「うん……でも誤解しないでな、確かにこの神様は下界の我々から見れば怖い神様かもしれんけど、そんお心は邪悪な心に捕らわれちよる哀れな者を救って上げようちゅう、優しい御慈愛に満ちておられるんじゃ」

「ふうん……」

周安からそんな説明を聞いても、進の目にはその神像の爛々とした両眼に、まるで自分を射る様に睨まれている様な気がして、畏怖の余りまともに見ていられなくなってしまった。

本堂の中には周安の他に誰もいないようだった。儀式の為に周安は住職様に不動尊の境内を貸

し切りにして貰ったと言っていたが、どうやら住職様はこの三日間周安に境内を開け渡し、他へ移られているらしかった。

周安は進を本堂の脇にある控室に連れて行き、そこに用意してあった白装束を渡すと進に着替えさせる。

周安はまず、儀式を執り行なう為に身を清めることから始めなければならないと言う。

「明王様に除霊の儀式に力を貸して頂ける様に、僕がお祈りを始めるから、明王様が快く僕たちに手を貸して下さる様にシンちゃんも身体を清めてお祈りを捧げなければならんで」

「分かったよ、どうすれば良いの」

「禊（みそぎ）を行うんじゃ」

「みそぎ？」

周安は進を連れて本堂を出ると、不動尊の裏手へ回ってそこから下に降りている石の階段を降りて行った。

進も後に付いて行くと、不動尊の敷地の裏手は切り下った小さな谷の様になっており、下の方から微かにバシャバシャと水音が響いて来る。

下まで降りてみると、山の上から流れて来た小川が切り立った崖を滝になって流れ落ちているのだ。

周安は進に、そのまま滝壺に入って水が落ちて来る真下に立つ様に指示する。

進は白装束のまま水の中へ入って行く。

滝が流れ落ちている中に立ち、両手を身体の前で祈る様に組み、ちょうど頭の天辺に滝の落下が当たる様にして目を閉じる。

遙か上から降り注ぐ山水が進の脳天にバチバチと音を立てて叩き付けられる。

身体全体がブルブルと震え、両脚を踏ん張っていないとよろけて転んでしまいそうになる。

5月に入ったとは言え水は冷たく、たちまちびしょ濡れになった白装束は水分を含んで重みを増し、全身が凍えてガクガクと震え始めてしまう。

その状態のまま周安は自分の言う言葉を復唱しろと言って般若心経と言う経文を大きな声で読み上げ始めた。

滝の向かいに立った周安が声を上げて読み上げる経文に続いて、進が真似をしながら言葉を続ける。

「観自在菩薩～」

「くわんじざいぼさつ～」

「行深般若波羅蜜多時～」

「ぎやうじんはんにはらはらみつたじ」

「照見五蘊皆空～」

「せうけんごうんかいく……」

進にはその経文の意味等皆目分からなかった。周安が読み上げる発音通りに自分が正しく言えているのかも分からなかった。ただただ周安の言う様に、自分が清い心を持ち、自分の中に巣食う邪悪な心を神様に追い出して貰う為にと、ひたすらそう願いながら、一心に声を張り上げて周

安に続いて経文を復唱して行った。

進の耳にはバシャバシャと流れ続ける激しい滝の音が響き、ひたすらに精神を集中して瞑想の中に埋没するように努めた。

そうしていると心の内側に様々な思いが去来した。家で心配しながら待っている好江のこと、5歳の美由の可愛らしい笑顔、そして自分のこと、幼き少年時代、医者を目指して栃木に一人暮らしして通った大学のこと、初めての恋だった葵ちゃんのこと……進の今までの短い人生のあれやこれやが走馬灯の様に脳裏を駆け巡り、浮かび上がっては消えて行った。それら全てを包み込む様に滝の水流が脳天から打ち付けられ、全てを洗い流すかの様に流れ落ちて行く。

「……観自在菩薩（くわんじざいぼさつ）行深般若波羅蜜多時（ぎやうじんはんにはやはらみつたじ）照見五蘊皆空（せうけんごうんかいく）……度一切苦厄（どいちさいくやく）……」

滝に打たれながらの読経の行は果てしなく続けられた。

やがて夜になった。周安と進は滝行を修了すると、再び石段を登って不動尊へと戻り、本堂の隣りに設けられている社務所へと入った。

進はそこで着替えを済ませ、台所で周安が用意してくれた白米と僅かな惣菜だけの食事を取った。

牧挟不動尊は森に囲まれているだけあって、夜になると辺りはシンと静まり返ってしまい、全くの沈黙の世界だった。

そんな中周安と静かに食事を取っていると、まるで何処か現実ではない異世界の修行の場に来ている様な気がして来る。

ふたりが箸を使う僅かな音だけが部屋に響いて聞こえている。

「この世にはなシンちゃん。善と悪としか無いんじゃない……」

食事を終えて周安の入れてくれた茶を啜っていると、周安が穏やかに、何の気なしに話し始めた。

「物理学の世界で言うプラスとマイナスと同じじゃ。よく世界は全てプラスとマイナスのバランスで成り立っているっち言うやないか」

「うん」

「人間の世界も同じなんじゃ。喜びと悲しみ、感謝と憎しみ、強い者と弱い者、楽なことと苦しいこと、勝ちと負け、それらが全て表裏一体になってバランスを取り合いながら、この世は成り立っているんじゃない……ただな、時としてそれが片方だけに片寄ってしまうと、バランスを崩してしまうことがあると、自然の摂理が働いてそのバランスを戻そうとする為に強い力が作用することがあるんじゃない。そんな時に、人間にとって耐え難い苦しみや激しい変化が与えられたりするものなんじゃ……」

「それじゃあ今、僕の中で起こっていることも？」

「うん。おそらくシンちゃんは、今まで自分でも気付かんうちに、そのバランスを崩してしまっていたんじゃないかのう」

「それじゃ、僕はどうすれば良いんだろう……」

「取り戻すんじゃない、バランスを」

「どうやって？」

「……戦うんじゃ」

その時にはまだ、周安の言わんとすることが何なのか、本当のところは進には理解出来なかった。

食事を終えた二人は再び本堂の中に詰め、滝に打たれながら唱えたのと同じ般若心経の経典を、周安と共にご本尊に向かって唱え続けた。

闇の中で蠟燭の炎にゆらゆらと照らし出された不動明王の神像は、昼間よりも一層の凄みを帯びて、進に迫って来る。

ふたりはそこで2時間程の読経を行った。その後再び社務所へと戻り、その夜は宿直室でふたり布団を並べて就寝した。

明日の午後には葵ちゃん来る。里瑠ちゃんを連れて。葵ちゃん……まさか15年も経った今になって、まさかこんな事態になってまた葵ちゃんと関わりを持つことになるろうとは、人の運命って、一体何なんだろう……。

「シンちゃん」

「えっ？」

「まだいろいろな雑念が心にわだかまっちいる様やな」

「うん……」

周安には進の心の内は全てお見通しなのだった。

「今はひたすら心を真っ白にしておくことに努めち、後は全て明王様のお計らいにお任せするんじゃよ」

「うん……」

いい加減に煩わしい……等とも思ってしまふけれど、それだけ僕のことを心配して集中してくれているのだからと、感謝せねばならないと思った。

そうして翌日になり、ふたりはまだ薄暗いうちに起きるとまずは境内を掃き清め、本堂を雑巾がけし、そこに宿っている神々たちに感謝を込めて隅々まで丹念に掃除をした。

そして今日は進は一人白装束で滝を浴び、昨夜繰り返し唱えたお蔭で半ば暗記してしまった般若心経を唱えた。

その間周安は本堂の前に大きな櫓を組んで護摩焚き行の準備を始めていた。

櫓の組み立てが済むと、周安は本堂に入り、用意してあった大きな白い和紙を広げた。

それは畳二畳分程もある大きな紙で、周安は墨汁と大筆を使ってそこに九角形の図柄を描き、その空白部分に一文字一文字念を込めながら文字を書き入れて行く。

臨・兵・闘・者・皆・陳・列・在・前。それは昔から法力を持つ術者が邪気を払う為に使う、九字と言われる呪文である。

午後になり、二人が社務所で昼食を取り終えて後片付けをしていると、遠くから微かに自動車のエンジン音が近付いて来た。

そしてその音は徐々に大きくなり、やがて林道の入り口に一台のタクシーが到着し、後部座席から里瑠を抱いた葵が降り立った。

葵は約束通り、周安に教えられた場所へと里瑠を連れてやって来たのだ。

里瑠に取り憑いた進の生き霊を取り払うだなんて、まるで現実離れた事だとも思うが、そんなことでも里瑠の容態が良くなるのならと、葵は半ば藁にもすがる気持ちでやって来たのだ。静かな林道を眠ったままの里瑠を胸に抱いて歩いて行くと、やがて大きな山門が見えて来る。

その脇に山伏の様な出で立ちの周安が立って葵のことを出迎えてくれた。

「こんにちは、良く来ましたね、里瑠ちゃんは大丈夫かな？」

「はい、昼間のうちは発作も無いし、穏やかに眠ってるんです」

周安は葵を促して境内へと案内して行く。

葵は周安に連れられて本堂へと入る木の階段を登って行く。

入り口を開き、周安に連れられて里瑠を抱いた葵が本堂へ入ろうとすると、中で白装束を纏った進がご本尊に向かい一心に般若心経を唱えている。

進を見た葵は、中へ入れれば里瑠がまた拒絶反応を起こして泣き出してしまうのではないかと、入ることを躊躇した。

「今なら心配いりませんよ、さあ、大丈夫だからお入りなさい」

とニコニコ微笑みながら周安は促した。葵は恐る恐る中へと足を踏み入れる。

進の側へ来ても、里瑠は葵の胸でスヤスヤと寝息を立てて眠ったままだった。

「さ、ここに座って、あのご本尊様が貴方を救って下さることを信じて、お祈りを捧げて下さい」

「はい」

葵は胸に抱いた里瑠の背中に両手を回して、御本尊に向って手を合わせ、目を閉じて祈った。

進は葵の方を振り向きもせず一心に誦経を続けている。

隅の床に先ほど周安が作っていた九角形の図柄と呪文が書かれた大きな和紙が敷かれている。

「これからの段取りを説明します」

「はい」

緊張の面持ちで葵は周安の顔を見つめ返した。

「夜になるまで私は外で護摩焚きの行を行います。そして今回の除霊の為にお力を借して下さる不動明王様の霊力を十分に自分の身体の中に降ろしてから、ここへ入って来ます。そしてまず、里瑠ちゃんに霊障を与えているシンちゃんの生き霊を里瑠ちゃんから引き離します。里瑠ちゃんの身体から生き霊が離れたら、その時私が合図をしますから、すぐに葵さんは里瑠ちゃんを抱いてあの模様の中に入って下さい」

周安の指し示した大きな和紙には九角形の図柄が描かれており、その九つの欄にそれぞれ臨・兵・闘・者・皆・陳・列・在・前の九文字が書き入れられている。

「その模様は結界と言って、生き霊が離れた時そこへ入ってしまえば、もう生き霊は里瑠ちゃんに取り憑くことは出来ません。それから後はシンちゃんの身体の中に生き霊を戻す為の儀式になります。良いですか、生き霊を完全にシンちゃんの身体の中に戻してしまうまでは、どんなことがあっても結界の外へ出て来てはいけませんよ」

「は、はい」

「良いですね、私が良いと言うまではそこから一步も外へは出ないで下さい」

「はい、分かりました」

半ば半信半疑でここまで来てしまった葵だったが、ここまで手の込んだ準備がなされており、何より周安の真剣な眼差しを見ていると、これは本当のことなのだと、身体が引き締まる思いがして来る。

周安から見ても、そんな葵の真剣な眼差しに、何としても娘を救いたいという決意が表れていた。

周安は日暮れから護摩焚き行を始める為に外へ出て、葵は本堂の中で儀式の時間まで不動明王に祈りを捧げながら待つことになった。

相変わらず進は不動明王の神像に向かい一心に般若心経の誦経を続けている。

会ってから一度も葵の方を見ようとしなかったが、葵にはかえってそんな進の後姿から直向な心が伝わって来る様で、頼もしく、また進のことが健気にも思えた。

堂内の隅に座った葵はそんなことを感じながら、進の様子をじっと見つめた。

2

いよいよ陽が暮れかかり、牧挾不動尊を包む森に夕闇が降り始めた。

周安は不動堂の前に設えた大櫓に火を放ち、
護摩木と呼ばれる特別な薪をくべて行く。

ボウと火の粉を散らして燃え上がった炎が、赤く周安の顔を照らし出す。

周安は手にした大きな数珠を両手でジャラジャラと弾きながら大声で真言と呼ばれる経文を唱え始める。

「ナウマクサマンダーバザラ、ダンセンダ、マカロシャダソワタヤーウン、タラターカンマーンッ！」

周安の腹に響く様な低音でドスの効いた真言は本堂の中にも響き渡った。

葵はビクリとして外の方を見たが、入り口は窓のない扉に閉ざされており、外の様子を伺うことは出来ない。

進は何も聞こえないかの様に一心に般若心経を唱え続けている。

櫓の中に周安が次々に護摩木をくべて行くに連れ、炎は一層激しくなり闇の中にバチバチと音を立てて燃え上がる。炎に照らされて浮かび上がる周安の形相は、まさに恐ろしい不動明王像の姿が乗り移ったかの様であった。周安の唱える真言が闇に轟く。

本堂の中で進は一心に般若心経を唱え続け、葵は里瑠を抱きしめてその光景を見つめている。

やがて周安の唱える真言の音が、数珠を鳴らすジャラジャラと言う音と共に本堂に近付いて来る。

その声は本堂の入り口の木の階段を登って来た。葵が見ると勢い良く扉が開け放たれ、そこに鬼の形相の周安が仁王立ちになっている。

「ああっ……」

その怒りに満ちた様な凄まじい形相に思わず葵は声を上げた。

周安は右手に大きな数珠を、左手には長いロープの様な注連縄を持ち、そのまま大声で真言を唱えながら中へ入ると扉を閉める。

周安は数珠をかけたままの右手を懐へ入れ、中から真言の書かれた護符を取り出すと自分の入って来た扉の境目にバーンと貼り付けた。

「ナウマクサマンダーボダナンアジナンジャーヤーサラバサトウバージャヤドギャテーイーソワカ、ナウマクサマンダーボダナンボクオンマーユラギャランデーソワカ……」

周安はそのまま大声で真言を唱えながら部屋の隅を歩き回り、ジャラジャラと数珠を鳴らしては懐から護符を出し、本堂の中にある全ての扉や窓の境目にバーンと貼り付けて行く。

そして最後に葵の前に立ち、眠っている里瑠の頭に手をかざしたかと思うと、数珠と注連縄を掛けた両腕を胸の前で組み合わせ、ひと際凄まじい声で九字の呪文を唱えながら、印と呼ばれる形に指を素早く組み変えて行く。

「臨！ 兵！ 闘！ 者！ 皆！ 陳！ 列！ 在！ 前！」

途端に火が付いた様に里瑠がぎゃーと泣き声を上げて身をよじる。

「さーあ、高本進の霊よ！ 速やかにこの娘の中から出て行けーえ！」

ドーンと脚を踏み鳴らすと同時に周安は里瑠に向かって掲げた数珠をグルグルと振り回し、バァッと宙に向かって振り払う様にブン回した。

途端にバァーンと雷が落ちた様な衝撃音と閃光が部屋の中で炸裂し、気を失った様に里瑠がガクリと葵の胸に崩れ落ちる。

「さぁ！ 今です、葵さん！ 結界に入ってっ！」

「はいっ！」

里瑠を抱いた葵が転げ込む様にして和紙に書かれた結界の中心に入った。

何処からともなく「おおおおお〜」と言う人のものとも獣のものとも思えない奇怪な咆哮が発せられ、辺り一面に響き渡る。

周安は闇に向かって数珠を振り回して真言を唱え上げる。

「ナウ〜マクゥサマンダァボダナン〜アビラウンケーンッ！」

まるで本堂の中を見えない何者かが暴れまわっている様に、壁や扉に向かって何かがぶち当たるドタバタと言う音が響き渡る。

まるで何者かが外へ出ようとしても出られずにもがいている様である。

「高本すすむーっ！」

脇目も振らず一心に経文を唱えていた進に対して、周安が名を呼びつける。

「……」

その声で進が沈黙し、一瞬本堂の中は静寂に包まれる。外で焚かれている護摩の燃える音だけがパチパチとかすかに響いて聞こえている。

周安はまるでご本尊の代理人であるかの如く進の正面に仁王立ちになり、もの凄い形相で進を睨みつけている。

「おう！ 高本進よ。今こそテメェの恨みを聞いてやろうじゃねえか」

「えっ？」

思わずキョトンとした顔をして進は目を開いた。目の前には不動明王の神像よりも恐い顔をした周安が立ち、進を睨みつけている。

「言ってみろコラァ！ テメェの正体晒してみろよ！ さぁ言えっ！」

「えっ、でも、僕は……」

あまりの変貌振りに、進には目の前に立っている鬼の様な形相の坊主が周安だとはとても信じられなかった。

「テメェは一体どう言う了見でこの人をこんなに苦しめてるんだ」

「違う、僕は、葵ちゃんを苦しめようなんて思ってないっ」

「嘘つけェ！」

周安はいきなり進の胸倉を締め上げて、凄い力で身体を引き摺り起こした。

進は目を見開いて周安を見る。

「現にこの里瑠ちゃんはこんなに苦しめられてるじゃねえか！ コラァ！ よく見ろ！ この子を苦しめてんのはテメェ以外の誰でもねえんだよう！」

ズダーンと音をたてて進の身体は床に叩き付けられる。

「そんな……」

結界に入った葵がグッタリしたままの里瑠を胸に抱き、周安の余りの強行に恐れ戦いた様子で見つめている。

周安は物凄い形相で進のことを睨みつけ、ドスの聞いた声で恫喝した。

事情を知らない者が見ればまるでヤクザが脅しを掛けている様な迫力だった。

「さあ！ テメエの本音を白状してみろ！」

床に倒れた進の胸倉をつかみ、高く持ち上げると、凄い力で床に叩き付ける。

ドダーン！

叩き付けられた腰を手で押さえながら、周安の凄まじい迫力に涙目になってしまった進は、恐ろしさの余り震え出してしまう。

とにかく何か言わなきゃ、何か言わなきゃ殺されるのではないかと思い、どもりながらも無理に言葉を発し始める。

「……ぼ、僕は、そもそも僕は……この人のことをあんなに好きにならなければ……こんなことには、ならなかったんです」

「ああ？ 何だっ？ 声が小さくて聞こえねえんだよ！ もっと大きな声でハッキリ言ってみろコラァ！」

「は、はいっ！ そもそも僕はっ、この人のことをっ！ あんなに好きにならなければっ！ こんなことにはっ！ ならなかったんだぁっ！」

半ば自棄になった進は頬に涙を流しながら叫ぶ。

「この人と言うのは誰のことだぁっ！」

「それはこ、ここにいるっ！ 依野葵さんのことですっ！」

結界の中で里瑠を抱きながら、葵はじっと進を見ている。

「そうか、テメエはそんなにこの人のことが好きだったのか！」

「は、はいっ！ ……大好きだったよう。だからあんなことになった時……」

「あ？ あんなこととはどんなことだ？」

「……」

「言ってみろ！ あんなことってなァ何だよ！ 一体何があったんだっ！」

「あ、葵ちゃんが、葵ちゃんが……研究室で、……」

「あぁっ？ 何だ？ 聞こえねえんだよ！ ちゃんと喋らねえかコラァッ！」

周安が足を上げて進の顔を踏みつけにした。そのままダーンと音を立てて進の顔が床に叩き付けられる。

進は恐怖に耐えながらもやっとのこととて言葉を搾り出す様に言う。

「だから葵ちゃんがっ……葵ちゃんが……研究室で……研究室で！」

結界の中にいる葵は思わず耳を覆ってしまう。

「研究室でどうしたぁっ！」

堪えきれずに進は泣き出してしまう。

「テメェで言えねえんなら言ってやろうか、研究室で他の男とまぐわってたんだろうが！」

「……」

「それをお前が見たんだろうが」

「はいっ……」

「その相手をお前はどうかした？」

「……」

「あ？ どうした？ 言ってみろ、そのことでテメェはその相手の大垣彰と言う人間を一体どうしたんだ？ あ？ 言ってみろ、言ってみろよコラァ！」

「……」

「どうした？ 言えねえのか？ 隠したって分かってんだぞっ！ 明王様には何だってお見通しなんだぞ！」

微かに首を横に振りながら、進は戦慄している。

「言えねえんなら言ってやろうか、お前がなあ、殺したんだよお！」

「違う、違う、違う違う……」

進は目をギュッと瞑って激しく首を振る。

「僕じゃない！ 僕がそんなことする訳ないじゃないか」

「嘘つけ！ お前以外の誰がやったってんだ！ さあ言ってみろ！ お前が大垣と言う男をどれだけ憎んでいたか白状してみろーっ！」

あまりに理不尽に怒鳴りつける周安に、進も逆上してしまい、声の限りに怒鳴り返した。

「大垣の野郎はわざと僕が見る様に仕向けたんだ！ 僕が葵ちゃんのこと好きなのを知ってて……アイツはわざと葵ちゃんとセックスしてるところに僕が来る様に仕向けたんだ～うっうっ……なんて卑劣なヤツなんだ。お坊ちゃん育ちで女にもてるからって良い気になりやがって、自惚れたイヤな奴だったよ、死んでざまァミロだ！ そうさ、僕が殺してやったのさ！ あいつのマンションから突き落としてやったんだ！ あの時研究室でアイツは僕に見られても気にしてないフリしてこう言いやがった。よっ、ご苦労さんだってさ、葵ちゃんは僕の顔見ると真赤になって、慌てて飛び出して行ったよ、僕の葵ちゃん……あんなに可憐で可愛らしかった葵ちゃんが、あんな汚いヤツに……ちくしょうううちくしょううううっうっ～～地獄に落ちてせいぜい苦しめば良いんだ。あんなに僕を苦しめて、僕の人生を台無しにした報いだ！ あーっはははははははは……」

進の笑い声は、進の口から出ているだけではなかった。宙全体に、本堂全体を揺るがす様に反響し、それに連れて暗闇から進と全く同じ様に口を動かしながら泣き喚いているもう一人の高本進の顔がボウッと現れた。

それは青白い顔をしてギョロリと黒く光るビー球の様な目をしている。そして叫び続ける進と一緒に恨みの言葉を激白する。

「きゃああああ」

葵は里瑠を抱きしめて目を閉じてしまう。

周安は生き霊の姿を睨みつける。

「正体を現したなっ、昭和台病院の村麦医局長と栃木県警の所田刑事を殺したのもお前の仕業

だなっ！」

「わーははははは……村麦は自分が上の立場だからって、散々僕のことコキ使いやがって、子分だなんて言われて素直に言うこと聞けるヤツが何処に居るかってんだぁ〜あの刑事は、僕が触れて欲しくないことを暴き出して、人を殺人者呼ばわりして僕の生活をメチャメチャにしようとしやがったんだぁ！ どうして、どうしてそっとしといてくれないんだよぉ〜」

宙に漂いながら進と同時に激白する生き霊は、血の涙を流しながら吠え続ける。

「葵ちゃん〜葵ちゃん〜僕は本当に君のこと愛していたんだよ〜お〜」

「やめて、お願いもうやめて高本クン」

耳を覆って葵が叫ぶ。

「ちくしょう。あの時は胸を焼かれるくらい苦しくて、あんなに声を出して泣いたことは無かったんだぞう、後にも先にも……ちくしょう、ちくしょうちくしょうううう……」

生き霊は葵に迫る。結界の中で里瑠を抱きしめて震えている葵に向かって激白する。

「きゃああああ！」

巨大化した青白い生き霊の顔が、葵が胸に抱いた里瑠諸共飲み込んでしまいそうなくらい、大きく口を開けて目前に迫って来た……。

「……僕が一体お前の為にどんな思いをして来たと思ってるんだ！ あれから僕はアパートから一步も外へ出ることが出来なくなった！ 医大を中退したのもお前のせいだ！ お前のことなんか好きにならなければあんなことにはならなかったんだ！ 僕だって立派な医者になって、村麦みたいに豪勢な生活をしていたはずなのに、どうしてくれるんだ。僕がこんな俺しいサラリーマンしてるのはお前のせいだ！ 僕の人生を返せ！ 元に戻せっ！ 僕の為に大金を払って医大に行かせてくれた両親にだって合わせる顔が無いじゃないかぁ！」

「いやーっ、お願いもうやめてーっ！」

数珠を激しく振り回しながら葵と生き霊の間に周安が立ち塞がる。

「いい加減にしろコラァ！ テメェは逆恨みするにも程があるんだよぉ、分からねえのかあっ！」

周安の振り回す数珠からまるで強風が発せられているかの様に生き霊の顔が怯み、煽られて空中で歪む。

「ちくしょおおおっ……お前を苦しめてやるうっ！ 僕にあんな思いをさせた報いだ……葵ちゃん……好きだったようう〜殺してやりたいくらい……どんなことよりも、僕はあの時、あのことが……それだけで僕は自分のことが何も出来ない木偶の坊みたいに思ってしまったんだよう〜おう〜」

「ノウマクサラバタタギャテイビャク〜サラバボッケイビャク〜サラバタタラタ〜センダマカロシャダ〜ケンギャキギャキ〜サラバビ

ギナン〜ウンタラタ〜カンマン……」

ブツブツと真言を口にしていた周安が進の側に近寄り、数珠を持った手を高く掲げたかと思うと「カーッ！」と言う気合と共に進の前に振り下ろした。

「臨兵闘者皆陳列在前……」

目にも留まらぬ速さで組み合わせた両手の指の形を変え、印を踏んで行く。

「エイーツ！」

ドーンと凄まじい音を響かせて周安が床に足を踏み込むと同時に進は沈黙し、ハッと我に返った様に周安を見上げる。

「ショウタ……僕は？」

「シンちゃん。これが本当のシンちゃんの正体なんじゃよ」

「違う！ 違う、僕は違うよ、信じてくれよ、葵ちゃんの娘を苦しめるだなんて……僕が、そんな訳ない、僕は葵ちゃんを恨んでなんかない、医者になんかなれなくたって、今のままで充分幸せなんだよ、お金持ちじゃなくたって、社会的地位なんかなくたって、僕にだって家庭があるじゃないか……それが僕の人生なんだよ。本当だよ僕は人を苦しめたりはしないよ」

必死に訴える進とは裏腹に、宙に浮遊する生き霊は恐ろしい形相をして叫ぶ。

「違う！ 嘘をつくな！ 僕はこの人を死ぬ程恨んでるんだ！」

「違う！ 僕はそんな人間じゃない、大好きだった人を苦しめようなんて思うはずないじゃないか」

「僕がうだつが上がらないのは全部この女のせいだ！ イライラする毎日、ストレスばかり溜めて毎日我慢して、それは全部あのことのせいだ！ どうせ僕は女にもてない、仕事だって一生平社員だ。女房の尻に敷かれて平凡な取るに足りない生涯を送って死ぬだけじゃないか！」

「その何処がいけないんだ！ 神様に与えられた運命を受け入れて自分の人生を精一杯生きることが、何がいけないんだ！ それが一番の幸せなんだぞ」

「心にもねえこと言ってんじゃねえよ！ 誰が言ってるんだあ、そんなのは僕の言葉じゃないーっ」

周安と葵の見守る前で、進と生き霊は凄まじく罵り合う。

汗びっしょりになり、涙を流しながら嗚咽に耐えて、進は自分に負けじと叫ぶ様に声を張り上げた。

そんな進に助け舟を出す様に周安が活を入れる。

「頑張れ！ シンちゃん！ 今こそ自分が救われる為に、葵さんを救う為に神仏に祈るんじゃ！ 心から祈りを込めてお助けを乞うんじゃ！」

「ごめんなさい、ごめんなさい、僕は自分の人生が冴えないことを全て葵ちゃんのせいにしていました。僕は卑怯な男です。この前も欲望に駆られて卑怯な振る舞いをしようとしてしました。こんな自分は絶対に許せません。僕はそんな人間ではありません、どうか僕をお助け下さい。僕を本来の僕に戻して下さいお願いします……」

そんな進に生き霊は更に攻撃を加えて来る。

「嘘つけよ～僕の中は恨み辛みでいっぱいじゃないか～」

「与えられた仕事に感謝して、妻と子供がいることに感謝して、これからは周りのこと全てに思いやりを持って生きて行こうと思います。だからどうか里瑠ちゃんを助けて下さい。この子は健康に生きて行く権利があるのです。僕のような卑怯な人間に邪魔されては行けない。神様仏様、力を貸して下さいお願いします。この世に生まれ出たことに感謝して、これからも自分の人生を受け入れて精一杯生きて行きたいと思います……観自在菩薩(くわんじざいぼさつ) 行深般若波羅蜜

多時（ぎやうじんはんにやはらみつたじ）照見五蘊皆空（せうけんごうんかいくう）度一切苦
厄（どいちさいくやく）舍利子色不異空（しやりししきふいくう）空不異色（くうふいしき）色
是空……」

進は一生懸命に般若心経を唱える。心から邪心が消えて行く様に、心の底から慈愛に満ちた気
持ちになれます様に、心から願いを込めて祈る。

暗闇に浮かぶ生き霊の顔が強風に煽られる様に歪み、苦しみ始める。

「うう……うわああああっ……」

顔を歪め、苦しみながら宙を舞う様にのたうつ。

そして進の身体に引き寄せられ始める。逃れようとして必死にもがきのたうつ。

「シンちゃん！ 負けるな、今こそ生き霊を自分の中に取り戻すんじゃ！」

その声に励まされて、進は一層声を張り上げて経文を唱えた。

「般若波羅蜜多時（はんにやはらみつたじ）照見五蘊皆空（せうけんごうんかいくう）度一切苦
厄（どいちさいくやく）舍利子色不異空（しやりししきふいくう）空不異包（くうふいしき）包
即是空（しきそくぜくう）空即是包（くうそくぜしき）受想行識（じゆさうぎやうしき）亦復如
是舍利子（やくぶによぜしやりし）是諸法空相（ぜしよほふくうさう）不生不滅（ふしやうふ
めつ）不垢不淨（ふくふじやう）不増不減（ふぞうふげん）是故……」

中空を顔を歪めながらのた打ち回る進の分身が強風に押し返される様に後ろ向きに引き寄せ
られ、進の身体と同化してしまいそうになる。

進の誦経が続き、生き霊は「ギョエー……」と苦しみ悶え、苦悶の叫びを上げながら進の中に
引きずり込まれて行く。

生き霊が震えながら進の身体に重なった瞬間。周安は持っていた注連縄の束を解いて真言を唱
えながら進の身体に投げ付け、グルグル巻きにして行く。

まだ進の身体に同化しきれずのたうつ生き霊諸共、周安は進の身体をギュウギュウと縛り上げ
て行く。

その時、凄まじい恐怖と苦痛が進の全身を襲う。それは自分から抜け出てしまった怨念を吸収
することの苦しみだった。他者に対して自分が発した強烈な敵意が自分に向う場合、その威力は
倍になって返って来るのだ。

縄で縛られ動けなくなった進は床に倒れ込み、転げまわって苦しみ悶える。進の身体から逃れ
ようともがく生き霊の姿が二重写しの様に進の身体からブレて見える。

同化されまいと進の中でのたうつ生き霊と、清い心に改心したいと念ずる進の念とが激しい衝
突を繰り返し、それが耐え難い苦痛となって進の身体を打ちのめしているのだ。

「ナウーマクサマンダーバザラ、ダンセンダ、マカロシャダソワタヤーウン、タラターカン
マン……」

周安が数珠をジャラジャラと打ち鳴らしながら真言を唱えるに連れて、暴れていた進は次第に
動きを弱め、やがて気を失った様に動きを止めてしまう。

「ナウ〜マクウサマンダァボダナン〜アピラウンケン……」

「高本クン……」

その様子を、結界の中で里瑠を胸に抱きながら葵はじっと見つめている。

3

やがて本堂の外で鳥たちがさえずる声が聞こえ始め、締め切った扉や窓の隙間から朝日が筋となって本堂の中へ差し始めた。

注連縄で縛られ床に転がされている進はまだ気を失っている。

その横で周安は不動明王の神像に向かって読経を続けていた。

結界の中の葵は心配そうに床に倒れた進を見つめている。胸で眠っている里瑠の顔は醜い発疹やカサブタがすっかり取れて、元のスベスベした子供らしい肌に戻り、安らかな顔をしてスヤスヤと眠っている。

気を失って倒れていた進の身体が僅かに動く。

ハッとして葵が見ると、進は「う〜ん」と呻く様に声を発して身をよじる。するとあれだけが感じ絡めに縛られていたはずの注連縄が触れもしないのに自然にハラリと解けて行くではないか、驚きのあまり葵は目を見開いてしまう。

周安が読経をピタリと止め、進の方を振り返る。

目を閉じたまま進は縄が解けて自由になった両腕を「う〜ん」と上にバンザイする様にして伸ばし、眩しそうに顔をしかめて薄く目を開く。

「……………」

「高本クン？……………」

「えっ？」

葵の声に呼ばれた進は目を擦りながら葵の方を見る。そして不思議そうな顔をして起き上がる。

「葵ちゃん……………」

それから自分のことをじっと見つめている周安の方へ視線を移す。

「ショウタ……………」

そんな進の様子を見た周安はニッコリと微笑んでウンウンと頷いて見せる。

「良かった……………もう大丈夫」

「えっ……………」

と進はまだ訳が分からないと言う風に自分の両手を見たり、顔を触ったりして確かめ、ボンヤリと辺りを見回しながら立ち上がる。

そしてフラフラと歩いて行き、本堂の入り口の大きな扉をガラガラと開け放った。

闇に包まれていた本堂の中が眩い朝日に満たされて行く。

余りの眩さに目を開けていられないくらいだ。

ようやく目がなれて進は外を見上げると、抜ける様な青空が視界よりも広く広がっている。

「あっ、凄い、お外に行ってみたい！」

振り返ると、すっかり元気になった里瑠が結界の中にいる葵の胸から飛び出して入り口に立つ

進の脇を走りぬけ、木の階段を降りて境内の庭へ飛び跳ねながら走って行く。

「ねえママママ来て、凄いよ！ お花がいーっぱい、広いお庭だよ～」

外からの里瑠の声に呼ばれて葵もフラフラと立ち上がると、進の横へ来て外を見る。

見ると昨日は全く気に止めなかったが、境内の中は色とりどりのたくさんの花が溢れんばかりに咲き乱れている。

「高本クン……大丈夫？」

葵は進の顔を見つめた。進の顔もすっかりやつれたところが無くなり、血色も良くなり生き生きとしている。

「うん」

葵を見てニコリと笑った顔はもう健康そのものだった。

「葵ちゃんは？」

「うん……大丈夫」

進は堂内から二人を見守っている周安の方を振り返った。

「ねえショウタ、ショウタが僕を縛った縄を解いてくれたの？」

その問いに周安は首を横に振り、床に落ちたままの縄を拾いながら言う。

「こん縄は邪悪な物だけを縛ることが出来るんじゃ。シンちゃんの心から邪悪な物が消えたけん、それで自然に解けたんじゃ」

その言葉に進も思わず不思議そうに縄を見てしまう。

「ママ～早く来て、ねえ里瑠ちゃんにお花取ってよ～早く早くう～」

「はいはい、今行くからねー」

里瑠の声に葵も本堂を出て階段を降り、里瑠の待つ庭へ向って駆けて行く。

その様子を見つめている進の胸に、嬉しさが込み上げて来て一杯になる。

「高本クン」

庭で里瑠ちゃんと遊んでいる葵が進の方を振り返って言った。

「なに？」

「ありがとう」

進は顔を横に振って笑顔で答える。

抜ける様な青空と眩い太陽が、静かな森の中に佇む牧挾不動尊を包んでいた。

その日は無事に里瑠ちゃんからの除霊と、生き霊を進に戻す儀式が出来たことを感謝し、お力を貸して下さった不動明王様へのお礼をする為に、三人は並んで御本尊に向ってお昼まで読経を捧げた。

それからすっかり元気になった里瑠ちゃんと葵を先にタクシーで送り出した後、残った進と周安は護摩を炊いた櫓の燃えカスや、本堂の床から儀式の為に上げてあった畳を元に戻したりして後片付けした。

最後の片付けを終えて陽も暮れかけた頃、後は住職様を待つばかりになって、ふたりは静かな本堂に座っていた。

「ねえショウタ、いや周安様」

「ふふ、ショウタで良いっちゃ」

「でも」

「良いって」

今の進には、ショウタがあの子の頃、苛められっ子で泣き虫だった頃の様には全く見えない。尊い修行を積み、偉大な力を持った霊能者周安がここにいる。

でも、進のそんな思いとは裏腹に、周安にニコニコと柔和な笑顔で相対されると、こちらから気楽に話しかけたいような空気を醸し出しているのだった。

それこそがまさしく周安と言う名に価する彼の徳なのかと進は思う。

「ねえショウタ」

「うん？」

「本当にありがとう」

「うん」

「命の恩人だよ」

「ふっ、そげな、オーバーじゃて」

「でもさ」

「なに？」

「いや……これで良いのかなぁと思って」

「何がじゃ？」

「いや、僕と里瑠ちゃんはこれで救われたけど、その、僕が殺してしまった大垣さんと、村麦さんと、所田さんのことが……」

「うん、もうそれは、どうすることも出来んことじゃ」

「でも」

「確かにそれはシンちゃんの中に潜んでいた邪悪な心が犯してしまった罪かもしれんけど、この世の法律では、それを立証して裁くことは出来んのじゃから」

「だけど僕は……」

「そうやな、シンちゃんはそん罪を、これからも背負って生きて行かにゃならんのやな」

「どうすれば良いんだろう……」

「シンちゃんはどう思う？」

「やっぱり、ご遺族に、お詫びしに行かなきゃ……」

「うん、でも遺族の方だって、いきなりシンちゃんが訪ねて行って、御主人は私が殺しましたなんち言うても、ヘンな人が来たと思うち迷惑を掛けるだけなんじゃよ」

「そうか……それもそうだね、だけど」

「シンちゃんに出来ることは、これからもあの時神様に誓った様に清い心で生きてくことと、死んでしまった方たちには、人知れずご供養することだけなんじゃよ」

「……」

やがて山門の下に車が到着する音がして、二人は住職様を出迎える為に本堂を出て下へと降りて行った。

二人は戻って来た住職様に丁重な礼を述べ、牧挟不動尊を後にした。

4

三日振りに自宅に戻った進を見て、出迎えた好江と美由は目を疑うばかりだった。

あの老人の様にやつれ果てていた進が、まるで青年の様に若返って帰って来たのだ。

テーブルに乗り切らない程の手料理を用意して待っていた好江はただ「よかった」と何度も繰り返して、笑顔で涙を流した。

翌日から仕事に復帰した進は他人から見れば勿論のこと、進自身も前とは別人の様になった自分を感じる。

妻がいること、娘がいること、そして仕事があることがこんなにも素晴らしい事だったとは。

そして出会う物、今自分が目にする物全てにありがとうと言って感謝したい気分になっている。

相変わらずの満員電車で揺られて顔を歪めながらも、進は楽しくてしょうがないと言う風にニコニコしている。

傍から見ればかなりヘンな人間と思われているに違いない。

いつもの様に御茶ノ水駅を降りる。

いつもの様にオフィスビルに入り、いつもの様にカウンター脇に設置してあるタイムレコーダーにタイムカードを差し入れ「お早うございます」とオフィス全体に響く様な挨拶をして自分のデスクへと向う。

そこへ総務の倉橋俊子がやって来た。

「お早う高本君」

「お早う御座います」

「なんだか近頃すっかり調子良さそうじゃない」

「そうですか」

「もしかしてまた好江ちゃんと愛が燃え上がっちゃってたりしてねっ、二人目のお子さんも近いんじゃないかしら、まさかもう出来ちゃってたりして」

「煩いんだよ……」

「えっ？」

「煩いんだよ、いつもいつも……いい加減にしろよっ！」

……驚いたのは進の方だった。気が付くより先に言葉が唇を迸り出していた。

俊子はビックリした顔をして目を見開いて進を見ている。まるで信じられない物でも見た様な顔だ。

「い、いえあの、私そんなつもりじゃ……」

「あ、すみません」

思わず進も謝っていた。

見るとその時オフィスにいた他の社員たちも、始めて聞く進の大声に茫然とした様に静まり返

っている。

その空気に俊子は居た堪れなくなっていてしどろもどろになっている。

「ごめんなさい、あの、私……」

ときこちない風に歩いて進のデスクから去って行く。

進の方も気まずくなってしまう、そそくさと鞆を持ってオフィスを出てしまった。

午後の営業を終えてオフィスに戻って来た進は、俊子のいる総務へ立ち寄り、小さな菓子折りを持って俊子のいるデスクへと来た。

「あのう、倉橋さん……」

「は、はい」

と進に気付いた俊子もぎこちなく返事をした。

「コレ、営業先のお客さんから頂いちゃったんですけど、名古屋のお菓子らしいんです。良かったら、皆さんで一緒にお茶の時にでも、どうぞ」

差し出された菓子折りを受け取って俊子は戸惑った様に進を見る。

「あ、ああ、そうですか、それはわざわざどうもありがとうございます……」

と大げさに笑顔を作って見せた。

俊子に菓子折りを渡した後、営業部の自分のデスクに戻っていた進のところへ、お茶と進が持って来たお菓子を皿に乗せて俊子が来る。

「ありがとう高本さん。コレ美味しいですよ、高本さんも食べてみてよ」

「あ、はい、ありがとうございます」

と進も笑顔で受け取ると、俊子は総務課の方へ戻って行く。

「高本さん」と俊子は言った。恐らくもう二度と以前の様に「高本君」と呼ぶことはないだろう。

自分が怒鳴ったことで俊子さんは傷ついたらろうか、きっと傷ついたらろう。でもそのお蔭で僕の彼女に対する不愉快な心は晴れて、

きっとこれからはお互い気持ち良く円滑な関係を保って行けるだろう……。

今までの進だったらあんな言い方は絶対にしなかったはずだ。

あの生き霊が僕と同化したお蔭で……嫌、それは違う。アイツは元々僕の中にいた者なんだから。それを僕が無理に封じ込めていただけなんだから、元々アレは、僕なんだから……。

アイツは……ここにいる。僕の中に、そしてこれからは僕が世間に負けない様に生きて行く為に、力になってくれるに違いない。

そう、僕が表で、アイツが裏で、でも確かに僕等は表裏一体。

周安が言っていた様に、全てはプラスとマイナスなんだ。善と悪、強さと弱さ、表と裏、僕とアイツ……。

進の顔つきも以前とは少し変わっていた。

どちらかと言うとタレ気味だった目尻が少し吊り上がった様な感じになった。そのパッチリと開いた目がいくらか悪びれた印象さえ与える。

進は営業の間を縫って世田谷区成城の村麦の家を訪ね、改めて祭壇へ線香を上げた。

その時家にいたのは村麦の妻則枝だけだったが、葬式が終わってこれ程日が経っているのに、

尚夫の為にご焼香に来てくれる友人は貴方だけだと言って進の来訪を喜んだ。

そんな村麦の妻に進は申し訳ない気持ちで一杯になったが、自分が殺した村麦に対する罪の意識の様な物は、不思議と浮かんで来ないのだった。

それから大垣彰と所田義晴の墓参りをしようと思い、週末を利用して栃木県真岡市を訪ねた。

遺族に会うつもりは無かったのだが、大垣彰の墓石に手を合わせているところへ、偶然妻の圭子が小学生の二人の子供を連れて来てしまった。

「主人の、お知り合いの方ですか？ 遠いところをありがとうございます」

と感謝され、深々と頭を下げられたのには恐縮してしまった。

大垣の残したまだ2年生の男の子と1年生の女の子を見ていると胸が押し潰されそうになる。

「僕は……大垣さんに、お詫びを言う為に来たんです……」

思わず口走っていた。

「は？ お詫びと言うのは？」

「はい、実は僕は……」

まさか御主人を殺したのは僕なんです……とは言えなかった。

「生前に僕は、御主人のことを、酷く憎んでいたことがあったものですから……」

「主人を憎んで？ ですか、でもそれは一体どう言ったことで？」

「はい……御主人は学校の成績が良くて、容姿も端麗で、お家柄もとっても良かったものですから、僕は、その、妬んでいたんです。羨ましくて、僕は、とても卑怯な男だったんです……」

言っているうちに涙がこぼれて来る。

「どうも……申し訳ありませんでした」

歯を食い縛って頭を下げる進をじっと見て、圭子は驚いてしまった。

「いえ、そんな、いいですよそんなことは、貴方はとても正直な方でいらっしゃるね」

「いえ、僕は、そんなことではないんです」

「私は、とても嬉しく思います。主人のことを、そんな風に思って下さる方がいてくれたことを、誇りに思います」

建ち並ぶ墓石の周りを走り回り、遊んでいる二人の子供たちと圭子の前で、進は頭を下げたまま上げることが出来なかった。

そして所田義晴刑事の墓を訪れるべく、墓の所在を教えて貰おうと、生前所田が勤務していた栃木県警所轄の真岡署を訪ねることにした。

真岡署は真岡鉄道の真岡駅からバスに乗り、県内から茨城県へと流れる美しい五行川を渡ったところにあった。

前が広い駐車場になっており、三階建ての古びた署舎が建っている。

ここであの刑事さんは何十年も勤めていたんだ……。

中へ入り、受付の担当者に来訪の旨を告げると、奇異な目で進のことを見つめたかと思うと奥へと向かい、進の方をチラチラと見ながら上司らしき人に相談している。

するとその上司らしき男が席を立ててやって来た。

「あのう、所田さんにはお世話になったので、是非ともお墓に詣でさせて頂きたいのですが」

と言うと。

「そうですか、所田さんのお墓はですね、遠縁に当たるご親族のお墓に合葬されていて、ちょっと遠いですよ」

と、所田の親族の墓のある場所を教えて貰うことが出来た。

それは真岡市から私鉄を乗り継いで3時間余りも行った那須郡のうら寂しい町外れにあった。

人気のない墓地の中を歩き回って探し、所田家の墓石を見つけた。

墓石の側面に並んで彫られた名前の末端に、義晴と言う名前を見つける。

ああ……あの刑事さんが生きていた名残りを残す物は、もうこの小さな名前だけなんだな……
と思うと、うら悲しい思いが込み上げて来る。

生前のあの薄汚れた所田の風貌を思い浮かべながら、線香を上げて合掌した。

周安の言う様に、人が死んでも靈魂が永遠に行き続けているものなのだとしたら、今こうして墓参りに来ている進のことを、所田の靈は今何処かで見ているのだろうか。

所田の靈は進のことをどう感じているのだろうか……。

そう思った時、進の脳裏に閃く物があった。それは「所田は進のことを恨んで等いない」と言うことだった。

それどころか、今こうしてはるばる訪ねて来てくれたことを喜んでくれている……。

勝手な解釈と言われればそれまでなのだろう。だが、何故か進はそう確信出来る気持ちになってしまうのであった。

周りの人間から奇異な目で見られながらも、進の生き靈の犯行を殺人事件として立証する為に孤軍奮闘していた所田。

警察官としての人生最後の大舞台として、この事件に命を賭けていた所田の戦い。

寂しい墓地に風が吹きすさび、進の捧げた線香の煙をたなびかせて行く。

おわり

あとがき

この作品は電子書籍の第二弾としていますが、実は「そこにいた女」よりも前に書いたものです。

ハイ、お察しの通り、本作も某公募に応募したけど遭えなく落選した物です。なので掲載するのは非情に恥ずかしかっただけけれど、同じく落選作の「そこにいた女」を3年も掛かって書いた腹いせ？ に時流に乗った電子書籍として掲載してみたところ、思いがけない反響を頂きまして、次回作を求める声も頂いている状況に気を良くして？ というか調子に乗って本作を引っ張り出して来た次第です。

というか次に準備している長編が書き上がるのはいつになることやら……という危惧もありまして、それまでの間繋ぎにと、苦し紛れに持って来た感じでもありますが……。

コレが落選した時に自分で思ったのは「ホラーとしてはちっとも怖くない」ってことでしょうかね。やっぱしホラーってのはある程度「得体のしれない」不気味さというか、恐怖が無いと弱いですねえ。

僕は長いことシナリオや演劇を志向してきたせいもあって、人間的な葛藤の方に主眼が行ってしまう嫌いがあります。ラストの霊能者を挟んでの主人公と生き霊の戦い等は、そのまま舞台劇を書いている様な感覚でした。

主人公の抱えている葛藤や人物の図式等が、割とスパッと割り切れてしまうので、ホラーとしては却って面白味に欠ける……ということになってしまったのかなぁと……そんな風に反省しています。

本作を書いた時においても、医療関係の描写全般に渡り間違いや現状を指摘・アドバイスしてくれた友人の中嶋賢尚医師に感謝しています。

他には特に参考にした文献というのは無かったと思うのだけれど、徐霊の儀式の描写は昔夢中になって読んでいた、つのだじろう先生の「恐怖新聞」第六巻に出て来る場面を大分参考にさせて頂きました。

その他、不動明王像の所以や護摩焚き、周安の唱える真言・般若心経等はインターネットに掲載されている関係サイトから調べさせて頂きました。

平成23年

7月11日

竹村直久

